

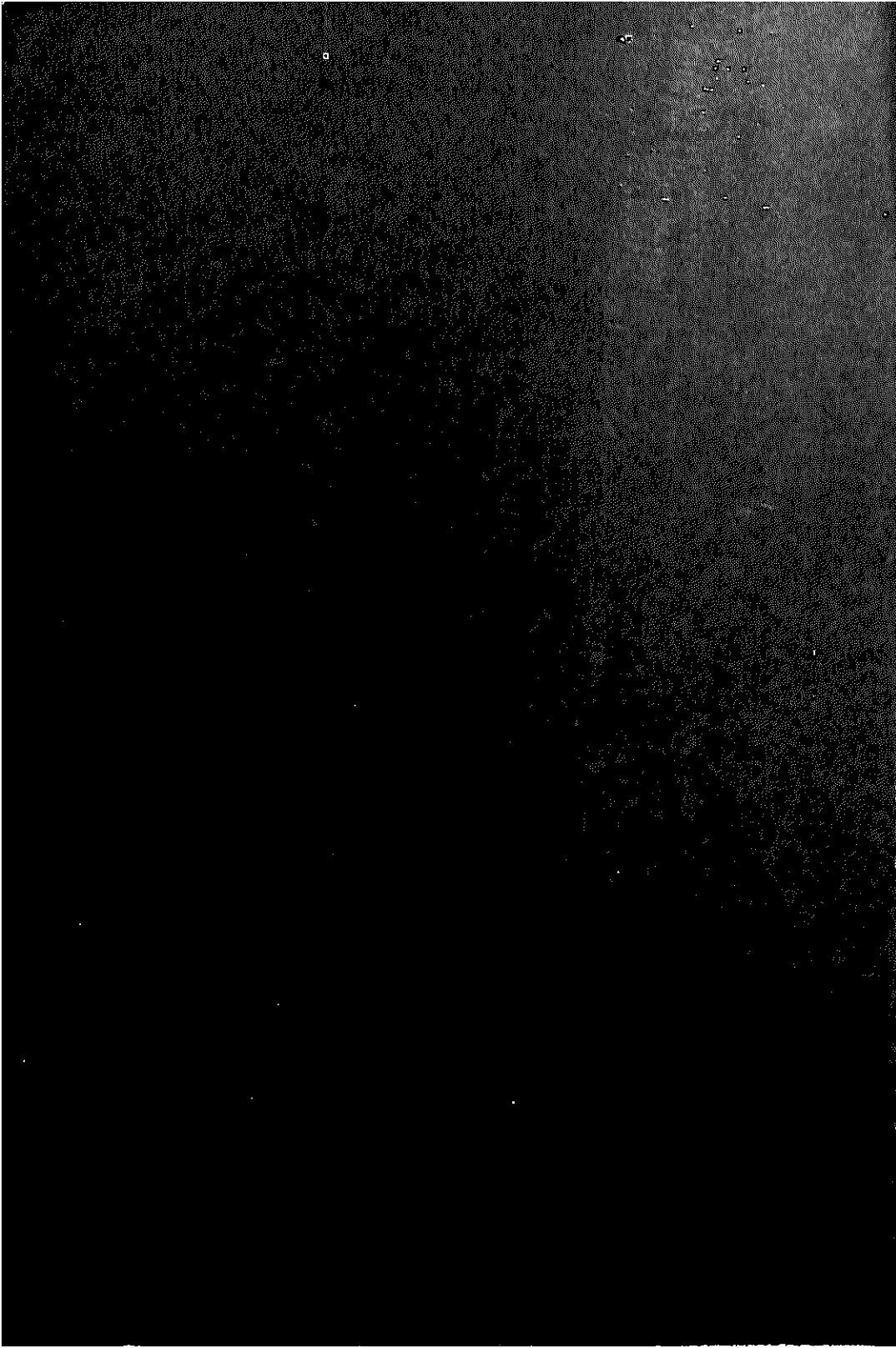
昭和53年度

# 都倫研紀要

—「倫理・社会」のねらいをどう生かしていくか—

第17集

東京都立高等学校「倫理・社会」研究会



# はじめに

会長 岡本 武男

「倫理・社会」ができたとき、教育の反動化であるという意見が出て、この課目に対して激しい反対運動が展開された。中学に道德の時間が特設されたときもそうであった。道德教育と言え、直に修身教育の復活であって教育の反動化へつながるといふ感覚が直に働くせいのために、道德教育反対ということになるのかも知れぬ。道德教育は個人の自由な意志を抑制するのだというような考えがあつて、それが反対の理由になっているとも考えられる。もともと道德といへば窮屈に聞こえて、何とはなしに道德という言葉そのものに反抗したくなるという意識もある。あれやこれやさまざまなことが入り交つて道德教育を定着しにくくしているのであろう。

道德教育に反対しても、道德を無視して人間の生活は成り立たないことは勿論である。カントは人間に対する尊敬の感情は、道德的人格に対して起ると言っている。つまり「よく生きる」人格に対して、人は尊敬するのである。それならば「よい」ということはどのようなことなのか。「諸悪莫作、衆善奉行」が仏教の極意であるとも言われる。そこにいう善とは何か、悪とは何かということ問いつめていくと、これはなかなか難題である。先哲はこれらの問いには抽象的には答えていても、具体的には答えていない。日々刻々変化する時の経過の中で、真に何が善であり、悪であるかを判断し、行為することはなかなか難しいように思われる。「倫理・社会」はこの難問に答えようとするのである。興味や関心を寄せにくいこの課目を定着させ、生徒の道德性を高めるために、先生方は随分努力し勞苦してこられた。その成果がここにまとめられた。先生方の一年にわたる研究と実践について心から敬意を表し、感謝申し上げる次第である。そしてこの報告書が少しでも日々の教育実践に役立つことを願うのである。

# 目 次

はしがき	1
I  研究主題と研究体制	4
研究分科会参加者名簿	7
II  研究会の全般的活動の概要	9
III  特別分科会「新指導要領の研究」 他科目との関連	11
IV  本年度研究例会における講師の講演集	13
V  研究報告	
第1分科会「教材の研究」	16
研究経過報告	16
個人分担研究報告	18
① 「きめ細かなねらいと具体例に基く倫社の再構成」	18
高島高  森名次夫	
② 「アシヨカ王の政治思想について」	29
葛飾商  浅香育弘	
③ 「親鸞の思想」	39
国分寺高  菊地  逸	
④ 「ジョン・ロックの社会契約論」	43
桜町高  佐藤  勲	
⑤ 「大乘仏教における空思想」	
(「般若心経」の資料解説)	
蒲田高  徳久  寛	47
⑥ 手記にみる「青年の心理」考	52
府中高  永上肆郎	
⑦ 「ソクラテスの弁明」を授業に使用すること	
葛飾野高  成瀬  功	52
⑧ 「小アンケートにみる生徒の意識」	80
駒場高  細谷  斉	

第2分科会「生徒の意識の研究」

研究経過報告 .....	6 6
①「現代女子高校生気質」	十文字高 岡田春生.. 6 7
②「青少年の自殺の増加と倫社」.....	墨田川高 渋谷紀雄.. 7 5
③「高校生の意識について.....その消極的・否定的側面 と指導について」.....	大森高校 寺島甲祐.. 7 9
④「倫・社グループ研究発表にみるある生徒たちの実践記録」 O・H・Pで学ぶ都市における交通問題 江北高校 宮崎宏一..	8 3

第3分科会「授業展開の研究」

研究経過報告 .....	8 8
①「倫社学習指導のポイント」——ねらいをふまえた 主体的な授業展開——	学大附属高 秋元正明.. 9 1
②「死をみつめる心」を読んで考えたことをまとめる あなたの意見集.....	京橋高 飯岡祐保.. 9 5
③「ヘレニズム・ローマ時代の思想」 エビクロス学派・ストア学派.....	東高校 井川哲夫.. 1 0 2
④「仏陀の倫理思想」——「ふれあい」の授業を求めて—— 志村高 木村正雄..	1 0 6
⑤「わたくしの一学期の授業について」	両国高 小平 克.. 1 1 0
⑥「授業展開の方法のための試案(1)」	帝京高 近藤 卓.. 1 1 2

VI 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約.....	1 12 3
事務局だより	1 12 7
あとがき	1 12 9

# I 研究主題と研究体制および 紀要の編集方針

研究部長 佐藤 勲(桜町)

研究副部長 海野省治(三田) 渋谷紀雄(墨田川)

〔本年度の研究主題〕

「倫理・社会」のねらいをどう生かしていくか

〔研究主題設定の趣旨〕

(1) 周知の通り、高校進学率が93%にも達して、多種多様な能力、個性、進路希望をもった生徒が入学している。

このように準義務教育化している高校教育の現状に対応して、昭和57年度からは新しい高校の教育課程がスタートしようとしている。

昭和39年度から「倫理・社会」が社会科の一科目として登場し、その後教材内容の精選を中心とした指導要領の改訂が行われてきた。

本研究会も、その間指導内容をどう「精選」し「平明化」し、「しほり深めていくか」等という教材研究と、「さまざまな取り組み」や「評価」・「テーマ学習」等を中心とした授業の研究を積み重ねてきた。

(2) 以上二つの研究の流れは、いずれも教材内容と現代の高校生との接点を求めることにあった。

「倫理・社会」の主なねらいは、言う迄もなく自主的な人間の形成とそれに必要な価値観をうち立て生かしていくところにある。

そこで本年度の研究主題は、生徒自身が意欲的に考え取り組む「倫理・社会」をめざして

(1) 毎時間の授業のねらいと「倫理・社会」そのもののねらいとをどう関連させていくか

(ロ) 生徒の現実に即したさまざまな授業をどう工夫していくかの二つを柱としたい。そのために具体的な授業実践例を出し合うことを通じて、「倫理・社会」のねらいをどのように展開していくかを本年度は研究していきたい。

〔研究体制〕

(1) 分科会の組織(各分科会2名の世話人を選出)

第1分科会「教材の研究」

第2分科会「生徒の意識の研究」

第3分科会「授業展開の研究」

特別分科会「新指導要領の研究」 他科目との関連性

(2)

第1分科会は、現代社会、青年期、思想の名分野における教材内容の点検と新材料の発掘をめざす。

第2分科会は、教材を生徒の実態に応じてどう現代化していくか、生徒の意識や悩みをどうとらえ答えていくかをめざす。

第3分科会は、「倫理・社会」のねらいを生かしたさまざまな授業実践例を出し合いながら、「倫理・社会」のねらいを踏まえた生々とした授業展開をめざす。

以上、各分科会においては、研究分野をしぼって、話し合いや調査や読書会等々の形で、研究を掘り下げていただきたい。

なお、特別分科会は、昭和57年度から実施予定の新しい高校の教育課程における第1学年の「現代社会」の内容構成についての批判検定を通めていきたい。



## 〔紀要の執筆要項〕

### 〈執筆のねらい〉

53年度の研究主題——「倫理・社会」のねらいをどう生かしていくか—  
—についての各分科会における共同研究および個人分担の研究レポートの  
結果を具体的に自由に執筆する。

執筆の際、毎時間の授業のねらいと、「倫理・社会」そのもののねらい  
とを具体的にどう関連させているかということと、生徒の現実に即した授  
業上の展開例とか現在の生徒の意識、感覚とかに特にポイントをおいて執  
筆する。

### 〈各分科会の研究経過報告〉

各分科会の世話人は、分科会の研究活動の経過をまとめる。各分科会毎  
にどのような討議、研究交換をすすめたか、分科会独自の雰囲気を生  
の形で報告する。

### 〈個人分担研究レポート〉

テーマ（主要事項・サブタイトルなど）

1. このテーマをとりあげた理由、又はこのテーマの学習のねらい（05P）
2. 小項目をいくつか立てて、できるだけ実際の授業場面に即してレポー  
トする。なお参考文献、資料からの抜粋個所の名称、ページ等をわかり  
やすく示す。 (3P)
3. まとめ  
失敗と工夫、指導上の留意点、問題点などをもってまとめる（05P）

## 研究分科会参加者名簿（五十音順）

※印は分科会世話人

◎印は特別分科会世話人

### 〔第1分科会〕（教材の研究）

鮎沢真澄（戸山）	浅香育弘（葛飾商）	葦名次夫（高島）
新井徹夫（玉川学園）	市川仏乗（駒大高）	菊地 堯（国分寺）
工藤文三（二商）	※佐藤 勲（桜町）	佐藤孝一（一商）
篠塚 茂（中村）	渋谷 等（東京家政）	杉原 安（保谷）
高原健吉（竹台）	竹添 清（淵江）	徳久 寛（蒲田）
徳光克哉（東電学園）	永上肆朗（府中）	中島康夫（練馬）
※成瀬 功（葛飾野）	細谷 斉（駒場）	森山徹雄（国立）
矢島杜夫（岩倉）	吉沢輝久（杉並）	吉沢正晶（大森）
渡辺道子（目黒・定）		

### 〔第2分科会〕（生徒の意識の研究）

石森 勇（竹早）	市野武男（向島工）	内田君夫（攻玉社）
※及川良一（荒川工）	岡田春生（十文字）	岡本武男（国立）
香川 弘（安田学園）	勝田泰次（本所）	佐々木誠明（鷺宮）
※渋谷紀雄（墨田川）	館入慧子（共立女子）	寺島甲祐（大森）
平林堅一（園芸）	三宅宜幸（開成）	宮崎宏一（江北）

〔第3分科会〕(授業展開の研究)

秋元正明(学芸大附)	飯岡祐保(京橋)	井川哲夫(東)
※海野省治(三田)	※木村正雄(志村)	小平 克(兩國)
近藤 卓(帝京)	沼田俊一(戸山)	

〔特別分科会〕

鮎沢真澄	秋元正明	葦名次夫	新井徹夫
市川仏乘	内田君夫	◎海野省治	及川良一
小川輝之	岡本武男	香川 弘	菊地 逸
木村正雄	佐藤 勲	杉原 安	寺島甲祐
永上肆朗	◎沼田俊一	船本治義	細谷 斉
御厨良一	三宅宣幸	吉沢正晶	

## Ⅱ 研究会の全般的活動の概要

〔第1回〕 5月3日(火)総会・研究発表大会 於東京都教育会館

### 1) 総会

挨拶 会長 岡本武男氏

会務、決算並びに監査報告 都立清瀬高校 小川輝之氏

事業計画・予算・新事務局並びに新役員の選出 同

研究事業計画・研究主題の提案承認 都立桜町高校 佐藤 勲氏

### 2) 研究発表並びに研究協議

「昭和52年度の研究活動の総括」 都立葛飾商高 浅香有弘氏

「わたしの出す課題と利用する資料」 都立府中西高 新井 清氏

### 3) 講演

「思想史における現代」 埼玉大学教授 伊藤勝彦氏

〔第2回〕 6月16日(金)第1回例会 於攻玉社高校

### 1) 公開授業・研究協議

「現代社会における人間関係」 同校 内田君夫氏

### 2) 分科会

分科会の結成・世話人選出・分科会の活動計画について協議・決定

### 3) 講演

「日本人の宗教意識」 森岡清美氏

〔第3回〕 10月20日(金)第2回研究例会 於都立志村高校

### 1) 公開授業・研究授業

「カントの倫理思想」 同校 木村正雄氏

### 2) 研究発表

「図解を用いた授業展開」 都立両国高校 小平 克氏

### 3) 講演

「親鸞とパウロ」

早稻田大教授 峰島旭雄氏

〔第4回〕 11月25日(土)・26日(日)

全倫研秋季大会と共催

第3回研究例会

於都立竹早高校

1) 公開授業

「近・現代の思想」(3年)

同校 石森 勇氏

「現代の思想」(2年)

同校 小野邦雄氏

「江戸の儒教」(3年)

同校 梅沢秀夫氏

2) 公開授業についての研究協議

同校 石森 勇氏

3) 全体協議

「『現代社会』の諸問題」

神奈川県立川和高校 大森 弘氏

東京・日大第二高校 小笠原悦郎氏

4) 記念講演

「日本思想史における儒教」 東北大教授・文学博士 金谷 治氏

5) 臨時見学 寛永寺—東御苑—湯島聖堂—ニコライ堂 (駒大バス)

〔第5回〕 2月23日(金) 第4回研究例会 於都立国分寺高校

1 (公開授業・研究協議)

「実存主義」

同校 菊地 勉氏

2) 講演

「インドで想ったこと」 副会長・都立田園調布高 船本治義氏

「私と禅語録」 会長・都立国立高校 岡本武男氏

### Ⅲ 特別分科会「新指導要領の研究」 経過報告

都立戸山高校 沼田俊一

53年6月に出された高等学校学習要領案は前から噂されていたように政治経済の分野にとっては比較的理解しやすく納得のいくものであったが倫社の分野では、現行倫社より実質的には後退した内容になるのではないかという心配が、とくに「現代社会」を検討する先生方の中で大きかった。なるほど選択「倫理」があるにせよ、現状では恐らく世界史や日本史に選択をうばわれ「倫理」は持ちえまい、それに「現代社会」は1年で必修となれば、現行のような程度の高い内容を盛り込むことはできないから、総体的に倫社部門は軽視後退したものになってしまう、というのが、ほぼ共通した見解であった

7月7日、杉原先生の御厚意で、高田馬場の13時ホール地下食堂で、緊急の特別分科会が召集された。岡本会長は、この指導要領案は、一貫性を欠き密木細工のような内容で、都倫研としても強い要望書を提出する必要があると主張された。又、会員からは「倫理こそ必修とすべきなのに選択とはおかしい」「文化を1年でやるのは、とても内容が抽象的なのでむずかしいのではないか、1年ではむしろ現行のように地理や歴史のような具体的な学習の方がわかりやすいはずだ」「附則2の当分の間とはどういうことか、特別の事情とはどういうことか?」「(1)と(2)を1人の教師がやるのか、こんな内容を誰が指導するというのか」「現代社会には家庭の問題が欠落している。家庭無視の倫理だ」「政経とのバランスが欠けている政経分野は内容の指示が細かくあるのに、倫社分野の説明はなく事項が簡単な用語で並んでいるにすぎない」「生徒の発達段階に応じて(1)と(2)を入れかえてはどうか」等々、活発な討議や率直な意見が次々と出

された。結局、岡本会長の意をくんで、社全協同様、都倫研と全倫研の名で砂田文部大臣あて要望書を出そうということを経験し、翌8日、再び、役員が同所に集合、要望書を作成した。

7月10日、要望書は、都倫研の代表者によって文部省に手渡されたが、その骨子は次の通りである。①「現代社会」の内容の(1)と(2)の順序を入れ替えた方が、従来の指導実践から適切である ②「現代社会」の内容(2)の「民主社会の倫理」の前に、新しく「個人と社会」(集団と人間関係・家族生活・学校生活など)を入れた方がよい ③「倫理」を必修とすること——これは従来、都倫研が終始一貫主張してきたことで、今変更するはずはないにしても、再度言っておく必要があるという執念めいた主張であった。この要望書は全倫研奈良大会で公表承認された。

こうした努力にもかかわらず、新指導要領は、8月下旬正式に公示された。ほとんど都倫研の意向が無視されたことに対しては、疑問と怒りの声がかかれたが、ともかく57年度施行を目指して出発したのである。

特別委員会では指導要領の「現代社会」の(2)現代社会の人間の生き方において、どんな内容が具体的に盛り込まれるか関心が高まった。

10月13日、三田高校において、指導要領解説編を執筆される協力者の先生方、三田高校の御厨先生と国分寺高校の菊地先生をお呼びし、実際にどのような解説編の内容になるのかお伺いした上、執筆のアウトラインを示していただき、集まった会員は、それぞれに、その原案に対して、自由に意見を述べた。

11月14日、今度は再び高田馬場の13時ホール地下食堂において開催、大勢の先生方が参加され、御厨、菊地先生から原案が発表され、前回同様活発な意見交換が行われた。もう一人の協力者永上先生(府中高)からは「倫理」の方の経過報告があった。

もちろん10月と11月の討議内容や原案は内容が内容であっただけに部外者には秘密が守られただけである。

## N 53 年度研究例会における講師の講演集

### (1) 都倫研総会講演要旨

#### 「思想史における現代」

埼玉大学教授 伊藤勝彦

今日の思想的状況として、思想史の再編成の課題がある。ここで哲学史でなくて、何故思想史というのか。従来、哲学史の勉強はドイツ系のもものが中心となって、クノー・フィッシャー、エルトマン、シェラー、ヴィンデルバンドらの哲学史を基にしながら、ドイツ観念論が講じられた。哲学史自体の自立した思想空間が考えられていた。ヘーゲル以後を現代というが、哲学史はヘーゲル学派の人達によって進められてきたのである。これに対し、20世紀の現代思想を考えてみると、例えば構造主義というのがあるが、フコー、レヴィストロース、デリダらは、哲学の勉強もしているが、その外の勉強もしている。また20世紀の哲学思想を考える時、フロイトを無視しては語れない。今日、哲学史は、哲学者だけの言説を問題にすればよいというものではなく、哲学史というより思想の歴史であって、その思想の歴史は宗教・芸術思想と密接に関連して発展してきたことを考えなくてはならない。所で、思想というものは進歩発展すると考えられてきたが、J・マリタンは近代における悪い方への改革者として、宗教におけるルター、哲学におけるデカルト、政治におけるルソーをあげている。ベルジャーエフは、近代のヨーロッパは迷いの歴史であり、近代の利己中心主義をのりこえる神中心主義的な中世の黄金時代に立ち帰らなければならないといっている。また、ハイデガーは、哲学の最もすぐれたものは前ソクラテスのフィシスの哲学にあり、プラトン以来の哲学は存在喪失のプロセスであるといっている。それでは思想史のいくつかの問題点と考えてみよう。先ずギリシヤ思想であるが、ギリシヤはヨーロッパ思想の源泉とされ、ギリシヤとヨーロッパは直線上に考えられてきた。理想的なギリシヤ像が出来ていた。しかし、ギリシヤ研究が進むにつれて、理想的なギリ



リシヤとは相違するギリシヤが明らかとなりつつあり、実際のギリシヤは西歐文明とはかなり異質なものであることがわかってきた。すなわちミュトスからロゴスへという見方では定式化できないギリシヤ像である。従来  
のギリシヤ像は、ヴインケルマンやサイモンズ、ベーター、ワイルドなどが理想化したギリシヤ像である。これらの人々の中には反キリスト教的なギリシヤ賛美者があり、ギリシヤのエロスを讃美した。また次に、キリスト教の源泉としてギリシヤを見る人々もいる。カトリックの思想家には大体この傾向がある。プラトンにおける神学をカトリック神学の基礎のように考える。しかし、キリスト教の神は、無からの創造に特徴がある。クレアトール（創造者）であるのに対し、プラトンの「テイマイオス」の中のデミウルゴスは無からの創造ではない。ギリシヤ的世界観ではこの世は始めもなければ終わりもなく、カオスからコスモスへの発展があるのであり、ヒューレをイデアにまとめあげるのが造物主の役割である。このコスモスの秩序を眺めることがテオリアである。従来教科書的ギリシヤ像はバーネット、テイラー説に基づくもので、近代の科学理論の原型を前ソクラテスにみた。前ソクラテスの人達のピュシスについての理論的探究が進むにつれ、ピュシスからプシケーへの関心の移り行きは疑問視されている。ヘラクレイトスの断片には、宇宙のロゴスは、人間の社会、ポリスを支配しているロゴスと同じであるという言葉がある。宇宙のロゴス（理法）に従うことで、人間は傲慢に走らず、苦難を恐れず英雄的な人間として生きることができる。前ソクラテス派の人達の意見は、単なる自然に関する意見ではなく倫理学であった。近代になってカントの理論に見られるような理論と実践の二分法は、ギリシヤの場合全く無縁であって、人間と自然、自然と精神は本性を共にする連続の関係にとらえられた。そのような人間と自然との連続性に亀裂を生ぜしめたのがキリスト教的な世界観である。パスカルの「パンセ」の中の「大いなるパンは死せり」という言葉は、ブルタルコス「神話の終焉」という書物に出てくる言葉だが、神々にみち

みちている自然（汎神論的自然）に亀裂が生じたということを意味している。キリスト教的世界観・神中心的世界観の成立ということである。人間と自然との分裂や対立は近代の科学的世界観の成立に関係する。即ち、キリスト教的宗教的自然観が近代的科学的世界観を準備するものであったといえるのである。以上、従来ギリシャ研究は、現代との連続性において考えられているが、そこには非連続的な面があることを忘れてはならない点を申し述べました。次に、中世と現代との連続性について。中世は暗黒の時代というかつてのイメージ、即ち、暗黒の中に光がさすというようなイメージそのものがキリスト教的なものといえる。ホイジンガーは「中世の秋」の中で、12～13世紀はかなり異教的な時代であることを言っている。民衆の中では、例えばフランスでは、カタリ派の女神崇拜、カトリックの聖母崇拜やマリアの神格化があるが、マリア崇拜は異端的なもの結びつく可能性が大であった。そして、15～16世紀のルネサンスの時代こそ、キリスト教が定着した時代だとしている。それではルネサンスはいかなる時代か、というに過去の黄金時代のみがえりの時代といえる。ルネサンス時代に表われた過去の黄金時代をとり戻すことによって進歩発展の方向を切り開こうという直線的な未来への思想は、ルソーの場合には原始的な自然状態へのあこがれとなり、マルクスの場合には原始共産制の思想となり、ニーチェの場合には前ソクラテス時代の哲学への思想にも表わされている。18世紀の「進歩の観念」は、近代を特徴づける重要な観念で、我々はこの延長線上にあるといえよう。しかし、科学的合理性による自然の改造の観念は、今日破産しかかっている。近代の特徴は、人間が主体になったこと、人間中心主義にあるが、問題はもはや人間中心主義では解決しない。ハイデガーは「Uber dem Humanismus」（ヒューマニズムを超えて）を著している。人間中心的な哲学を越え出ていくところに新しい思想があるのではなからうか。

## V 研究報告

### 第1分科会報告 「教材の研究」

#### < 経過報告 >

6月16日 都倫研第1回例会が攻玉社高校で行われ、公開授業、講演の(第1回)後、第1分科会としての最初の顔合わせを行いました。

5月30日の総会の際に、第1分科会への参加を希望した先生方は総勢19名でしたが、この日に新たに参加されたメンバーフェイスが7名ほどでした。

世話人は成瀬功氏(葛飾野高)と佐藤勲氏(桜町高)の二人に決まりました。

当分科会としての研究方法、集合時期及び場所についての話し合いを若干行いましたが結論が出ずに散会しました。

10月13日 都立駒場高校において第2回目の会合をもちましたが、文化(第2回)祭後の多忙さや過労からか、出席した人は岡田春生氏(十文字高)と同校の細谷氏と世話人2人のわずか4人のさびしさでした。

成瀬氏より葛飾野高の生徒の意識調査の報告があり、次いで岡田氏の古事記の教材が提示されました。低俗化しつつある高校へむけての教材はいかにあるべきかという話まで進みました。

11月6日 前回の出席者数の少なさを克服すべく、世話人から各先生方(第3回)への出席への電話をしましたが、やはり5人だけの会合で終わりました。永上氏、葦名氏、細谷氏および世話人2の話しの中で、いかにして教材を生きたものに行っているかという苦勞話が出ました。

参加者が少なく、極めて不活発に終わった原因は、世話人の力不足、怠

優さに一部あったと反省しています。

夕方の5時頃までクタクタになって勤務している先生方をいかにして分科会へと足をむけさせるか、それには相当の魅力がなければならぬでしょう。分科会へ出れば何か得る所がなければならぬまい。もう少し参加者を増やし分科会活動を活発化させるには相当の問題意識と計画性がなければならぬまいと思われます。

最後に世話人のミスをお詫びしたい。佐藤孝一氏(一商)篠塚茂氏(中村高)渋谷等氏(東京家政学院高)高原健吉氏(竹台高)徳光克哉氏(東電学園高等部)矢島杜夫氏(岩倉高)渡辺道子氏(目黒・定)への連絡を全くしないでしまいました。本当に失礼しました。54年度の分科会へは是非とも御参加下さい。ニエー・フェイスの参加なくして都倫研の生命は続きません。昭和54年度の分科会活動の「再生」を期待しています。

(都立桜町高・佐藤 薫)

# きめ細かなねらいと具体例に基く倫社の再構成

高島高校 葦名 次夫

## I

(1) この原稿を消番する直前、ふと手にした竹内宏著『感覚的日本経済論——やまと言葉の経済学』(東洋経済)を腕み、これから展開しようとしていた趣旨と似たようなこと(?)が鮮かに述べられていたのでそのタイミングに不思議な気持ちがあると同時に、大いに力づけられた。氏は、経済学において漢語や英語が多用され、そのため、日常の生活実感とかけ離れ、問題の所在が不確かになっていることを鋭く指摘し、次のようなたとえを引いている。すなわち、「この道路の清掃は財政が負担すべきだ」という漢語まじりの言葉を、主としてやまと言葉を使って言い直すと、「私たちは、家の前の道路を清掃するのは、めんどろくさくていやであるから、自治体は、家の前の道路を自ら掃除している市民からも多くの税金をとり立て、それによって人を雇い、自分の家の前の道路を掃除させるべきだ」(?)という内容になるという。

(2) 同様なことを、倫社・政経の授業をもちつつ、常々感じつつつけてきた。教壇に立ってまもなくのこと、大学時代のノートを頼りに抽象的な漢語を多用した授業の最中、「先生、主体性って一体何ですか。もっとわかりやすく説明して下さい」と生徒に真顔で質問されたのである。その一時間、私は四苦八苦し、大いに悪戦苦闘した。自分でわかっているように思いこんでいながら、いざ具体的に説明しようとしても、安易な辞書の言い換えの如く、同じ抽象レベルの言葉の中で堂々めぐりし、概念だけが宙に舞っていたからである。

今にして思い返してみれば、主体性という言葉には、人間が生活し悩み苦闘し生きてきた経験そのものが込められており、そう名づけようがない

ギリギリの表現として、主体性という言葉が生まれてきたのだろう。「先人の経験が歴史的に凝縮して形成されたものが言葉だ」——高校時代の国語の時間の先生の話、ハッとして思い出す。ちなみに、哲学者森有正氏が「経験」という言葉を通して訴えていたことも、このことに関っているのだろう。（「霧の朝」「遙かなるノートルダム」）とするならば、主体性という言葉を理解していくためには、そこに込められた経験の一つ一つのひだを洗いだして、自ら確かめ吟味し感得していくことが不可決となる。しかし、倫社の用語や概念ひとつひとつがそのように先人の生きた生活経験の凝縮であるとしても、我々は、一体どのようにしてその核となった原体験に思いを致し感得していくことができるだろうか。私の生活経験の内容が貧しく浅ければ、そこで終わりである。（これはしんどいノ）しかし、せめて自分なりの生活経験にひきつけて、自らの心の中にハッとして感じるものがあるか否か、確かめ吟味していくこと、そして、授業の中でも日常身近かな具体的事例に関らせていくこと、あるいは、いきいきとした比喩やエピソードによって別の形で表現できないか試みること、少くともその努力だけはしていこう——そう念じつつ、生徒の理解力に応じて具体例を活用した授業を今まで展開してきたというのが実状である。

（3）さて、同様のことが、本年度の研究主題「倫社のねらいをどう生かしていくか」にも言えるのではなかろうか。「主体性の確立」や「人格の陶冶」というねらいは多くの指導書や解説書の中にちりばめられている。しかし、それはあまりにも抽象度が高く、自明と考えられるだけに、何ものをも意味せぬものとして看過されやすい。ここで必要なことは、その高次元のねらいを、その内容と関る、より具体的できめ細かなねらいに分け、一つ一つの具体的な経験の核にさかのぼっていくことである。さらに言えば、ねらいとは我々自身がハッとして感動する一つ一つの経験の核であり、その核に関る具体的事例そのものが、すなわちねらいであるといえよう。すなわち、そのきめ細かな具体的事例と関ったねらいがいくつか組みあわ

さって、より大きなテーマとなり高次のねらいとなっていくというのが順序であり、筋道であろう。

(4)そこで、主体性の確立に関する具体的内容としてどんなものがあげられるか、思いつくままいくつかあげてみて、その過程を追ってみたい(その詳しい展開は、1978年度都立高島高校紀要第三集の中で試みております。御参照いただければ幸いです。)

- 自らのこととして真剣に関っていくあり方
- 自ら決断して賭け、その結果と責任を引き受ける
- 目的と価値の実現のために、冷徹な計算と合理的な判断に徹する
- あらゆる状況の中で、沈着さと冷静さを失わない態度
- 幻想や夢に惑わされず、自己偽まんに陥らない精神的強さ
- 優柔不断を排し、断固首尾一貫した態度をとりつづける
- 時機や好機を見はからって、機敏に対処しうる柔軟性……

すなわちまず、高次のねらいを以上のようなより具体的な内容項目として細分化してゆく。次に、この雑多で混沌とした項目相互がそれぞれどう結びついているかあらためて構造化し精選して再構成していく。(K・J法などを用いるのも一考) 第三に、この項目そのものもまだ抽象度が高いので、そのねらいが生きるようなより具体的な事例や比喩、エピソードで肉づけをしてゆく。そして、授業の中で、その一つ一つのねらいや事項が人間の生き方や経験とどう関わっているのか、自らの生活経験にひきつけて考察し吟味してゆく。余裕があれば、具体例創作テストなどを通して、生徒自身にその作業を行わせていくことが一層効果的であろう。そして、このようにねらいと具体的事例を緊密に結びあわせ、自らの経験に即して考察していくことそのものが、倫社の一つの目標といえよう。

(5)以上のようなあたりまえのことが、私の場合には、大発見に思え授業展開の基本となった。ともかく初めにネタありき。心がハットして踊り、イントレストが動かされる素材を、新聞、テレビ、日常会話……から

食欲に吸収し、収集しよう、この素材やエピソードは生徒がのりそうだ、ハッとするだろう、きっと心に食いつくだろうという予感を持ちながら、イキのいいネタをさがすことは、授業案作成の中で最も楽しいひとときであった。そして不思議なことに一冊の大著を読んでも、そのような素材がひとつもでてこないこともある。逆に、のっている授業の中で次々と浮かんでくる場合もある。

(6) また、次のことがらに気づいた。具体的事例やエピソードなら何でもいいわけではなく、その事例の価値は二束三文のつまらぬものから、生徒が必ずのってくる価千金のものまで、さまざまな違いがあるということである。長い歴史の風雪の中で語りつがれてきた故事成句、古典としての名句やことわざ、また人口に膾炙され伝わってきたエピソードなどは、やはりすわりがよく、スーと心に入ってくるものが多い。また、平明でありながら内容豊かな深みをもつものとして聖書の言葉や、シヤカという言葉などがある。またキエルケゴールやニーチェなどの比喩が実に巧みなのは実存的なものはそのような形でしか語れないからであろうか。また、エズプリやユーモア、風刺と逆説がニヤッとしてハッとするのは、そのひねりや反語性の故だろうか。また、倫社の思想家の特徴を示すことばや重要用語などは、多くの人がある言葉以外ではその思想を表現しえないと感ずる何かが含まれているからであろう。アダム・スミスの見えざる手は『国富論』の中では一回しかでてこないが、まさにこの言葉以上に彼の思想内容を適切に示しうるものは他にない。純度と精練度の高い、すわりのいい素材と具体的事例を収集していくことは、尽きない今後の課題である。

(7) さて、以上のように、いきいきとしてハッとすることばや具体例や説明事例、ニコッと笑う比喩、心にくいいるエピソードをできるだけ多く、収集発見、創造し、それをねらいと結びつけて授業で活用することを願ってきた。しかしその方向に力点をかけすぎた授業にはいくつかの問題点や考慮すべきことがあるように思う。以下、それらの点を列挙してみたい。



① まず、抽象度の高い言葉と、その組みあわせによってしか理解しえない内容と世界がやはり確かに存在する。そのために明確に言葉の内包を定義した概念に基いて、ち密に論理的に思考する力を育成していくという方向は、一方では是非とも追求していかなければならないものである。

② やさしくわかりやすく具体的にというあり方は、ともすれば、あいまいで不正確となりやすい。また明晰さに欠け、微妙な違いを表現しにくい。普遍的という言葉や、いつでもどこでも誰にでもいいかえても、同じ内容を意味せず、国家とくには何か異なるだろう。

③ 身近かな日常生活の具体例に即して考えていくことは、思想家が極限状態の中で生きた緊張感や深さ厳しさが失われ、その固有で独自の経験の質を無視しがちとなる。そのため、生徒に平板な曇った印象を与えやすい。

④ 先にも述べたが、貧しい生活経験や感覚しか持たない凡俗な私が、いくら自らにひきつけて考えても、低い次元を堂々めぐりすることとなりかねない。

⑤ 具体例を多用する授業では、焦点があいまいとなり混乱しやすい。また、時間的にみても冗長となりやすい。

⑥ そして、ねらいやポイントが、自分自身の好みや問題意識に左右されるので、主観的、恣意的となることは避けがたい。

(8) このような諸点に思いをめぐらすと、具体的だから良いというのでなく、やはり、抽象度の高い内容と、具体的生活経験とを常に関らせ循環させていく力、『思考と行動における言語』のⅠ、ハヤカワ氏のことばを借りれば、抽象のはしごの階段をのり降りする思考力の養成が決め手となる。すなわち、ある抽象的概念を自らの生活経験に照らして考察し、多様な生活経験を一つの言葉と感覚の中に収れんさせていく——そのような力の養成がめざすところとなるのか。

そして、生徒の学力に応じて、抽象レベルを設定し、また状況に応じて

柔軟に抽象と具体性の比重を変えていくことが、特に必要となるだろう。ちなみに、『現代社会』は、一年におかれる。不安は大きいが一年生のレベルに応じた工夫が、ここでも必要となるだろう。また、『現代社会』の性格そのものが、きめ細かなねらいと具体例を活用するテーマ学習的なあり方を強く打ちだしている。上記の問題点を克服しながらこの方向の可能性を一層追求し、工夫していくことが今後の課題である。

以上、長々と書いてきましたが、願わくば、一つの具体的事例が一粒の麦となって無限の広がりを示唆し、生徒の心の中にキラリと光りつつ、その興味と関心によって自ら読書し思索していくきっかけとなれば——ドストエフスキーは、「一粒の麦 死なずば……」の聖書の一句のために、あの膨大な『カラマーゾフの兄弟』を書きあげたという——というのがはかなくも、常にいだきつづける一つの夢である。

## Ⅱ

以下、残りの紙幅の許す限り、きめ細かなねらいと具体的事例を活用することをめざした授業として、仏教を素材に展開した実践例を次にのせてみました。出家、縁起、中道、無我の一部を簡単にコメントするという形となりますが、その一端でも御理解いただければ幸いです。

### (1) シャカの出家

才能、富、名誉というあらゆるよきものを兼ね備えたシャカは、なぜ29歳で一切を捨て、全てに別れを告げ、孤独な求道の旅に赴いたのであるか。そこで、まず、人間の心にひそむ「俗」を厭い、脱世間をめざす求道のあり方におねらいをおいた。同様な例として、世間虚仮と念じた聖徳太子の生涯、死を覚悟しつつ野ざらし紀行の旅に出た芭蕉の境地、文豪の名誉と家庭を捨て、寒村の小駅で客死したトルストイの希求したもの、生死の只中でひたすら修行の道を歩む「千日回峰」の高僧が挑むもの、救いを求

めて駆けだす『天路歷程』の主人公——それぞれの生き方を適宜簡潔に紹介した。ポイントとしては、①精神的に満たされざる想いの根源にひそむもの、享楽に伴う憂愁と悲哀、目的実現に伴なう虚脱感、②一切を捨てる大いなる放棄が大いなる獲得につながるというあれかこれかの決然たる選択の意味、さらには何かをなしとげるために何かを犠牲にする断念の意義（ピアニストは一日数時間の猛訓練、克己と訓練にあけくれするオリンピック選手の青春）③そして、人間は脱俗のかなたに何を求めているのか人間存在そのものにおける荒野と砂漠の時間を求める促しのありか（日本人における西域への郷愁）旅、登山、巡礼、遍路への誘い。最後に「幾山河越え去りゆかば寂しさのはてなむ国ぞ今日も旅ゆく」のような詩歌をいくつか紹介し、味わいつつしめくりとした。

## （2） 縁 起

まず、縁の名のつく言葉を列挙させた。そして、「縁起がいい、袖ふりあうも他生の縁、因縁をつける、不思議な御縁で」という縁と呼ばざるをえない事象にこめられた人間的意味あいを考察することとした。また「因果応報、バチがあたる」というように、因果を倫理的なものとして考えざるをえない人間の心のあり方に特に着目させるよう努めた。

具体的な事例としては、①友人や恋人と知りあうきっかけとめぐりあい、祖先のルーツをたどりつつ、今ここに存在している私の不思議さ。親や身近かな人がどのように結ばれて結婚したか、そのドラマ ②スポーツ試合の勝因、敗因を列挙し、その因の一つ一つによってどう動きが変わったかの分析、受験における合格と不合格の紙一重の因果——そして、もつれあった因がいくつかよりあわされながら一つの流れを形づくり変化していることの微妙さと不可思議さに思いを致した。そして、失敗、不合格、失恋などの危機と試練の時に、来し方過ぎし方を省みて、どうしてそうってしまったのかその因に思いをめぐらさざるをえない人間の存在を省み（可能性と悔恨のはざまでもぐらさざるをえない人間の存在を省み（可能性と悔恨のはざまでもぐらさざるをえない人間の存在を省み）

「もし〜だったら」というようにある条件の変化により、自らの人生がどう変わってきたらどうか、という形で展開してみた。補足的に、E・H・カーの『歴史とは何か』に言及して、歴史学における因果の考え方を簡単に紹介したが、特に興味を示したようだ。（本格的に時間をかけてたっぷり取り扱おうより、さりげなく紹介して未知なるイントレストをひきおこす方が、効果的なこともある。皮肉な感概を持つことしばしばである。）

しめくりとしては、宮沢賢治『春と修羅』の序を引用しつつ、「私という存在自体が、さまざまな因果で結びあいながら、今ここに存在しつづられてある」ことへの感覚に少しでも触れるようにした。

### (3) 中道

まず、極端に走りやすい人間のあり方を考察し、ある妙なる一点の適度に留まることの難しさに着目させた。具体的事例として、カケごとに勝っているやめられるか。腹八分の難しい、むきになり意地になり一方向に突走の方が安易なこと。また、しかり方、ほめ方、甘え方、冗談や軽口や調子にのることも、ある一点での節度を保つことが大切であること。そして、節度をもって「心にかなう適度をもって態度となす」ためには、修練が必要なこと、その実践の方法として八正道があることを示唆した。

次に八正道の内容としては、正語、正業、正精神を中心に展開し、そのねらいを次のように設定した。正語では、言葉の与える影響の大きさをふり返らせた。立派だとはめられ励むことによって本当に立派になること、逆に、くたばってしまえの一言で早死にする病人などの例をあげ、言葉によって傷つき救われる具体例を生徒自らにあげさせた。また和顔愛語や愛語よく回天の力あることを学することべきなりの言葉をかみしめた。次に「身=口=意」すなわち心の中で思うこと、口で話すこと、体でする行動が密接に関係している事例を考察した。かけ声、気合、ためいき。服装や姿勢でシヤキツとする等。そして身=口を整えていくことにより意もひきまらることを、アランの『幸福論』を引用しつつ触れた。そして、現代で

は忘れられやすい「慎む」ことの積極的強さについても言及した。また、正精進では、つづけることの大切さ——倦まず、怠らずつづけることが、着実に何かをなしてあげていくこと、そのためには「待つこと」に慣れ耐えることが大切であることなどを考察した。例えば、学問は鈍と根、練習とけいこ好きこそものの上手なれば続けるから……等々。最後に、道元禅師の「眠たい時は眠り、さめたら念仏し…」という有名な逸話を例に、「放逸なることなくして精進する」しみじみとした仏典の言葉を味わうこととした。

#### (4) 無 我

大きなねらいを次の如く設定した。仏教の宇宙観、自然観、人間観の前提である「大宇宙、天地万物と我は一体である」「草木国土悉皆仏」という考え方にどうアプローチするか。「人間は自然の大生命のあらわれの一つ。人間の命の根底にあって人間全体を動かしている大きな永遠のいのちがある。」という実感をどれほど持ちえるか。宮沢賢治の「すべてがわたしの中のみんなであるように、みんなのおのおののなかのすべてですから」という言葉をどう感得しうるか。

そこで、せめてもの手がかりとして、「自他渾然一体というあり方」「心からの感動により自分がなくなっていく」という経験から考察した。文化祭や運動会でのクラス一体となった時のふんい気、大きな感動をわかちあう時の連帯感と昂揚など……。次に、無心というあり方（意識せず、サラッとカラッとおおらかでふっさきれている。あるいは、應揚でぬけていてサッパリさらっとしたすがすがしさ）について吟味してみた。具体的事例として、スポーツや舞台などで意識して動かそうとするとギコチなくなること、舞うのでなく舞わせられる経験、ひとりでに体が動いてゆく軽快さ、無心にふとなにげなく雑念なき時に開眼したり、感動することの多いこと、恩は押しつけるものではなく受けた人が自然に感じるもの等、豊富に事例があがり生徒も「無心」については関心の深いことが察せられた。

次に、無我の逆のあり方として、「我がもの、わが我、我執」について考察した。たとえば、オレの「モノ、仕事、領分、地位」だ。私の子供という所有意識。俺がやったんだと言いたい、誇りたい、自慢したい根強いあり方。私こそ、俺にまかせろとしゃしゃりでる。俺の顔やメンツや名譽をどうしてくれるという意地。カチンとくるカチンとは。また、我を張る、業つくばり、あくが強い、ケンがあるという言葉の示すもの。プライドの高さなど。そして、漱石の『行人』『彼岸過迄』の主人公の自我意識の栄光と悲慘や、芥川の小説に見られる知のあり方に言及した。

しかし、我や自我の否定面のみ強調しすぎることは、自我の確立期における生徒にとって問題があるようにも思う。デカルトやスタンダールなどの近代小説をもとに「よき自我の確立」「自我とは何か」のテーマを構成し、相補っていくことが必要に思う。

#### (5) 具体例創作テストより

(以下は、事前に問題を発表し、試験当日には、メモやペーパーを一切見させないで行ったものである。このような創作テストを突りあるものにするためには、事前の準備期間を十分とらせることが必要に思う。生徒の解答の具体例は、整理してまとめ、次年度の授業案に活用した。)

問1. 無常を説明するのにふさわしい、いきいきとした具体例をあげよ。

(人生、世の無常、諸行無常を痛切に感じさせる例……)

問2. 私たちの生活の中で、さまざまな因果の結びつき(縁起)によって、ある一つの現象が生起しているという例を、できるだけ具体的に詳しく述べなさい。

問3. 人生におけるさまざまな「苦」をいきいきとした具体的な例をあげて述べなさい

※単なる言葉の羅列や抽象的に書くのではなく(小説的にでも)ありありと表現すること。特に、その苦が、執着、愛着、とらわれから起こっているということをよく感じさせる例を中心にして述べよ。

問4. 無心に雑念なくふっさされていることによって、いきいきとおおらかによく生きていけるという例を具体的に述べなさい。

※「我」や「意識」のためにぎこちなくこぼぼってしまっているのではなく、それから自由であるために、悠々といきいきとしている状態を示す例

問5. 資料の武田泰淳氏の文章を読んで、次のそれぞれの言葉がいいあらわそうとしていることを、適当な具体例によって説明しなさい。

(a) 諸行無常のみが、人間を深くする

(b) 諸行無常は平等論と結びつく

問6. 自他渾然一体となるあり方を、具体例をもって示しなさい。

問7. 一人では張りあいがない、喜びがない、或いは他の人と共に共感し、わかちあいたいという人間の生き方とあり方を示す具体例をあげなさい。

問8. 仏教の「愛」についての考え方を示す次の言葉についてふさわしい具体例に基いて説明せよ。

愛より愁は生じ、愛より恐れは生ずる。愛を離脱せる人に愁なし、いずこにか恐れあらん。

問9. 教科書の中道の説明に「琴を弾ずるには弦が強すぎてもゆるすぎてもいけない……」という例がのっている。中道の説明に適した同様な具体例を示しなさい。

問10. シヤカは、無常を我が事として真剣に自分自身の問題として受けとめ考えた。そこで、それまで無関心で気にもとめなかったことを、真剣に切実に自分の問題として考え受けとめるといった具体例を示しなさい。また、その逆の例（我が事として切実に受けとめなくなる）も示しなさい。

# アシヨカ王の政治思想について

東京都立葛飾商業高校教諭 浅香育弘

## はじめに

現代は不確実性の時代・不安の時代といわれ、政治・経済・社会の面のみならず思想面でも価値観が多様化し、混乱した世相に混乱した様々な主義・主張がなされ、なにが真実であるかなかなか見出しにくい。例えば民主政治の基盤をなす民主主義思想はフアシズム的考え方より、はるかによいといえようが、それとて扱い方如何では、古代アテネの例をみるまでもなく、衆愚政治と化し、崩壊の危機にさらされる。ソクラテスの危惧も恐らくその辺にあったのであろう。

政治の眼目は「文明」(文、明ラカナルコト)、つまり徳治(為政者が徳ニ拠ツテ治メルコト)にあり、それによって道義・人倫・社会的公正がまもられるよう「教育」が重視され、人民が相協力(和)して安定・充実した生活が送れるようにするにあると思う。勿論現代の国際・国内の政治は多様化しているので、専門的知識なくして事に当たることはできないと思うが、なにか大事にものが欠落しているように思えてならない。

東洋では古代オリエント諸国以来永い歴史を通じ、つい最近まで典型的な専制君主制が続いた。しかしその中でも例外がないわけではない。例えばアシヨカ王(在位269—232BC)である。王はインドの長い歴史の中で、その殆んど全土を統一した唯一の国王であり、釈迦仏陀(466—386BC)滅後100年、仏教を厚く保護・奨励し、その教えを国の内外に伝え、仏教のその後の発展に甚大な貢献をしたことは多くの人々が知るところである。

それは漢の武帝・隋の文帝・ローマ帝国のコンスタンチヌス帝がそれぞれ儒教・仏教・キリスト教をもって治国の本とし、或いは帝国再建を図る



うとしたのと形の上では似ているかもしれない。しかし後者はそれぞれの教えを利用して、自らの勢力を伸ばし、国家を統一乃至再建せんとしたもので、本質は権力政治であったといえよう。それに対しアシヨカ王の政治は、王が自ら仏陀の教えを深くきわめ、それに基づいて政治を行ったという意味で、真の意味でのダルマ（正法・法輪）による政治であり、儒教流によれば徳治政治・王道政治といえよう。時代は少し下るが7世紀始めの聖徳太子のめざした政治が、むしろこれに近いというべきか。

以下王がどのような経緯で仏教を学び、仏教に基づく政治を行ったかを、大野達之助氏著「聖徳太子の研究」を参照しつつ検討してみたい。（この本は昭和45年の出版であるが、同書には、33年・35年駒沢大学の研究紀要に発表された同氏のアシヨカ王に関する資料が、殆どそのまま掲載されているので参考になる）

#### 1. 正覚体験までの王の事蹟

アシヨカ王は祖父チャンドラグプタ王（在位321—297BC）、父ピンズサーラ王（297—273BC）の跡をつぎ、マウリア王朝第3代目の国王となった。即位前後の事蹟について北伝・南伝それぞれにいろいろな伝えがあるが、必ずしも事実を伝えているとはいえないようだ。（P.215～219）むしろ王が領土内各地に建てた石柱や磨崖の詔勅を通して、より正確に事蹟を知ることができそうである。そこで以下できるだけ同書にのっているこれら詔勅を通して、王の事蹟を辿ることとしたい。

まず即位前後の事蹟がどのようにのべられているかという点、インド一般の帝王と同様に歌舞宴遊を行ったり、遊獵の享楽に日を過ごすという生活をし（岩石詔勅第1章・第8章）（P.219）、即位5～6年頃までは外に向かっては武力侵略、内に対しては強権政治を行っていたようである。（P.220）

それが即位第7年頃から仏法に関心を懐き、僧伽に親近するようになった。なぜそうなったか理由ははっきりしないが、仏滅後100年を経、王

治下において僧伽が始めて分裂したことや、それに伴い第2結集を行ったことなどが歴史的背景としてあり、王も比丘・比丘尼に対し「僧伽を破つてはならない」と警告を発したりしている（破僧伽詔勅）ので、王自ら次第に真の仏法とはなにかについて、関心をもつようになったのではないかと考えられる。（P219～220）

そして王の即位12年頃に発布されたと推定される小岩石詔勅（精進詔勅の称がある）に、「余、はじめ信居士であった2年有半の間は、勉めて精進することもなかった。しかるに僧伽に親近するに至った1年、いな1年有余の間は、憤排し精進に務めた。願みて惟うに、従来閻浮提の民衆は諸天と交渉することはなかったが、今や交渉し得るに至った。これは精進の結果である」と述べている。（P220）この碑文からもわかるように王は仏法に関心をもち僧伽に親近して信居士になったものの、2年半程は精進することもなかった。ところがその後1年有余の間憤排し精進につとめ、その結果「従来エンブダイ（註、インドの国のこと）の民衆は諸天と交渉することはなかったが今や交渉しうるに至った」といっている。この間に一体なにが起こったのであろうか。

インドの武力統一支配をおし進めつつある王にとって、最後に残った強国は東南インドに位するカリンガ国であった。そのカリンガ国を王は即位第9年に征服した。この国は当時の資料によると、人口約380万、歩兵60,000、騎兵1,000、象軍700の常備軍を保有していたというから（P221）、強大な兵力をもった強国だったことはたしかだ。カリンガ征服については、南伝・北伝資料（P211）ともなにもふれていないが、岩石詔勅第13章に「王天子慈眼（註、諸天の恩寵を蒙られる慈眼の王の意）の灌頂8年を過ぎて、カリンガは征服された。捕虜15万、殺戮10万、戦禍に死するものその数倍に及んだ。カリンガを征服したことは天子の悔いあるところとなった。嘗て征服されたことのない国を征服すれば、必ず住民の殺戮・惨死・虜獲などを見る。それは天子の甚だ苦痛とし、

悲痛とするところなのである。…一切の勝利に卓絶せる勝利は法（ダルマ）の勝利である』とのべている。（P 221～222）

普通の帝王なら広大なインドの領土の大部分を武力征服し、統一に成功したのであろうから、勝利の栄光に酔うところであろう。しかし王は戦争によって多くの将兵・無辜の民・様々な宗派の修行者達が惨めに死に、或いは傷ついたことに悲痛な思いをし、深刻な反省をして、勝利の悲哀を痛感したのである。（洋の東西・古今を問わず歴史上の帝王・戦争の勝者でこのような反省をもった者が果たして出たであろうか）

そして、これを転機とし、それ以来1年有余に及ぶ精進によって、即位11年に王は遂に「正覚に達した」のである。これは岩石詔勅第8章に「天子慈眼王は灌頂10年を過ぎて正覚に達した」と明記されたことで明らかである。（P 225）もともと南方仏教では、仏陀は釈尊だけという考えが強いので、インドの長い歴史でもアシヨカ王を「正覚に達した」と考える者はなく、東西の大部分のインド学者も王が「正覚に達した」とは読まず、「正覚に向かって出発した」とか「仏陀が正覚に達した場所に行った」とよんでいるようである。しかしアフガニスタン南部のカンダハル近郊で発見された詔勅の碑文にアラム語で「10年を過ぎてわが慈眼王は、正法の創始者となるに至った」とあり、これを照合し参照すれば、岩石詔勅刻文「nikrami sabodhi」は「正覚に達した」と読まざるをえないという。（P 222～225）そして、「この時に至るまで閻浮提の民は神と交渉をもたなかったが、今や交渉しうるようになった。これは（余が）精進の結果である」と確乎たる断言をしているのも、精進の結果、正覚に達したからであり、このような正覚の体験に基づいて、王は伝統的なバラモン教の権威を実質的に否認し、決定的な批判をなしうるに至ったと考えられる。

## Ⅱ、正覚体験以後の王の治蹟

では王が正覚をえた即位11年以後、どのような政治をしたかというと、

布施・供養・仏塔の建立、教法仏通などが知られている。

まず布施についていえば、王の詔勅には沙門（仏教徒）・婆羅門などに差別なく布施を行い、種々の宗派に対し公平に監督させ、或いは寄進したことがのっている。（P 228）

また詔勅の中には、インド本土は勿論、セイロン島、シリアなどの隣接地方に人間と家畜のための医療所を設け、人畜用の薬草のない所にはこれ移植させたことが見えている。（P 229）

次に仏塔建立であるが、王以前に釈尊の舍利塔があったことは、ニガソー・サーガル石柱詔勅に「王天子慈眼灌頂14年、命じて仏陀の塔を2倍に増大せしめ、灌頂（20年）親しく詣してこれを崇めて且つ石柱を建てしめた」とあることによってもたしかである。王がいわゆる四大仏蹟を中心として、仏因縁所や仏弟子のため、すでに存在した何箇所かの塔を2倍に増大したり、新しく造ったりし、仏蹟を巡幸したのは、自ら正覚に達した王の仏恩に対する深い感謝・尊崇・敬慕のあらわれといえよう。（P 226・230）王以前仏舍利を分骨し建塔奉祀していたのは、一部の王侯等在家の外護者達だけで、比丘らの関心事ではなかったが、王の建塔敬慕・巡礼がきっかけとなって、仏塔の尊崇敬慕が一般の風潮となり、やがて僧団にも広がり受継がれるようになったと考えられる。（富永半次郎氏述、釈迦仏陀本紀余論（其の六）P 602—昭、27・12・4記より）（ついでながらいうと、アシヨカ王時代の塔（stūpā）は墳丘型（伏鉢式墳墓）で、今日の五重塔の五層の上の相輪の露盤、または露盤上の伏鉢にその原型を残している。）

更に仏法弘通についていえば、王が岩石及び石柱に刻した詔勅碑文は、現在のインド・パキスタン・アフガニスタンの各地にわたって、31ヶ所発見され、主に地方の中心都市・巡礼の霊場・仏教その他の遺蹟など、民衆の多く集まる所が選ばれたようだ（P 321）そして詔勅の内容には、僧伽の紛争を戒しめるもの、仏陀の懿徳を顕彰するものなどあるが、特に

官職にある者や一般人民に正法を宣示し、実践・弘通を願ったものが多いようである。

例えば王の即位11年から12年頃に発布されたと考えられているカルカッタ・バイラート詔勅に「諸大徳、仏陀世尊の説き給うところは如何なることにても、すべて是れ善言なり。しかも諸大徳、余が以下に挙ぐるところは正法にして、余はそれが永く存するを得べしと確信する資格を有す」と述べて、七つの經典を列挙している。(P.225 註、經典の内容は不明、この言葉は聖徳太子が晩年「世間虚仮・唯仏是真」——世間一般の人々の言行は我執に基づくが故に虚偽が多いが、正覚者仏陀世尊の言行は常に真実で、うそいつわりがない——と述懐した言葉に比肩されよう)

また即位第13年から14年にかけて発布された14章からなる岩石詔勅の中で(特に第3章・第5章)、ユクタ官・ラージューカ・ブラデーシカ・マハーマートラ・ダルママハーマートラ等の官職を中央及び地方の行政組織に配し、それぞれ一般行政官としての職掌もあつたであろうが、自ら王の正法を実践しつゝ、人民を教え導くことを任務とするよう示している。(P.247~294)特にダルマ・マハーマートラ(正法大官)は、王の創設したもので、王治制の官制で最も重要な官職だったようだ。その職責はいろいろな詔勅に明記されている。(P.255~258、234)

そして民衆徳化のために説いた正法として、例えば同岩石詔勅第3章に「父母には孝顺、知己・朋友・親戚・婆羅門には寛容であり、殺生を捨離し、奢侈吝嗇でないのが善である」と説き(P.247)、その他師長への随順・尊敬、出家者(註、宗派をとわず修行者・学ぶ者の意)・親戚・朋友・奴婢・貧賤に対する適切な処遇、出家者・長老に対する布施、及び抽象的徳目として親切、信実、清掃、温和、自制、報恩などが詔勅の随所に説かれている。(P.312)これらはいずれも王の正覚体験に基づいて説かれた徳目である。

更に王の即位28年に発布されたと考えられる石柱詔勅第7章の中で、

「人々の徳（ダルマ）の増進は唯まさにこの方途によって達成されるものである。即ち、徳目の遵守と内観とである。しかしながらこの中、徳目の遵守は軽く、内観によってこそ大いに増進するものである」と自己の体験の結論をのべていることも注目に価する。（P.226、311～312）

ここでいう人々とは一般民衆と官吏を含めた意味での人々であり、彼らに対して人間修養の道を説いたのであった。そして第1は正法を遵守すること、つまり王の正法を行為の規範としてそれに順っていくことであり、第2は内観によって自己を如実に観察し、我執を解脱することである。恐らく前者は人民に可能な方法として人民に対して教えたものであり、後者は為政者としての官吏を意識して官吏に説いたものと考えられる。人民には王の正法を忠実に守って平和な生活を送るようにすすめ、王の代理として人民を治める官吏に対しては、王が行ったと同じように正覚に向かって努力し、その方法として、王自身の体験に徴して示された最後の結論が内観（*nijhati*）であった。（これを聖徳太子が十七条憲法で官吏の服務心得を示し、官吏の自覚・向上をうながしたこと——特に7条で「世ニ生知少ナシ、尅ク念ヒテ聖ト作ル」といっていることや、法華義疏、安樂行品で「菩薩ノ道ハ他ヲ正サント欲シテ、先ゾ己ガ身ヲ正ス」と註釈し、「正他」の根底として「正己」が必要であることを強調したことと一脈通ずるものがあるといえよう。）

アシヨカ王は在位37年で崩じたといわれている（P.236）ので、最後の石柱詔勅発布の即位28年から、晩年10年間の事蹟は、南伝・北伝にいい伝えもあるがはっきりしない（P.235～236）恐らく日常の政務を行いつつ、いままでの詔勅にのっていたように、布施・供養や種々の官職を任期毎に各地に巡回させ、或いは諸外国に派遣して、仏法の弘道を図り、ダルマ（徳）に拠る政治を続けたものと思われる。

#### まとめ

従来、南方仏教では、仏陀は釈尊だけという考えが強いので、インドの

長い歴史でもアショカ王を「正覚に達した」と考える者はなく、現在、東西の専門のインド学者でもアショカ王が「正覚に達した」と見る人は非常に少ないようである。

しかし日本では、富永半次郎氏をはじめとする一部の人々によって、「アショカ王正覚説」が説かれてきたことは、非常にユニークな注目すべき意見であると思う。このレポートは、殆ど大野氏の所説をなぞり、紹介させてもらったわけであるが、それは私自身もその所説に賛同し、少しでも多くの人に理解してもらいたいと思ったので、書いた。

尤も現代のインド連邦国家で、その国旗の中央にアショカ王建立のサルナート石柱昭勅の四獅子像の下に刻んだ日輪（法輪？）をシンボルとして入れたのは、かつてのインドの栄光を再現せんとする願いをこめたものといえ、現代インド人にも王が深く敬慕されていることがわかる。

たしかにアショカ王のようなダルマ（徳）に拠る政治によってこそ、国内・世界の平和、或いは国民・人類の福祉は、真の意味ではじめて将来されるのではなからうか。そして王が官吏等に諭した人間の自覚・向上への道は今日なお重要な意義をもつといえないだろうか。

しかしアショカ王のような政治思想は、実現不可能な理想・夢物語であり、或いは独裁政治に走る危険があるから、やはり現代の多数決主義による民主的政治のやり方の方がよりよいと思ひこみ、現状に甘んじようとするか、不満・不信・絶望から無関心をきめこむ者の方が多いのかもしれないが、そのこと自体、政治の腐敗・墮落、更にはファシズム化への途に通じ、本当は非常に危険なのではなからうか。

「上行へば下ナビク」（十七条憲法第三条）は、良きにつけ悪きにつけ古今東西に通ずる政治の鉄則であるが、結局は一人ひとりの反省・自覚にまつ他ない。各自がこのような反省をもつためにも、アショカ王の政治思想は今日、再検討・再評価する意義をもっていると思う。

なお昨年正月休みに第1回全倫研主催の「インド・ネパール研修旅行」

に私も一員として同行させていただいた。私としては、四大仏蹟を中心に、  
仏蹟を巡礼しつつ、同時に仏陀の懿徳を顕彰したアシヨカ王の足跡を少し  
でも辿ってみたいという心づもりがあったからである。

その際、旅行中拙ない歌をいくつか作ったが、以下その中から釈迦仏陀  
とアシヨカ王追慕のために、作った歌を載せさせてもらうことにする。

ルンビニー園（釈尊誕生の地）にて

○どの世にし独り尊き釈尊は鄙のルンミニーに生まれませしなり

○みほとけの誕生の地あかす如くアシヨカ王の碑ひそやかに立つ

ルンビニーの西南方ビブラワの地（カピラ城の跡地？）を拝して

○釈迦族が建てしスツーパーソカ王が二倍大にせしといふは彼方か

ブツダ・ガヤ（樹下成道の地）にて

○ニグローダの神樹に近き尼連禪河流れは見えず河原広し

○釈尊が悟り開きしといふ金剛座近くアシヨカ王が碑移し建ちおり

大精舎（マハボテイ）は現在、九層の塔なるが、

初期の精舎（塔）はアシヨカ王が建てしと聞く

○マハボテイを囲むが如く外つ国の建てし寺々あちこちに見ゆ

サルナート（初輪法輪の地）にて

○みほとけが初めて法を説きし頃は鹿ぞ棲みけん広きこの野に

○アシヨカ王が仏陀の遺徳たたへんと建てしスツーパー鹿野苑に見ゆ

○アシヨカ王が建てしピラール（石柱）四本立ちエデックト（詔勅文）

の跡しかと残れり

ビンピサラ・ロードに立ちて

○釈尊が法を説きける靈鷲山身近に拝し感無量なり

ナーランダにて

○ナーランダに養晦せし弟子の舍利弗が師に相いまみえしはこころあた

りか

○ナーランダの学園近く一番弟子の舍利弗の塔の建つぞふさはし



パトナに宿して、ここはパータリブトラの跡なりと思へば

○マウリア朝のアショカ王が都せし所は此処ぞ懐かしきかな

同じくパトナにて、この地よりチャーパーラは彼此の間なれば、

パーリ涅槃経に見えし晩年の釈尊を偲び奉りて

○晩年の世尊が阿難に獅子吼せしチャブラに向ひふし拝みけり

クシナガラ（釈尊入滅の地）にて

○釈尊が身罷りし此処クシナガラは日差し明るく静寂の地なり

○弟子達に見まもられ静かに世を去りし師はねんごろに葬られたり

○涅槃せしみほとけが墓地にアソカ王の敬慕して建てし大いなる塔建つ

○アショカ王が建てしスツーパー土まんじゅうの古き形をかすかに残せり

○ここ聖地は芝生の園に菩提樹立ちブーゲンビリア咲きて師を供養せり

昭、54、1、10記了。折からニュースはカンボジア・ベトナム  
紛争や、国内的にはロッキード問題に引続き、グラマン社・ダグラ  
ス社との不正取引問題を経ている。

○マンゴ樹やブーゲンビリア咲く寺の庭広々として静かなりけり

# 親鸞の思想

東京都立国分寺高等学校 菊地 晃

## 1. ねらい

倫理・社会が本来何をめざして発足したのだったかという問いほど、今日においてラディカルに問われている問題は、私にとって他にはないと思っている。この種の問いは、しばしば危機に臨んで最も痛切に問われ、そこから後世へ何らかの遺産を残したのであった。

私なりにこの問いに答えるとすれば、その一つとして価値観の内面化と主体化とをあげることになる。

先哲がなぜ、あるテーマを自己の課題としてとりあげたのか、そしてそれに対してなぜある答え方をしたのか、ということとその先哲の心の内側にはいり込んで、了解するということ——こういう営みこそが実は、そこでとりあげられている問題を内面化して主体的にとりくむ営みとなる。

このように考えて、われわれはこれまで努力してきたのだと私は思う。

親鸞やルターは、この意味で最適の先哲であると私は思っている。すなわちそこには自己自身の苦悩という切実な課題を通して到達した思想という価値があるばかりでなく、課題とその克服・達成の道程が、共感しやすい形ですなおに示されているところに、私は教材としての魅力を感じる点である。

ことでの学習においては、善悪の問題を、他人の行動を批評するためではなく、まさに自己検証の厳しい基準の問題として実感させることを、ねらいにおく。

## 2. 展 開

### (1) 浄土思想の展開

はじめに浄土思想の展開を簡単に跡づける。その際平安中期以後の政治

社会の動揺にもふれ、この状況の人々がどう受けとめたかを、次の例示によって生徒ができるだけそこに身をおいて考えられるように努める。

例1 枕草子(25段)より 「すさまじきもの・・・除目に司得ぬ人の家・・・」---すさまじさの意味

例2 藤原純友の乱と平将門の乱 -NHK・TVドラマを想起

例3 芥川龍之助「羅生門」---現代国語で既習

これらの例から貴族社会の行き詰まり、民衆の困窮、未来への不安などについて、時代状況の中に身をおいて考えさせる。

例4 藤原氏全盛といわれる道長が、「この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることのなしと思へば」という自信を示す一方で、平等院を建立し阿弥陀仏を祀ったのはなぜか。

これらから不安の状況で浄土思想が発揮した魅力を窺うことができる。

例3の下人や、例2の人たちのような逞しい選択ができない、弱く平凡な人間の悩みに応える思想として、悪人正機にその頂点を極める浄土信仰が受けいられる事柄は理解されやすい。

## (2) 悪人正機の意味と他力の考え方への展開

法念との出会い(その1) 親鸞は自己に厳しく、自己の中のどんな小さな悪をも、自ら許すことのできない人であった。その自己の悪を、在来のどんな修行によっても克服し得ない苦悩の底で、法然の専修念仏の教えにふれた感激が、師をも超えた境地への出発点となったことを略述する。

悪人正機 ここでは、欽異抄第3条全文を原文と現代語訳とを用いて展開する。原文には、現代語訳では困難な格調、力、味わいがあるが捨てがたい。生徒には当惑気味であるが、強引に刷らしていく。

設問 ここでいう、「悪人」とは何か。

ここでねらうことは、善悪を他人の行動に対する外在的批評の手段として考えるのではなく、自己をいかに厳しくとらえるかという視座の転換がどれだけできるか、である。

他力の思想 ほんとうに自己を悪人と自覚するならば、われわれは自己過信のまどろみから醒め、自己への底知れない絶望を味わうことになる。倫社の目的は浄土真宗の信者を作ることではないが、このような絶望を少しでもわがこととして知ることは、人間の謙虚な生き方を考える上で有意義であろう。このような絶望によってこそ、他力への絶対帰依という不動の信条が成立するのだという点の理解は不可決のねらいである。

### (3) 他力の世界と悪人の自覚

法念との出会い(その2) 悪人正機と他力の考え方をより深くとらえるためには、歎異抄の他の箇条にもふれる必要があるが、配当し得る時間の制限を考慮すると、1～2箇条に精選せざるを得ない。

ここでは、第2条(原文と現代語訳)の全文を眺ませる。まず、これが語られている状況の説明をする。すなわち、不肖の子善鸞が父子相伝の秘教という偽りを述べ、これによって関東の信徒の中に深刻な動揺が生じ、代表団が「十余ヶ国のさかひをこえて」詰問に来たこと。これに対する親鸞の所信の説得という切迫した場面で、偽わりのないぎりぎりの真情が吐露されている点は、内容理解のために欠かせない。

設問1 なぜ親鸞は、法然聖人にだまされて念仏のために地獄に落ちたとしても後悔しないのか。この条の前半を読んで答えよ。

ここでは、法然への絶対的な信頼という面が強く印象づけられる。しかし、それにしてもなぜ・・・という疑問はなお残る。

設問2 同じ問いに後段をも読んで答えよ。

ここで、悪人の自覚、自力作善への絶望を経た、弥陀への帰依が親鸞自身の信仰告白としてすなおに語られる。思索に主体的に参加してきた生徒の目が輝くところである。

設問3 念仏は浄土往生の道かどうか知らないというのは、第3条と矛盾するのではないか。—— 気のきいた生徒はこう質問できる。

ここで、生徒はつまづく。自己の信仰という次元の問題と、他者に対し

での客観的証明（特に不信心の人に対する）の不能ということ、きちんと区別して理解させる工夫のいるところである。

つれたりとして、善辯への厳しい処置 → 父子の義絶にふれ、「出家とその弟子」を紹介し、文学的アプローチも奨める。

他力の思想の徹底 第6条を眺ませる。ここでは、親辯の到達した境地を全面的に、その深さで知得することの困難さを、その一端でも感得させる。「わが弟子の、ひとの弟子のといふ相論」の实在がそれを示す。

設問 親辯は弟子一人も持たないというが、なぜか。

ここでは、わが信心も他人の信心もすべて、「弥陀の御もよほし」という他力の立場の極致が示されている。弟子でなく「同行」と考える謙虚な平等観こそ、指導者の徳となるという逆説的真理でもある。

### 3. まとめ

以上、親辯の思想の指導についてレポートしたが、実際の展開ではまだねらいを十分に満たせていない。論述テストでなかなか及第点を与えられる答案が得られないことから、反省すべき点が多い。

プリント資料は、僅かるケ条に絞った。精読させるためである。思想が述べられた事情はできるだけいねいに説明した。思想は常に具体的状況の中で生まれたものであると考えるからである。思想のもつ普遍性は、われわれ自身の具体的状況にかかわるところで意識されるのであり、一人一人の生徒が思想をわがこととしてとらえるという、個性の形をとり得てこそ、その普遍性は立ち現われるものだと、私は考える。

この十数年培ってきた、倫理・社会の土俵をやがて失うことは、まことに痛恨に耐えない。余儀なく与えられる「現代社会」の土俵は気の重いものであるが、教材精選の視点、その生徒への提示のしかた、問題の問いかけ方等々、倫理・社会で身につけたものを最大限に生かしていく努力は、続けたいものである。

## ジョン・ロックの社会契約論

都立桜町高 佐藤 勲

〔ねらい〕

「人間の社会生活が、実は人間の観念を契機とすることによって成り立っていることを自覚し、そのカラクリを見破ったときに、今度は与えられた秩序は、永久の秩序ではなくなる。そこで人間が社会に単に組み込まれているのではなしに、自覚的に社会を変えようとする」(『近代の政治思想』福田敏一、岩波新書)ヨーロッパの近代が、こういう社会のメカニズムを明らかにするという作業をしている。

近代ヨーロッパが発明した近代国家は、現代世界では150を越えている。国家間の争いが、核戦争を起こさないという保障のない現在、人類の破滅にさらされている。人間の生存を保障できるような新しい機構の創造を考えていきたい

〔展開〕

### ＜自然法思想の意義＞

人間が集団生活を営むためには秩序が必要であり、そこには支配・被支配の人間生活が生まれる。最初は赤裸々な力関係になろうが、やがて理性の持主である人間は、その関係をできる限り合理的なものにしようと努力する。人々の理性が目覚め、合理主義の時代が訪れてくると、いままで支配者の権力が身にまとっていた神秘のヴェールはだんだんと取り除かれ、もはや力が正義であるとか、伝統が正義であるとかいう教義は、理性の前に屈服し、権力の基礎とはなりえなくなった。ただ理性の要請する正義に応えることのできる権力だけが、権威をもつことができる。

それでは理性もっている正義の観念とは、一体何なのか。時と所を越えた普遍的な正義とは何なのか。こうしたものの実体を究明しようとする

人間の努力が、あらゆる実定法（現実の法律）に先立つ究極の法としての自然法という観念を生み出したのである。

自然法の考え方はアリストテレス以来あったが、時代によってかなり異なった内容をもって展開し、中世の神の愛を中心とした神学的な自然法は、近世合理主義の訪れとともに後退し、新たに理性、科学そして個人の尊重という一つの大きな時代の流れに沿った世俗的な自然法が、17、18世紀のヨーロッパに登場したのである。

ロックが自然法の研究に没頭して、1664年に『自然法論』をラテン語で書いていた頃、大陸ではオランダの「近代自然法の父」グロテウスやドイツのブーフエンドルフが、神学的自然法を打破して人間中心の世俗的自然法を樹立していた。一方、イギリスではまだ神学的自然法が重んぜられていて、1651年ホブズが『リヴァイアサン』で説いた極めて世俗的な自然法は、なかなか受け入れられなかった。

ロックの自然法は、ブーフエンドルフの影響を受けて世俗的であるとともに、イギリスの伝統的な保守性により宗教的でもあった。

まさにロックの自然法は、イギリスにおける自然法の中世から近世への橋渡しの役割りを果しているのである。

#### ＜理性による自然法の認識＞

自然法を天の「啓示」によって知るというのが、17世紀の宗教界において一般的であったが、近世合理主義の力が強くなっていくにしたがって、ロックも「理性、実はこれが自然法なのであるが、それはただ相談をもちかけてくるにすぎない人間に、すべて人は平等であり、独立であって、それゆえ他人の生命、健康、自由ないしは財産を侵害すべきではないということ教える」と考えるようになった。

更にロックは、キリスト教そのものを合理的なものと信じて、その「啓示」は理性と一致するものとした。

感覚経験を通じて得られた知識をもとにして、理性が推進し、万物の創

造主としての神の概念に到達する。この神が、自然法の作成者なのである。

### ＜自然法の拘束下の「自然状態」＞

ロックは、17世紀頃の多くの合理主義理論家達—グロテ イウス、ホッブズ、プーフ エンドルフ—と同様に、政府の起源の論理的な出発点として、政府以前の「自然状態」から政治論（『統治論』）を展開している。

自然状態における個々人がその理性によって自然法を認識するとき、そこに自然権が神より与えられる。孤立した独立の個人は、自己の生命、自由を確保するため、自然のままの共有の荒れた土地に、自己の労働を加えることによって私有財産（リンゴ）を得る。そのリンゴを腐らせるほど所有してはならない。自然状態においても一つの秩序があるのである。

### ＜自然状態からの離脱＞

ロックでは、自然法は孤島に住む人間をも拘束するほど強いものであった。しかし、それでも自然法だけでは社会の平和を維持するのに十分ではなかった。自然法に反する者があれば、例えば人を殺す者があれば、他のすべての人間が自然法の名のもとで彼を殺してもよい。この処罰権を政治に「信託」することによって、生命、自由、財産という自然権をより一層安全確保していくために政府の保護のもとに入るのである。

### ＜「同意」による共同社会への結合＞

自然状態から統治機構の設置までに二つの段階がたどられる。

まず自然権の保護を目的とする相互の契約によって共同社会（政治社会）への移行が行われ、次に信託関係によって特定の政府が設置される。

社会の形成は、ロックによると、各人の同意によるなければならない。

人間は自由にして平等であるからである。その場合、全員の同意というのは事実上不可能であることを認めて、ロックは多数者の同意でよいとする。そして、多数者の決定が少数者をも拘束する。その拘束は、自然権を互いに尊重し共存関係を保たねばならぬという自然法から来ている。共同社会（政治社会）に結合する目的は、個々人の自然権をより効果的に守る



ことにあるから、もし反対する少数者のために社会の結合が弱められ、十分に機能できない結果になれば、それはまさに共存を求める自然法に反することになるからである。

#### <「信託」による統治機関の設置>

この契約によって一つの社会が作られただけでまだ統治機関は存在しない。これが設置されるためには「信託」という別の手続が必要である。社会契約と信託とは時間的には同じに行われるかもしれないが、原理的には異なった手続として区別しなければならない。

国民が統治者によって保護されるかわりに、統治者に対する服従を義務づけられる服従契約における絶対的権力者と国民との間の戦いの状態を排除しなければならない。政治社会の結成と統治機構の設置との二つの段階に分けて考えることで、統治機構の解体が直ちに自然状態への逆行を導かないための安全弁を設ける。そのうえで、国民の反抗権に根拠を与えるために、統治機構の設置の手続を国民による政治権力の「信託」ということで説明する。信託されたものは受託者・統治機関がその責務をおろそかにすれば容易にとりもどせるのである。

#### <まとめ>

国家という不思議なもの、ホップズが旧約聖書に出てくる怪獣リヴァイアサンのカラクリを明らかにして、そのメカニズムを人間に自覚させた。

それが、自然を越えた人間の能力に依存していることを暴露したのである。つまり、自然のレベルに還元すれば、社会は人間の集合にすぎない。

それが社会として、あたかも実体であるかのように人間の眼に映るのはこれらの人間が特定の行動様式に従っているからであって、それを取りはずしてしまえば、どんなに堅固に見える社会も崩れてしまう。これが制度の問題である。この制度を支える行同様式を、ホップズ、ロック、ルソーは人間の高次の能力、理性という抽象的な能力だと見たのである。

# 大乘仏教における空思想

## (「般若心経」の資料解説)

都立蒲田高等学校 徳久 寛

### (1) このテーマを取り上げた理由

①宗教というと大半の生徒は自分とは無縁の世界で、何か神がかり的な世界であると考えているように思われるので、仏教の学習は思想の解説中心よりも、経典そのものを取り上げ、どのようなことが書かれているかを自分の目で確認させていく方が効果があると思われ、又興味をひきおこすことができるのではないかとと思われる。

②「般若心経」はかなり難解であるが、その中心思想が空(無常)思想にあるので、大乘仏教の世界観を知るためには最適の資料であると考えられる。

### (2) 展開

#### ①「般若波羅蜜多心経」(題名)

般若は知恵、人生の真実の姿を知る智恵。波羅蜜多は完成させること、到達すること。心は中心の心。経は仏陀の教え。

従って、「般若波羅蜜多心経」は「知恵を完成させるための大切な仏陀の教え」となる。

②「観自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。」  
(「観自在菩薩、深い般若波羅蜜多を行ずる時、五蘊は皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したもうなり。」)

観自在菩薩は自由自在にすべてを見とおすことのできる菩薩。衆生を救済するために般若波羅蜜多の修行に励む菩薩。般若波羅蜜多は知恵を完成させるための修行。五蘊は人間を構成する五つの要素。色受想行識。色は肉体、受想行識は精神の働き。受は対象を外界から感受する働き、想は感受した対象を思惟する働き、行は外界に対して実践する意志の働き、識は

受想行の働きを統一する意識の働き。空は無常。クラクレイトスの「万物は流転する」と同様。

以上からこの段落は「観自在菩薩が深い知恵に到達するための修業をした結果、彼は、人間も含めこの世界はすべて無常であって、何ひとつ固定したものはないということを明らかにし、人々の苦しみを救ってくれた」となる。

空は本經典中の最重要語であるから、空の説明のために、生徒にも比較的なじみ深い「平家物語」や「方丈記」の冒頭部分や「いろは歌」その他の詩歌を引き合いに出すとかなり無常観を印象づけることができる。

③「舍利子。色不異空。空不異色。空即是空。空即是色。受想行識。亦復如是」(「舍利子よ、色は空に異ならず、空は色に異ならず、色は即ちこれ空、空は即ちこれ色、受想行識もまたまたかくの如しなり」)

舍利子は知恵第一といわれた仏陀の弟子。本經典中では聞き手の役割。

この段落では前段落での空をくり返し説明している。肉体はやがて滅び行くものであるから空(無常)であり、受想行識の精神作用もその時その時の働き方であって、時と所が変わればまた変わってくるうつろいやすいものである。

④「舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不増不減」(「舍利子よ、このように諸法は空相にして、生ぜず滅せず、垢つかず浄からず、増さず減せず」)

舍利子よ、この世の真実の姿(諸法)は空(無常)であるから、生滅、垢浄、増減というような相対的なとらえ方は本来の姿ではない。我々はおろかにもこの相対的なとらえ方を絶対視して、ここに執着し苦しみがいている。現実の課題解決に努力することは大切であるが、執着することはおろかである。

⑤「是故空中。無色無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色声香味触法。無眼界乃至無意識界。無無明亦無無明尽。乃至無老死。亦無老死尽。無苦集

滅道。無智亦無得。」（「是の故に空の中には色も無く、受想行識も無く、眼耳鼻舌身意も無く、色声香味触法も無く、眼界も無く乃至意識界も無く無明も無く、無明の尽くことも無く、乃至老死も無く、また老死の尽くことも無く、苦集滅道も無く、智も無く、また智を得ることも無い。」）

眼耳鼻舌身意は色声香味触法を感受する六つの感覚器官、六根のこと。無明は迷い。無明から老死までは因果応報の十二因縁の世界。苦集滅道は初転法輪での釈迦の教えた四諦。

前段落で生滅、増減といった相対的なとらえ方に執着することが我々の苦しみの原因であると説明された。現実世界を空（無常）であると理解した結果である。この段落では種々なこと柄がすべて無という言葉で表現される。無とは空（無常）のことである。無常な世界の中の仮りの認識である。固定されたものとして執着してはならないものである。色受想行識、眼耳鼻舌身意、色声香味触法、眼界ないし意識界。我々の肉体も精神もろいろ行くものであり永遠のものではない。我々が眼で見、耳で聞く世界すべてがうつろいやすい仮りのものにすぎない。我々の存在や認識する世界が空であるというだけではない。仏陀の教えた仏法すらも仮りの真理にすぎず決してこれに固執し信じ切ってはならない。無明から老死までの十二因縁の教え、苦集滅道の教え、これらはみな仏陀の教えである。この仏陀の教えすら無である。草木も国土もさらになかりけり、ほとけというもなほなかりけりである。真実の智を求め、これを得ようとする求道心すら否定される。智も無く、得るも無しである。

◎「以無所得故。菩提薩埵。依般若波羅密多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。究竟涅槃。三世諸仏。依般若波羅密多故。得阿耨多羅三藐三菩提。」（「得る所無きを以ての故に、菩提薩埵は、般若波羅密多に依るが故に、心に罣礙無く、罣礙無きが故に、恐怖有ること無く、一切の顛倒した夢想を遠離して、涅槃を究竟す。三世の諸仏も、般若波羅密多に依るが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得たもうなり。」）

菩提薩埵は菩薩のこと。ここでは最初に登場した観自在菩薩に同じ。罣礙は心の罣害、こだわり、執着。顛倒夢想はひっくり返った夢、現実に固執するおろかさ。究竟はきわまり到ること。涅槃は心の静かな悟りの境地。三世諸仏は過去、現在、未来に出現した、あるいは出現する涅槃に到達した諸仏。阿耨多羅三藐三菩提は永遠の悟り、涅槃に同じ。

空(無常)を体得し、こだわりをすてた結果、もはや心には執着すべき何ものもなくなり、永遠の寂靜が得られる。菩薩も諸仏も、心は罣礙なく、罣礙なきが故に、恐れや不安がなく、あらゆる夢想に固執することなく、涅槃を究竟し、阿耨多羅三藐三菩提を得ることができる。

⑦ 「故知般若波羅密多。是大神呪。是大明呪。は無上呪。は無等等呪。能除一切苦。真実不虛。故説般若波羅密多呪。即説呪曰。羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提娑婆訶。」(「故に知る。般若波羅密多は、是れ大神呪なり。是れ大明呪なり。是れ無上の呪なり。是れ無等等の呪なり。能く一切の苦を除き真実にして虚からず。故に般若波羅密多の呪を説く。即ち呪を説いて曰く。羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提娑婆訶。」)

呪はまじないの言葉。真言。陀羅尼。羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提娑婆訶は「行け、行け、悟りに行け、完全に悟りに行け、悟りよ幸あれ。」

空の智を求めこれを絶対視することすら、執着であり苦悩の原因である。とすれば仏の教えは、ただ呪によってのみ表現される以外に道はない。般若波羅密多は不思議な、大いに明らかな、無上無比の呪であって、一切の苦しみを取り除き、真実にして虚しからざる呪である。般若波羅密多の呪は、ただ、羯諦 羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦 菩提娑婆訶とのみ表現される。

### (3) まとめ

#### ① 指導上の留意点

A 読解用の音読みのついた經典全文に、返り点、送り仮名を書き加えたプリントと書き下しの全文をプリントにして、生徒に配布しておく。

B あらかじめ經典中の重要語句を指定し、漢和字典、国語辞典、哲学辞典等で調べさせておく。

C 古典の学習のように段落ごとにひとつひとつ解釈をすすめていく。

D 段落ごとに、あるいは全体を通して、經典の写経や書き下しを作業として課し、意味を確かめさせていく。

② 参考資料

「般若心経・金剛般若経」 岩波文庫 中村元、経野一義

「般若心経講義」 角川文庫 高神覚昇

「般若心経」 講談社文庫 金岡秀友

「仏陀の鏡たもの」 講談社学術文庫 鎌田茂雄

般若心経カセットテープ 「臨濟宗檀信徒勤行」 KKポニー

# 手記にみる「青年の心理」考

都立府中高校 永上 肆朗

## 1. モラトリアム志向

・大学とは一考えてみると、僕はいつごろから大学へ行こうと考えはじめたのかさえはつきりしない。…世間の風潮にのっかって流されているような気もする。かと言って風潮に逆らって生きていく自信も今の僕にない。今、僕が大学に行こうと考えているわけは、社会に出る自信がないためと大学へ行けば、何か自分にプラスになることがあるのではないかという希望である。

・二年になって毎日の生活がみち足りている。多少の悩みはあるが、幸せな私。だからこそ「今を大切にしないで」と思う。実際楽しい時間はおどろく程の速さですぎてゆく。それと共に私も成長してゆくのだろうが、本当の大人に近づいていくことにとっても抵抗を感じる。

・このごろ、私の心は鉛のように沈んでいるのだ。理由ははっきりとはわからないのであるが、まず第一に人間というもの、とくに大人というものが理解できない。私の目には大人がすごく腹黒く薄汚なく思うのである。表面では人の幸せを喜んでいるふりをしていても内面では人の幸せに多少のしつとねたみ、又は他人の不幸を喜んでいるように思われてしかたがない。社会のニュース—人殺し、けんか—やTVを見ていると、どうも大人というものはすることがせせこましくて、現実的すぎて夢が全くないかわいそうな生物のようだ。ある意味ではビエロのようで、がむしゃらにラッシュ=にもまれて通勤していくサラリーマンをみていると、日本という舞台にビエロがいる図を思いうかべてしまう。そしてなぜかせつなくこの世が悪しくなってしまう。

## 2. しらけ

• 三無主義—私たちにとってたいへん不名誉な言葉だと思う。しかし、自分を含めて今の若者には少からずそのような傾向があることは事実である。たとえば身近な学校生活において、平気でそうじをさぼったり生徒総会などではちっとも話し合いに参加しないことなど教えあげればきりが無い。…なぜか「みんなが無責任なんだから自分も・みんなが〇〇〇だから自分も」というように全体にのめりこんでしまっているのだと思う。これはひっくりかえせば、みんながきちんとしていれば、おのずと自分もきちんとするはずである。…つまり「自分だけ真面目（優等生）になりたくない」というのが本音といえれば本音だからであろう。

• しらけ鳥飛んでゆく南の空へ 今、かなりはやっているしらけ音  
 みじめみじめ 頭である。この歌を、現代のシラ  
 しらけないでしらけないで ケた時代を反映した歌だと思う人  
 しらけたけれど も多いだろう。たしかにぼくらの  
 みじめみじめ 体内には、しらけ鳥が巣をつくっ

ているようだ。なんとなくシラケの世代というのが解る気もする。しかし我々の体内にも、そのしらけ鳥を追い出そうとする勢力があるのも事実だということを忘れないでほしい。そして、それが勢いづき、しらけ鳥を追いはらった後、おもしろいことに、例のしらけ鳥音頭が、本当に意味をもってくるのである。しらけの根源はテレビなんだ。木枯し紋次郎なんていうのもその一つだ。人間の画一化指向が、創造力や、行動力や意志の力を弱めシラケへと導くのだ。…それを打破するとき、おもしろいことに傷ついたしらけ鳥は、命からがら「みじめ、みじめ」と南の空へ飛んでいくのです。その時この歌を歌ってあざ笑い、我々への讃歌となるのである。

### 3. 優しさ

• 受験—現代は、広く選択できるという点では幸せな時代ぞと思うが、それだけに自分の生き方、価値観の発見に苦勞すると思う。ただそんな時代ではあっても、受験期になると、偏差値とか、いい大学に入ったとかで



人間が計けれてしまう傾向があるし、なによりも自分でもそう思えてくるのが恐ろしい。人にはそれぞれ個性があるはずなのに。…よく、私達の世代を「やさしさ」という言葉で象徴する。事実、自分をみてもまわりをみてもそう思う。自分自身を考えてみて、人にやさしいのはいいが、自分だけやさしいのには困ってしまう。ただこういう風潮の中で互いにきびしく対するとしても、そう考える人だけが浮き立ってしまったてはやりにくい。

• いつからか「優しさ」が女性だけのものではなくひとつのブームのようなものになってしまった。…あらゆる人が「優しさ」を求めている。人はそれに応えるようとして、表面だけでも、「優しく」みせかけようとする。もし、他の人に「優しさ」を求めている人がいるなら、その人が「優しい」人にならなければならない。相手に気に入られなくてもいいではないか。

• 優しさの中にも厳しさは必要です。反対に言えば厳しさの中にこそ本当の優しさを見出せるのです。…電車やバスの中に、お年寄りや体の不自由な人の為に、シルバー・シートというものがありますが、あれは何だか少し人間の思いやりや優しさなどの感情を無視して作られたもののように思えて仕方ありません。

#### 4. いかに生きるか

• 16年間（もう17才になりつつあるが）生きてきて“生きる”というのは決して難しいことではないと思う。ただその“生”の中で自分がどのように歩んだかが、ポイントなのだと思う。絶対に“must”ではない。常に“want”であり“ing”でありたい！それが「若さ」だと思う。「青春」というと10代後半から20才前半のころをさす言葉になっているが、そんなのは本当の“青春”ではないような気がする。30代でも50代でも関係ないんだ。“熱さ”のある人、その人はいつも“青春 ing”なのだと信じている。

• 自殺一近頃若者達の間でさかんに自殺が問題にされるが原因は何であろうか。私は今の青年たちには“がまんする”という力が欠けているので

はないかと思う。現代は社会も複雑になり人口も増え、国も生産や技術革新など、もういまやアメリカに追いつくほどになっている。そのためよりよい人材を必要としている。そこで人間も夢中になってあふれる日本列島の中を、押し合いへし合いし、生存競争を続けなければならない。こんな世の中に生きていかななくてはならない人間にとって、がまんする心が弱くて一体どうして世の中を渡っていけるのでしょうか。

・ 近頃の私、客観的に見て伸び悩みの時期—そういう時、中学校の社会科の先生が好きでよく言っていた「にもかかわらず」(trotz dem)という言葉を思い出します。この言葉はトーマス＝マンという人が「すべて何事かを成しとげた人たちは病苦、貧困、逆境の中にあつたにもかかわらずそれらの外的条件に打ちひしがれることなく自分の意志を貫いたのである」という意味でのべたそうです。そして先生は、私達が卒業する時に「この言葉を心の中において歯を食いしばれ」と文集に書いて下さいました。

トロッツテム「にもかかわらず」… 限らない可能性を秘めたこの言葉を鏡の中のもう一人の私がこう言うのです。

《まとめ》 倫社ほど自由な科目はないはずだが、意外と個人サイドからみると、固定化している。私などもこのようなことを痛切に感じる一人である。とかく自己の指導理念をふりかざし、ひとりよがりになっている自分を恥じることが多い。いつか、生徒の意識や実態から遠ざかっているからである。“生徒をして自らの心理を語らしめる”ことをモットーとして出来るだけエッセイを書かせてみた。たえず生徒のところにふれなければという気持がマンネリ化した私に支配的である。生徒や若者の心理について近年すぐれた著作も多い。これらにも目を通しながら、しかも自分なりの視点を得たいと願っている。「青年の心理」には、よく「第二の誕生云々」という一連の古典的図式があるが、これだけでは「現代青年」を把えるには無理がある。倫社指導の基底には、つねに青年の生きたところがある。これ又等しく教育の基本的な課題でもあろう。

紙数の関係でここでは以上の趣旨から本文のみを列記することに努めた。したがってコメントは割愛せざるを得なかった。他日を期したい。

## 「ソクラテスの弁明」を授業に使用すること

成 瀬 功

ソクラテスの運命は、哲学の本質をなす主題のひとつである。この謎に  
みちた人物に出会うたびに人々の心は深く動揺させられるであろう。

J.S.ミルは「かつて史上にソクラテスが生存したという事実を、世界  
の人々はいくら思い起しても起しすぎることはない」と述べている。

「知恵ある者」と自ら称し、現実的世俗的利益に役だつ知識技能を教授す  
るといった学者（ソフィスト）達に対し、ソクラテスはそうした知識が、  
いかに偏見に拘束された人為に目隠されたものであるかを、問答を通して  
明らかにしていった。

Philosophia とは、知恵を慕い求めることである。学者（ソフィスト）  
達が、自らを「有識者ソフィスト」であると述べたのに対して、ソクラテ  
スは、自らを「愛知者（フィロソフオス）」と述べたのである。

愛知者ということは、どれだけ知識を自分は所有しているかというこ  
とが問題になるのではない。

どれだけ知っているのかという分量ではかられるよりむしろ、どんな大  
切なものを知っているのか、そもそも何が知るに値いするのか。どうい  
う知識が人間にとって大切なものであるのか、人間の「レエゾン・デートル」  
として、知識はいかにあるべきであるのか。

無秩序に多量にかきあつめられた知識の量を誇るソフィステスとは違  
うのである。

ソクラテスにとって知るということは、真実の知識、美にして善なるこ  
とがらを求めることであつた。

デルポイのアポロン神託はソクラテスを一生、愛知に奉仕させる契機と  
なつた。

「つまり誰か私より以上の知者がいるかどうかをたずねたのだ。するとこの巫女はより以上の知者は誰もいないという神託を授けた。」

ソクラテスにとってこのお告げは謎であった。「あの神様は何をいったい言おうとしておられるのか、つまりその謎はいったい何なのか。というのは私は実際自分が多かれ少かれ、決して知者ではないということをよく知っているのだから。すると、私が一番の知者であるということをおっしゃることによって何をいったい言おうとしていられるのか、というのは、嘘なぞよもやつかれることはあるまいから。それは神様に許されていないのだから。」

彼は神託の真偽をためすために、賢者と自称したり他人からもそう言われている人々の所を歴訪した。その結果「この人より私のほうが知者である。なぜならば、我々のどちらも立派で善いことは何も知っていないようだが、この人のほうが、知らないのに知っていると思っているけれど、私のほうは実際知っていないので、またその通り知っていないと思っているからである。かくて少なくともこの人よりは、ちょうどこの些細な点で、つまり、知っていないと思うという点で知者であるようだ、と。」

デルポイの神託は、ソクラテスを通じ、人々の無知の自覚を求めた。真の知識を得るためには、魔法がかつた庭園 *saubergarten* から解放されなくてはならない。

つまり知恵を得るためには臆見を打破することが求められたのである。

*saubergarten* から人々は解放されなくては真の知識に到達することは出来ない。

金銭とか名誉とか地位とか、世俗的利益が支配し、人々がそうしたものととりつかれている状態にあつては、人は案外、肝心なことを忘れて生きているとも言える。

ソクラテスは、対話によってその忘れを思い起こさせ、無知を自覚させたと言えよう。ソクラテスが求めた、大切な知識は、誤った思いなしによ

って隠されているのだと考えられ、それ故に思いなし(ドクサ)、偏見、魔術を対話によってひとつひとつはぎとっていくのである。そのことによってその中に知恵が輝き出るものなのである。ソクラテスはこうした対話術を、産婆術とも言った。

もっとも大切なことを語りうるためには、完全に自由の身になって、人は金銭の束縛と力の争いから解放されなければならない。

「諸君に対してにせよ、その他の人民大衆に対してにせよ、律気に反対して国のうちに多くの不正なことや違法なことが起こらないように妨げる人で、命を全うできる者は、世に一人もいないのである。むしろ正しいことのために本当に戦おうとする者は、わずかな間、命を全うしようとする場合でさえも、私人として暮すべきで公人として働くべきものではない。」とソクラテスは述べている。こうした自由の身を一貫することによって、人々は真理に対する良心を呼びおこし、真理をあるがままの姿において追求するようにしてやるのがソクラテスの使命であった。

因襲的な考えに安住せず、その本質を問い、真にあるべきものは何かを純粹に追求する。その故に彼は周囲に波紋を対立をよぶとしても断固として真理を追い求めることをやめなかった。そのためソクラテスは、狂信と偏見と不寛容にとりまかれることになったのである。

「ところで、今アテナイ人諸君、私が弁明するのは、私自身のためと思う人があるかもしれないが、決してそんなどころではなく、むしろ諸君自身のためである。それは諸君が、私を有罪と判決することによって神様から諸君に贈られものについて何か過ちを犯すことのないようにと思つたのである。」…「私はちょうど大きくて血統はいいが、しかしその大きさのため、ややのろまで、ある種の蛇によって目覚まされる必要のある馬のようなこの国に、神様によって文字通りくつつけられているのである。ちょうどその蛇のように一日中いたるところで、そばにくつついて座り、諸君の一人一人を目覚ます。つまり説得し、排離することを決してやめな

いような性質のものとして、私は神様からこの国にくつつけられたように思われるのである」…「しかし諸君は多分おそらく、ウトウトしていた者が目覚まされたときのように腹を立て、ビシヤリと私を叩き、アニュートスの旨うことを信じて、軽々しく私を死刑に処することだろう。そしてそれから余生を眠ってすごすことだろう。」

人間性の美しさを楽しむ、知性による説得の可能性に信頼をかけていたソクラテスは、その生涯の最後をこうした狂信と不寛容にとりまかれながら、その命を断たねばならなかった。

自己の行為の意義への反省や、未知なるものに対する畏怖や有限な人間能力への認識などを喪失してしまったアテナイ人たちはソクラテスを殺すことになってしまった。

ソクラテスの弁明は、ソクラテスの遺言であった。死罪を宣告されたソクラテスは述べている。「すなわち私の息子たちが成年に達した際には、諸君は彼らに復讐して、私が諸君を苦しめてきたのとちょうど同じことで苦しめていただきたい。つまり、もし諸君に彼らが徳のことよりも先にお金のことや、何かその他のことを心掛けているように思われるなら、また少しもそうでないのに、ひとかどの者であると彼らが思うなら私が諸君に対してしたと同様に彼らを非難して、心掛けなければならないことを心掛けず、また取るに足らぬ者であるのに、ひとかどの者であると思っている、と言っていてやっていただきたい。」と。

哲学説は教ええない。ただ哲学すること Philosophierenのみ教えうるとカントは述べているが、「ソクラテスの弁明」を通して、考えるよろこびを生徒に伝えたい。ソクラテスの肉声を通して自己を発見するようつとめようと毎年取りあげている。

# 小アンケートにみる生徒の意識

都立駒場高校 細谷 斉

## 1. 今年度の授業について

- 4月 導入、自己紹介 ○「ゲーテとの対話」の「汝自身を知れ」
- 5月 現代社会の特質 青年と人間形成
- 6月 思想の源流ギリシヤの思想 自然哲学からソクラテスへ
- 7月 ○「弁明」の読みと読書課題
- 8月 夏休み課題「夏休み中の体験記録」
- 9月 思想の源流キリスト教の思想 ○「聖書物語」
- 10月 思想の源流キリスト教、仏陀と原始仏教思想 ○「仏教第二版」
- 11月 思想の源流仏陀と原始仏教思想、中国の思想
- 12月 思想の源流中国の思想 ○「論語物語」 (以上実施)
- 1月・2月・3月 西洋近代思想(予定) ○最終読書課題

〔説明〕 以上が今年度の年間プランである。昨年までは、年間を通して「思想の源流」だけを講義していたが、古代の思想だけでなくもっと新しい思想も聞きたいという生徒の声や、共通一次テストの実施も考慮し、西洋の近代思想をとりあげることにした。「現代の思想」と「日本の思想」はとりあげられないが、限られた不足気味の時間の中で「浅く広く」「あれもこれも」みるよりも、「あれかこれか」で行くよりないと思っている。○印は読書指導をとり入れる所で、上記の書物を全員に購入させた。授業の方法は私の講義式でやっている。特に申し上げることは何もない私の授業だが、多少の工夫はしているつもりであり、以下申し述べたい。

## 2. 小作文とショート・アンケートの実施

講義式の授業を行っていると言ったが、講義だけでは、やはり生徒は物足りなくなり、退くにつに陥り易い。毎時間わかり易く面白い話で生徒を引

きつけることが出来ればよいが、それはなかなかむつかしい。そのような状況の中で、私は生徒が自らを多少なりともふり返って考える一つの手だてとして、「小作文」を書かせる機会を多くし、その中に授業の話題や問題点などを見い出すように心がけている。小作文を書かせるには、テーマと授業の流れの中のタイミングが重要だが、授業の導入として、授業途中での考える材料として、そして一つのテーマが終了するに際してのまとめとして用いることができる。今年度はこれまでに次のような具合で書かせた。

4月当初「わたし」について、生徒の自己紹介の代わりとした。

6月 人生観、世界観の学習に入るに際し、人生観、世界観の意味を説明した後で、「人は何で生きるか」「我は何を為すべきか」というテーマで各自の思いを書いてもらった。9月当初 夏休み中の体験を点検・反省させる意味をこめて、「夏休み中の体験より人間関係について」と題して書かせた。11月下旬、この頃になると本校では三年次の選択科目の希望調査を実施する。二年生が自分の将来や進路について初めて真剣に考える時である。そこで「将来の進路や希望について」といったテーマで作文を書かせてみると、普段の授業では必ずしも熱心でない者も実によく書いてくれる。中には、進路の相談を訴える者もある。私は毎年思うのであるが、二年生の二学期、生徒に進学や進路について、豊富な資料や経験を与えることが必要なのではないかと。情報過多の時代とは言いながら、生徒の大多数の者は、自分の将来や進路についての正確な知識や情報に乏しい。受験雑誌などのマスコミのコマーシャリズムに毒されていない真実の知をもっと与えなければならぬと痛感するのである。これらの作文は一時間の授業時間の大部分を使用して書いてもらうもので、次の時間にはその内容の紹介や私の感想・意見などを言うことにしている。作文とは別に、授業の時間の中で生徒の知識や意識を問う方法として、小アンケートを試みている。授業に対する生徒の問題意識や興味関心を高めることがねらい



だが、授業の遊びとしても役に立つことがある。質問項目は一つか二つにしぼり、書かせたらすぐに回収して板書しながら結果を見て行き、その結果についてまた発問したり意見を言わせる。次に紹介するのは、あるクラスでとったものである。

### 3. ショート・アンケートにみる生徒の意識

(1) 「入学したい大学、つきたい職業を一つづつ記せ」(5月13日)  
現代の大衆社会的状況についての講義をしたところで、生徒が将来についてどのように考えているのか、漠然とした質問だが、話のタネに問うてみた。二年生の一学期の初めであるから進学先まして職業などは夢又は思いつき程度以上のものではないだろう。だが、東京の所謂山の手地区にあり、典型的なサラリーマン家庭の子弟が多い本校の傾向が出ているように思う。「入学したい大学」 千葉大、一橋大、学芸大、東北大2、都立大、筑波大、東大10、外語大4、東工大2、京大、埼玉大、日大芸術、明治薬科、駒沢、上智、東京農大、早大4、I O U、慶大、桐朋、東京女大、国立系2、行きたくない、DK4(計45名 男23 女22 数字のないのは1人を表す。以下の項目についても同じ) 「つきたい職業」 数学者、英語関係の仕事、外務公務員、音楽関係、出版報道2、農業2、フリー、女優芸能人2、建築家、学者5、教師(中学校)3、マンガ家、スチワード、コンダクター、医者、プロデューサー2、婦人警官、薬師、獣医、作家、貿易関係、会社員2、弁護士、母親、お嫁さん、何にもなりたくない、DK6 [説明] 大学についてはとにかく希望を書いているといえる(本校の入試結果と合わないわけである)し、職業についてはなおさらだが、ほとんどの者が第三次産業を希望していることがわかる。

(2) 「現代社会を最もよく表現あるいは象徴しているもの又はことを一つあげよ」(5月18日) 現代社会の授業を終えるに当たり、現代社会のイメージを問うてみた。「公害5、ワンパターン5、学歴3、マスコミ3、大学生2、受験2、テレビ2、コンピューター2、シラケ2、全自動洗濯

機2、ラッシュ2、政界汚職、高層ビル、NHK（イメージ的に）、成田空港、無関心、マンネリ、カップ・ラーメン、複合汚染、教育ママ、満員電車、サンシャイン、スーパーカー〔説明〕なかなか多様な答が出てきた。このような質問自体は暇つぶし以外の何ものでないかもしれぬが、現代社会のイメージを生徒は適切にとらえていた。全自動洗濯機、NHK、カップラーメンなど出来た答ではないかと思う。ワンパターンという言葉は私には耳慣れぬものであったが、決まりきった生活の調子を言うものらしく、生徒は皆よく知っていた。マンネリの新語みたいなものようである。

(3) 「あなたがこれまでに読んだ本の中から感動や感銘を受けたものを一さつあげ、その理由も書いてください—子供の時から今日まで読んだすべての本の中から選んで下さい」（6月1日） 第一学期の「弁明」の読書課題を出題するに際し、生徒の読書体験の一端をきこうとしたものである。「アンネの日記2、カモメのジョナさん2、風と共に去りぬ2、十五少年漂流記、万延元年のフットボール、天才バカボン、あり子の記、人魚姫、絶唱、走れメロス、白ばんば、知恵子抄、星の王子様、指輪物語、枕草子、潮騒、わがままな大男、四月の海賊たち、思い出の記、落日燃ゆ、坊ちゃん、ライ麦畑でつかまえて、青春の蹠踏、ヘッセのメルヘン、塩狩峠、チーちゃんごめんね、ちびくろサンボ、ルーツ、チボ一家の人々、秘密の花園、破戒、赤頭巾ちゃん、アイヒマンの告日、大草原の小さな家、くまのプーさん、こころ、老人と海、宮本武蔵、車輪の下、ほらふき男爵、斜陽、キューリー夫人伝、二七四の瞳」〔説明〕幼年期に読んだと思われる名作童話から高校入学後国語の宿題で読まれたと思われる古典や近代文学の名作まで、多様な作品があがっているが、哲学書や宗教関係の書物は皆無といってよい。全体に少年時代の読書らしさが顕著である。今や、生徒達に新しい読書の世界が開かれようとしているのである。それが倫社による読書案内と課題であるといえると思う。この意味において、倫社における読書指導はきわめて重要な意味を持っている。私が勤める一冊

の本によって新しい人生観に目ざめる生徒もいるかもしれないのである。  
読書指導こそ倫社の生命線である。

(4) 「江川選手の態度や江川問題についてどう考えるか端的に記せ」

(11月30日) マスコミを賑わせている江川問題について聞いてみた。連日のマスコミの異常ともいえる報道に対し、どのような反応を示すのかも合わせて期待した。授業では丁度中国の思想で、社会と個人の関係や性善一性悪の問題、仁・礼の徳などについてとりあげており、個人倫理と社会倫理を比較検討する材料ともなろうと考えた。〔集約した数で示す江川選手の態度を認める者—6、江川選手の態度を非とするもの—20、巨人軍が悪いとする者—3、日本社会の特質とするもの—5、ドラフト制に問題ありとする者—4、運が悪いとするもの—1、自分は関係がないとするもの—3、両方5分5分とする者—1、わからない—1〕という結果であった。ごく常識的で冷静な結果ではないかと思う。江川選手の態度を非とする表の理由は、わがままというのが大部分であり、わがままは許せない、という青年らしい反発心が働いたのかもしれない。逆に、江川選手を認めるとする理由は、かわいそうだからというものが多く、どちらにしても、日本社会の「甘えの構造」がこの問題の根底にあるように思われる。

4. 終りに

以上、授業のエピソードにもならぬ貧しい記事を書いて申し訳けないが、私は一方では倫理思想史の流れをガッチリ教えたいという気持と、もう一方では、生徒の興味関心に結びついた教材や授業を如何に構成するかという二つの気持にいつも悩まされているのである。別言すれば、理論知と実践知の二つをいかに授業の中で総合すべきなのか考えているのであり、本文はその迷いの一端である。

## 第2分科会 「生徒の意識の研究」

### 研究経過報告

6月16日(金) 攻玉社高校で開かれた都倫研第一回例会の後、顔合わせがあり、世話人として、墨田川高校の渋谷先生と私が選出された。具体的にどんな方向で研究を進めていくかまでは、話は及ばなかった。

10月27日(金) 第2回の例会が墨田川高校でもたれた。出席は、大森高校の寺島先生、江北高校の宮崎先生、墨田川高校の渋谷先生、そして私の4名。私がレポートしたが、なにぶん、教職一年目のため、実のないレポートとなり、貴重な時間を新米教師の指導上の悩みにさくことになり、恐縮してしまった。概略ながら、レポートした内容は次の通りです。

- 1 5月に「高校生の恋愛」について扱った際のこと。「青年期の恋愛はプラトニックラブといわれ、精神的色彩が濃厚であり、純粋でかつ一方的である」(第一学習社 P44)という教科書の指摘と生徒の現実との間にギャップを感じ、生徒の欲望をいたずらに肥大化させる刺激的、煽情的な性情報の氾濫 — 性の商品化 — その中でひきさかれてしまった青年の精神と肉体というところから切りこもうとした。資料として、千葉県のある県立高校で調査した「高校生の性意識」という新聞の切り抜きを使った。  
(結果)資料を眺みあわせていくうちに、生徒は、「ビュー」とか、「ビュー、ビュー」といった奇声を発し、「これはウソだ」「実態はもっと進んでいるはずだ」という意見も出て、生徒の気持ちは上ついたものになり、結局、興味本位の、のぞき見趣味的な授業に終始してしまった。

2. 同じ5月に次の様なことがおこった。発端は、授業中あまりうるさかったため、私が大声を出して注意したことだった。ある生徒が、「倫社は結局、一般論のおしつけだ」と発言したことから、「そうだ、そうだ」ということになり、授業が紛碎してしまった。その生徒の言い分をまとめると次の5点となった。

①倫社ではよく“君達はどう思うか”と聞くが、結局、最後には一般論で片づけてしまうのではないか。

②“君達はどう思うか”ということが大切なら、全員に聞くべきだ。

③“君達はどう思うか”と聞かれても答えようがない。自分には自分なりのしっかりした考えがあり、人の意見を聞いたところで変わるものでもない。

④“君達はどう思うか”ということが大切なら、どのように評価するのか。評価できないではないか。

⑤“君達はどう思うか”と言いながら、結局は教師というのは我々に教えるという立場にあるではないか。

#### 1、2のことから —

教材の選び方や、話の進め方等、こちら側で反省すべき点は多々あるが、1と2の経験を通して以下の様なことを感じた。

すなわち、自己を客観化する、対象化するということが実に弱いのではないか。一般論に対して反感をもつことも、彼らをとりにくく現実をリアルに描き、精神と肉体というものを結びつけて考えさせようとしたところ、奇声を発して興味本位なものに流れてしまったことは、実は同じ意識の構造から出ているのではないか。

自己を一般論という鏡に写してみることで、自分たちをとりまく

現実と自己の関係をとらえる、そして、そういう緊張関係の中に自己をおくこと、がとても弱いということだろう。それが、生活面で感覚的で怠惰な振るまい、ものごとのうけとめ方という形で現われているのではないか。

およそ、以上のようなレポートであった。このレポートに対して、参加された先生方から様々な意見が出された。仮りに、生徒が自己を客観化することがヘタであり、一般論を極度に嫌うとしても、それに対して、あくまでも理性的に迫っていくということだけでは不十分ではないか。たとえば青年期の恋愛についてのレポートにあるような私の切りこみ方自体、私自身が一般論に流されているのではないか、客観的資料だけ与えればよいわけではなく、プラス教師の体験談、すなわち教師の全人格的なものをぶつける必要があるのではないか、また、一般論を嫌う生徒に対して理性でおしまくるだけでなく、感性に訴えることも必要なのではないか、生徒の感性に深く訴えた時にこそ、生徒の意識の構造が内部から変わってくるのではないか、等々の非常に示唆に富んだ意見が出された。

第3回の例会は、墨田川高校で1月12日(金)にもたれた。出席は十文字高校の岡田先生、共立女子高校の館入先生、墨田川高校の渋谷先生、そして私の4名。この日はレポーターが決まっていなかった。しかし、館入先生の学校でとられたアンケートなどを参考にしながら、フリートークの形で話し合いを進めた。第二回例会との関連で言えば、現在の高校生の意識状況というものが、どのような社会状況の中でつくり出されているのかという論点で話は進められた。一方に、非行、低学力といった問題、また一方に、ごく目立たない生徒による家庭内暴力、自殺など、このような問題は、ごく限られた一部の生徒の問題ではなく、高校生全般の問題となっている。その一つの原因として、共稼ぎの増加などによる家庭の教育力の低下、社会自体の教育力の低下ということに話が及んだ。

以上、第2分科会は3回（実質的には2回）の例会をもっただけで終わってしまった。内容も、「生徒の意識」そのものまでは、なかなかはいりきれず、次第に理解しにくくなりつつある生徒の意識構造に対して、倫社という科目でどう生徒の内面に切りこんでいくのかというところに、話し合いの重点がおかれた。結果論ではあるが、理解しにくくなっている生徒であればこそ、倫社という科目の必要性、生徒の意識構造の研究の必要性を痛切に感じた次第です。

今年は世話人が不慣れであること、そしてまた、世話人間の連絡が密でなかったことなどのために、諸先生各位に御迷惑をお掛けし、十分な研究活動が出来なかったことをお詫び申し上げる次第です。

（記録 荒川工・及川良一）

# 現代女子高校生気質

十文字高校 岡田春生

近頃授業に困難を感じはじめた。私の勤めている私立女子高校の学力偏差値の中程度の生徒は、むずかしい漢字が読めなかったり、それ以上に概念の理解が困難で、考えるということよりも、まず理解させることに困難を感じているが、それ以上に私を不愉快にさせるのは、倫社そのものに対する精神的体質からくる反発であり、常識では考えられぬ利己的な発想による自己主張や誤った相対主義による反発、集団的攻撃などである。簡単に言えば、こんな面白くない学科は、やめちゃえ、やめちゃえ、ワッショイ、ワッショイという態度なのである。堅実な校風を誇る女子高校がと思われるかも知れぬが、やはり公立中学校からくる一般的な生徒から成り、そして学校の体質も今は変って、指導力、教化力は大幅衰えている。しかしそれ以上に現代の退廃的風潮、マスコミの影響力などが、学校の教育力というものを遙かに上まわり、社会の享乐的施設の引力の方が、学校のきまりよりも強力であると言ってよいだろう。

これは何も私のいる学校だけの傾向ではあるまい。近頃新聞で見た昨年12月末の警視庁の発表によると、少年非行は戦後最悪で特に女子の犯罪家出がふえたとある。私は上記のことを昨年7月の奈良での全国大会の分科会で出してみた。というのは、商業高校、工業高校、農業高校などはもっとひどいと思ったからである。このような学校の先生たちは一体どうして日々を過しているのであろうか。いろいろな同感する意見が出て最後に地方の工業高校の若い先生が決然と立って言った。

「そもそも教師が自分の言うことが生徒に伝わると考えることはとんでもない誤りであり自惚れも甚しい。教師はただよい人柄で以て生徒に接するべきである。生徒は授業はわからなくても、後に先生の人柄を懐しく思



い出すであろう」

私は今迄夢にも考え及ばなかったこの異質の発想に茫然とした。教師の言うことが生徒に伝わらなかつたら、教育は成立しないではないか。またそれが教師の生甲斐ではないか。しかしまたすぐ思い直した。もし教師という職業に2の意味があるとしたら、1は教育すること、1は月給を得ることと思うが、この先生は前者をあきらめて後者をとっているのであろう。又、こうも考えなければ全国の職業高校の先生はつとまらないであろう。しかしそれでいいのか。こんな疑問から現代の生徒、特に私のいる女子高校の生徒の傾向を分析してみた。

### 現代の風潮 反真面目主義

1977年8月に福岡ユネスコ協会が福岡市で開催した第4回九州国際文化会議は内外の一流の学者・評論家達を集めて行なわれたが、その分科会「戦後の価値観と大衆文化」というテーマの下での哲学者市井三郎の発言が私の興味を引いた。彼は戦後日本の価値観の変化を2の特徴で定義した。1はつねにエゴイズムと結びついたヒドニズム (hedonism - 享楽主義) といってもいいくらいの功利主義、今ひとつは反真面目主義 (anti - seriousness) の顕著化というのである。(戦後の日本、講談社新書)

たしかにこの傾向はあるようである。後者の反真面目主義に到っては、倫社の中味が元来真面目人間の産物であるので、生徒の精神的体質からはげしい反発を喰うことがあった。カントの人格主義の購讎をして、内なる良心の声に自律的に従うからこそ人格の尊厳があるので、先生に叱られるからきまりを守る、看視されているからカンニングをしないというのは、丁度、猫が食卓の魚を人間が見ているから、さらわないのと同じで、そのような人格は尊とくないことになると言った所、1人がわめいて「どうせ私たちは犬か猫と同じですよ」とわめきつづけて授業を妨害されたことが

あった。何も特定の生徒を指して言ったことでなかったのに驚ろかされたのである。

またある最低の生徒があった。授業が始まると先ず大あくびをする。それもかくしてやるのでなく、思い切り口を開いてやる。毎時間なのでとうとう腹が立って「どうしてそんなにアンコウのように口を開けてあくびをするのか」と言ったら「私はただあくびをするだけ。先生が勝手にそう思うのです」「なるほど」と引き下ったが、毎時間、教科書もノートも開かずいくら注意しても同じなので、とうとうある日「朽木彫るべからず」との論語の句をあげて説教した。その次の時間はノートを開いてせつせつと書いているので、私の説教の効果があつた、ほめてやらなければ、と近付いて覗きこむと、私のマンガが描いてあつた。電線に3羽の雀がとまっているその真中に「オカダスズメ」とあつて「えー 倫理社会とは……」と喋っている傍にお日様がニコニコして「バカが何か言っているよ」とあつた。これには参つた。孔子が盗跖(とうせき)を説いた寓話(荘子)にあるように、私は病気の自覚のない者に薬の押し売りをしたのである。それ以来、私は彼女に注意をしなかったが、彼女は追及の手を許めず、テストの中で、カントとかヘーゲルとか人名を入れる欄に「オカダスズメ」とあつた。それから半年ほどして、私はやつとテレビの痴呆番組に「電線スズメ」というのがあることを知つた。それ以来、生徒理解のため、がまんしてその番組を見ているが、近頃の「ナンチャッテ」という言葉はまさにこの風潮をよく現わしているようである。

### 享楽主義的功利主義

前記市井の挙げたもう1の特徴、享楽主義的な面は言わなくてもわかつていただけたらと思う。私は生活指導に関係しているが、どこでも同じだと思ふが、発見、指導、処分はいつも後手にまわり、汚染のスピードはそれを上まわり、とても追いつけぬ感じである。

しかも享楽主義は生徒の心情に深く浸透しているようである。たとえば下敷きと称する定期券の大型のようなものに、写真を入れて、授業中も上げしげと見ているので、取り上げた所、クラス全体の総スカンを喰ったことがあった。それは野卑な若い男の裸体の写真で、余り上品でない人気歌手らしかつた。またある時その人気歌手のことを「あれらは人間の屑だ」と言ったところ、総攻撃をうけた。又、時間中紙片を廻しているのを取上げると「スシヤのあんちゃんの〇〇さん、すてきよ。あの頭云々」とマンガ入りであった。あとでその生徒を呼んで説教すると、涙をこぼしつつ「誰が好きになろうと、私の勝手です」と答えて一歩も引かなかつた。他のクラスでこの話をした所、リーダーの一人が立上って喰ってかかつた。「誰が好きになろうと勝手じゃありませんか。学校の先生でなければいけないのですか。へっ！」彼女の目は爛々と輝き、顔は真背で歯を喰いしばっていた。私はここに触れてはならぬ聖域を侵犯したことを感じた。毎年の文化祭に必ず潜り込んでくる猿のような野卑な男生徒たち、校長はそれを「一見して生理的嫌悪を催さざるを得ない若者たち」といみじくも形容したが、それが彼女たちの神聖な対象なのである。私はそれを「ドブの聖域」と呼んで、ふだん触れないようにつとめた。市井の言う利己主義に結びついた享楽主義といつてもいいくらいの功利主義という特徴はたしかに強く浸透しているようである。

程度の低さと利己的自己主張など

以上の特徴の他に、知能程度をふくめた全般的なレベルの低さ（これは私のいる学校の特徴だが、と言つても最低ではない）と誤つた相対主義と巧みな利己的自己主張、それを押し通す集団的攻勢などがある。

ある時、校長から呼ばれて、授業中に生徒にエロ写真を見せたことがあつた。どう考えても覚えがなかつたがやがてハタと思ひ當つたことがあつた。ユダヤ教の説明の時、ミケランジェロのダビテ像を見せた

ことがあった。前年度の教科書にはのっていたが、あらたに採用した。

教科書には、のっていないので、わざわざ図書館から美術全集を借りてきて見せたのである。裸の青年像で丸出しであるから、これをエロ写真ととったのであろう。校長は生徒や父母のあちこちからそういう声があったと言ったが、自分のレベルの低さからこれをエロ写真と見るのであろう。そうならばミロのヴィーナスもエロ写真ということになるのであろう。それを聞いて、生徒、父母のレベルの低さ、そして校長の見識のなさに呆れてものが言えなかった。聖書に「豚に真珠を与えるな。豚はよろこばず足でふみつけ、噛みつくであろう」とあるが当にそれである。やはりレベルの低い対象にはレベルの高い授業はできないということをつくづく思い知ったのであった。

なお巧妙な利己的自己主張については、ある時、授業中、机上手腕を置いて眺めているので取り上げた所、職員室へ友人と共に来て、返せという。「学校には廊下にも教室にも鏡があるではないか。それなら机の上にも鏡を置いてどこがわるい」と噛みつかれた。これにも呆れたが面白い言い分だと思って、ゼノンの「アキレスと亀」の論理と合せて授業中に引用させて貰ったが、開いた口がふさがらないような自分勝手な論理が多い。

なお誤った相対主義については、教師を対等と見て、自分たちの主張でクビにできると思っているらしく、ある生徒をなくった所そう言われた。「先生だって人間でしょう」と言う生徒がいて、彼女の接しているいやらしい大人とこちらを同じと思ひこんでいるらしく、注意してもしれしれと笑って聞こうとしない。「授業中おしゃべりはやめろ」と言うと「先生だってしゃべっているじゃないの」と言われて、開いた口がふさがらなかった。その子の潔わす淫靡な空気がいやで、思い切りなくったら椅子からころげ落ちた。暴力教師ということで、話し合いということになり、吊し上げられたことがあった。はじめの中は勝手な言い分を黙ってきいていたが、とうとう爆発してしまった。

あとで何であんなに腹が立ったのかと反省したが、よく考えてみるとそれは生徒に対する腹立ちでなくて、今迄良い学校と思って多少なりとも心底で誇りに思っていた学校のイメージが粉々に吹き飛んでしまったことに対する腹立ちと、自分の今迄の努力が無駄であったと判ったことに対する腹立ちだった。

最早、教えられる限度であると思って、辞めようと思った。(私は2度目のつとめで、生活には困らないのみか、残り少い人生を無駄なことに過したくはなかった)その時、生徒の出した宿題に(問題の生徒たちばかりだったが)どう間違ったのか法華經壽量品の自我偈の写しがあった。これは仏陀が涅槃に入らず、あくまで現世に踏みとどまって、衆生を済度するために説法をくり返しているという趣旨で大乗仏教の真髓を説いたと言われている。これを見て仏陀からきびしく叱られた気がして、自分一人を潔くしようとしたことを深く恥じて思い止まったが、退廃はひどくなるばかりである。その後授業中変な弥次をとばした生徒をぶんなぐったことにより校長の要望で退職することになった。やっと解放されたが思い出は苦い。

“畢竟は自己満足に過ぎざりし三年の授業苦く噛みしむ”

# 青少年の自殺と増加と倫社

都立墨田川高等学校 渋谷紀雄

## 1. はじめに

青少年の自殺がマスコミを賑わし始めてからすでに久しい。自殺が時々集中的に起こると精神衛生学等の学者のアドバイスが載つたりするが、それは泥縄式の対策に留まらざるを得ない。そのような対応では解決できない根の深い病根が現代社会にはできており、それは日常的な地道な対策、すなわち、文化的教育的面からの考察と努力によってしか取り扱われないのではないか。私の学校でも一昨年の一学期末に二年生の女子が自殺した。彼女は演劇部の部長で文芸部にも属し詩を書いていた繊細で活動的な生徒であり、倫社という科目にはとても関心があるとも言っていただけに、そのような生徒に死なれてしまったことは極めて残念で悔まれた。彼女のような生徒に倫社の授業は何ら力を持たなかったのではないのか？自分の授業を遅ればせながら再検討せざるを得なかった。その結果、形式上の変更としては、全員にスピーチをさせるということに留まっているにすぎないが、内容面でもわずかずつでも、改良してきたつもりである。その過程で感じているのは、自殺する者は割合からすればまだまだ少ないが、自殺に至らないまでも精神的に歪められている生徒の割合は自殺者の増加に比例して増大しつつあり、そのことを倫社の授業でももっと深刻に考えて対応しなければならないだろうということである。その辺を生徒の文章などを材料に考えてみたいと思う。

## 2. 「倫社」と死の問題

生徒の自殺に際してまず考えたのは、その年のそれまでの倫社の授業のことである。この年は夏休み前に「思想の源流」のギリシヤ思想だけを終った状態だった。まず悔まれたのは、その前の青年期の問題をその年は他

較的簡単にすましてしまったことだった。どの教科書にしてもこの部分については青年期における苦悩の必然と、将来の展望を持ち準備をすることによる苦悩の克服の大切さをいささか説教的に述べており、私の授業では「孤独と友情」といったテーマにやや時間をかける程度で少しお座なりにすましていた。もっと、学歴社会の中で競争を強いられた今の生徒の生の声をひき出し、各人の悩みの普遍性を自覚させ、その原因を考えさせる必要があった。そのためこの問題を積極的に論じさせる場をできるだけ作っていくことに以後心がけることにした。

次に思想の分野について考えてみる。ソクラテスは周知のごとく、人間吟味を彼の使命と考えて、裁判で信念を曲げることなく妥協よりはむしろ死を選んで、「単に生き伸びることは意味がなく、よく生きることが大切」とした。プラトンは、現象界をイデア界からの逸脱とし、現実よりも理想を追求した。二人共、自己の信念や理想の大切さを教えるが、生命の大切さは教えない。また宗教を考えてみると、キリスト教ではもちろん、自殺は否定するが、イエスの思想には「こころの貧しい人達は幸いである。天国は彼らのものである」という言葉がある。仏教にしても「諸行無常、諸法無我」という思想は、現実世界の空しさを生徒に印象づけ、ニヒリスティックな考え方を助長しないとも限らない。このようにみても、倫社の教材には一部の生徒を「死の美化」へ誘いかねないような内容のものが意外に多いのである。そして逆に言えば、生命の尊さを教えるような教材は以外に少ないように思われた。このことは、青少年の自殺の増加という現実を前に、倫社での前向きに対応を考えたい場合考慮してみる必要があるように思う。

### 3. 生徒の意識の中の現代社会

一方、生徒の読書感想文の中から拾ってみると、今の生徒の現代社会についてのイメージは、「冷たい」「シラケタ」「偽善的な」「かったるい」「学歴偏重」というような社会として捉えられている。同じ群の他校に入

った中学時代の先輩の自殺に際して書いた文の中で、ある二年の女子は、その自殺の原因を「受験した大学へ行きたくなかったのでは？」と考え、自分についても「高校生になり私は最初から劣等感のかたまりだった。そこではじめて気付いたのです。中学の時不良と呼ばれた人達の気持ち。勉強ができて不良になる人がいるでしょうか」と書き、さらに「凡人でないようにみせたいために、本当の心と反対の行為をするつらさ」を訴えている。自殺の原因の推測はともあれ、生徒が成績による序列化の中で想像以上に焦りや劣等感を抱いていることは確かのように見える。それと共に指摘せねばならないのは最近の生徒の精神的なもろさと社会への不安である。

「青春とは自殺というものと大の仲良しで、すぐに自殺への一本道を教えてくれるのではないか。青春の顔は表では明るく陽気な天使のようで、裏では不安な心を容赦なく鋭いきばで引裂く悪魔のように遠くない」

これはヘッセの『青春時代』を読んだ女性徒の感想文の一部であるが、ここには現代青年の不安な社会観がのぞかれると思う。彼女の文にはさらに、自殺する人の気持ちが分ったような気がした日の日記を引用している。「私なんかいらないんじゃないか。目がじんじんしてもう情けなくて涙がぼろぼろ流れた。恥かしくも学校で。すずめが自由でうらやましい」そしてこの感情から脱け出せたのは、回りの人が皆、陰から自分を支えてくれると分ったことによると、彼女は書いている。別の女生徒の高野悦子『二十才の原点』の感想文の中にも同じような例がみられるが、これには、さらに社会への不信も表現されている。「自分を愛してくれる人がいることがどんなに心の支えになることか。それなのにどうして人は冷たい世界を作ってしまうのか」「大人達は現実をみきわめる力をもつことを大切だという。しかし知って価値ある社会なのか」この文からは生徒の心の不安と現代社会への不信は相関関係にあることが伺われると思う。今の高校生にとっては社会に「どう適応するか」「どう生きるか」よりもまず、「なぜ生きねばならないのか」「生きる価値ある社会か」という次元での問いか



けに対する答えがまず切実に望まれているのではないかと思う。

#### 4. 倫社の「偉大」と「悲惨」

倫社で学ぶことは現実に通用しないのではないかと生徒の多くに考えられがちである。先哲の考え方は生徒にとって「偉大すぎる」という感想がよく聞かれる。しかし、「偉大さ」とは何だろうか。パスカルは『パンセ』で「人間の偉大は、人間が自己の悲惨なことを知っている点において偉大である」と書いている。先哲も、教師も、生徒も、皆、悲惨なのである。その悲惨を生みの形でさらけ出しぶつけ合うことによってこそ、思想の偉大さも認識できるのではないか。そして、生徒の不安や悩み、現代社会への不信にも答えられるのではないかと思う。

ある男子は『二十才の原点』についての感想文で下村湖人の「美しいものにあこがれるのはいい。しかしわれわれの人生は太陽に背を向けてはかない虹の美しさに見とれるようなものであってはいけない」（『青年の思索のために』）という言葉を用い、次のように書いている。——「まず生きることが先である。生きていて何をするか？まず体を動かすのだ。掃除、洗たく、身の回りのことから始めよう。それらは最も初歩的なことであり、基本的なことであるが、同時に最も重要なことだから」この生徒の「太陽」は一寸物足りない感じもするが、このような極めて基本的な日常の「生活」行動というものが、現代の高校生、塾やテレビの世代には欠けていることも事実で、その意味ではこの生徒の指摘は意義があると言えるだろう。それにしても最近の高校生にとって倫社もまた、「はかない虹の美しさ」にすぎないのだろうか。それは生徒のスピーチに先哲の思想など殆ど出てこないことからも感じられる。しかし、そのような現実、いわば「倫社の悲惨」を認識した上で、あえて、生徒になお訴える時に倫社は「偉大」であり、また「太陽」たり得るのではないかと思う。そのためには生徒と教師の共通基盤の維持と拡大の努力が、欠かせず、それが今程重要な時代はかつてなかったのではないだろうか。

## 高校生の意識について……その消極的

### ・否定的側面と指導について

東京都立大森高等学校 寺島 甲祐

〔ねらい〕 学歴社会の支配する日本の教育において、教育を支配する原理が人間形成の原理よりも競争中心主義・選別中心主義の原理になり勝ちなことは否定し得ざる現実である。そこに発生する矛盾や人格的荒廃の現象は、青少年全体に色濃く投影され、1970年前後の学園紛争を経過した今日においても、尚高校教育において噴出していると言えるとも考えられる。落ちこぼれ、怠学、非行、ノイローゼ、暴走族といった顕著な現象のみでなく、いわゆる「三無主義」とか「しらける」と言われるやる気をなくした高校生の「消極的」「否定的」な意識傾向は学校生活の各分野において浸透し、今なお深刻さを増して長い「冬の時代」を迎えているかのようである。このような傾向を改めて認識し、かかる現象を克服する方途を少しでも模索することは自我の確立をきし、人生観・世界観の形成を培養して行く倫・社担当教師の責務の一端であるとも考えるのである。

#### 〔展開〕

1975年11月実施された総理府青少年対策  
高校生の悩みと不満  
本部による調査によると、高校生の悩みの中で  
群を抜いて大きいのが「勉強や進学のこと」(男58.8%、女56.0%)  
であり、ついで大きいのが「就職」(男19%、女17.0%)「友人・  
仲間」(男12.4%、女20.3%)、「性格」(男15.2%、女17.3%)  
「異性(男15.0%、女12.5%)のことといったものになっている。それゆえ、高校生の「学校生活への希望」に於いてトップを占めるものが悩みの大きい「勉強や進学のこと」に対応する「授業のし方や授業科目のこと」(48.4%)と「先生のこと」(34.9%)になっているのは理の当然であると言えるのである。従って、自分の学力についての満足感は極めて低く、1973年5月に実施された東京学芸大学社会学研究室調査によ

れば、満足感を持っている高校生は僅かに4.1%であり、75.9%の者が不満足であると答えているのである。巷間、高校は三割教育であるとか新幹線教育であると言われて久しいが、このような現象を単に生徒の能力不足のみ責任を転嫁して考えてはならない。生徒の学習意欲の低下やつまづきについては、いろいろな要因があると考えられるが、われわれ教師にとっては、いやしくもその要因を生徒の能力不足や学習の未熟さに求めてはならないものであって、むしろわれわれ教師の指導の未熟さや指導内容の不適切さに、その要因を求めなければならないのである。というは、如何に出来ない能力のない生徒でも、心の底では自分は出来るようになりたい、しっかり頑張らなければならない、負けたくないといった強い欲求が働いている筈である。われわれはこのような生徒の気持を大切に、その欲求を実現できるように指導しなければならぬと考えるものである。

#### 高校生の友情と自己形成

それでは、学習や進路についてこのように深い悩みを持つ高校生は、その悩みを如何ように解消しているのであろうか。前出の東学大の調査によれば、生徒の悩みの相談相手は圧倒的に友人(68.1%)が多くつづいて母親の43.5%となっており、教師は僅かに9.4%である。このことは、高校生が学校や教師に悩みの解決の援助を求めていないとも言えるが、しかし高校生が学校や教師に期待していない事を意味するものではない。先に述べた「学校への希望」の内容をみて見てもむしろ期待感は強いのである。しかし、われわれは生徒の作文等に現われる「高校の先生には親しみがもてない。先生というものとは何かかけ離れている。サラリーマンのように思えてならない」といった批評が高校生に平均的に存在することを謙虚に反省しなければならない。いくら甘えのパーソナリティがそこに存在するとはいえ、われわれとしては、自己形成を行なう重要な時期にある高校生が、何か成績中心主義に生徒を見勝ちな教師の人格に対して、ひと知れず不満と嫌悪を感じていることを反省しなければならないとも思われる。

さて、日本の青年の友情への期待感は特に強いようである。72年度の「世界青年意識調査」によれば、「友達つき合いは深入りしない方がよい」との質問に対して、日本の青年は68.8%が「深入りした方がよい」と答えて居り、他の諸国の30%以下と比較して特に高い。従って、その反対に「深入りしない方がよい」という回答が全く逆になり30.4%と世界最低である事は当然である。(最高はフランスの82.1%)このように日本の青年の友情への志向は特に強く、心をうちあけて話せる友人を本当に求めていると言っても過言ではない。しかし、「心をうちあけて話せる友人がいない」と答える青年が約四分の一にも達して、これまた世界最高なのである。総理府調査によれば、高校生は大学生よりもこの割合が高くなっているようである。更に、悩みの解決方法も文部省の調査(1973年)によれば「自分で解決する」と答えた者が半数以上に及んでいる。つまり、現代の高校生は悩みの相談相手の筆頭である友人とも深い交流をもてず、次に身近な親や教師にも信頼を寄せ切れない全く孤立した状態にあるとも考えられるのである。加うるに、マスコミの提供するフォーク、ロック、ニューミュージックなどの深夜放送や漫画・イラスト、ミニコミ、Gパン、Tシャツ、長髪などによって象徴される若者文化は、自立を前提とする大人の社会や文化と対立し、青年を大人より断絶せしめ、青年の自己形成にとって何より大切な行動力やバイタリティの発露を阻ばみ拒否する情緒を生み出す傾向ともなっている。又、マスコミの過保護媒体はその受け取り手の高校生に対して過保護となり、何でもくれる母親以上の甘えの媒体ともなって、底の浅い情緒的な連帯感や短絡的な思考を生み出し蔓延させる結果ともなっているのである。

以上のような高校生の内的・外的な意識傾向を端的  
 高校生の三無主義  
 に表現したものが、いわゆる「三無主義」とか「しらけ」と言われるものである。無気力・無関心・無責任あるいは無感動といった高校生の消極的・否定的意識状況を端的に表現したこの用語は用い

られて久しく且つ広汎である。1960年の安保斗争以後、今日の進学率93%を超える量的拡大の実現の状況下に於いても尚三無主義は深刻化し、その対症療法的な諸学問の研究にもかかわらず一向にその火を消すことは出来ないのである。昨今、小中高校生の自殺や殺人が盛んに報道された社会問題化しているが、これらが子供と子供を取りまく環境との相互媒介作用に基づくことは余りにも明らかである。しかし、考えて見るに日夜悩み苦しむ青年期、これは誰しも通過しなければならぬ一過程であり、しかもこのような過程を経て青年の自己形成は達成されるものであろうが、われわれはこのような青年期の疾風怒濤期を誤りなく指導する事が何より肝要である。そのために最も大切な事が、青年の意識の「積極的」、「肯定的」側面を重視し、その症候を助長し培養し育成して行くことであると考えるのである。

#### 〔まとめ〕

朝日ジャーナルに掲載されている「世界青年意識調査」の結果を論評している東大の松原治郎教授の論評によれば日本青年の特徴は次のようなものである。日本青年の生き方と価値志向は消極的・情緒的であって、同じ年代に閉じこもり、学校、職場、社会というあらゆる生活領域に於いて不満をもち、対人関係において積極的、好意的態度をとらず、社会的連帯ということに怠慢であるというのが要約として結論づけられると述べている。まさしく三無主義の結実ともいえるものである。しかしわれわれ大人としては、いや教師としてはどうしてもこのような青年の消極的側面ばかりを強調することができないのである。日本青年は家庭やインフォーマルな人間関係の世界に於いてはどこの国の青年よりも強い心のつながりを持っているものである。青年は本来価値を志向し、それを内面化し、それを支えとして行動し、他と共に人間的成長を期待し、自己を確立して行くものである。純粋に「民主主義」や「自由」、「平等」、「福祉」や「平和」といった価値を志向し、その実現を社会や現実求めようとするのである。この青年のバイタリティーとエネルギー、積極的、肯定的意識傾向こそわれわれ教師は忘れてはならないのである。そして、未来に自己を投企し、人生・社会を創造する青年の情熱と熱意に切り込まなければならないと確信するものである。

# 倫・社グループ研究発表にみるある生徒たちの実践記録

## - O. H. Pで学ぶ都市における交通問題 -

都立江北高等学校 宮崎 宏 一

### ○ねらい

例年のように2学期から、倫・社グループ研究発表が開始された。テーマ設定・サブタイトルは自由で、各クラス6～7名の班が、7～8つできあがった。夏休みを全てその研究にあて、9月には、その研究報告書を出せねばならない。その報告書には、班員一人一人の顔写真が貼られ、各班員は緊張感につつまれている。研究発表が、怠れないように、また教科担任として、ひとりでも生徒の名前を覚えるためにも、この写真付きの報告書は楽しくもあり、大いに倫・社の授業の雰囲気をつくってくれている。

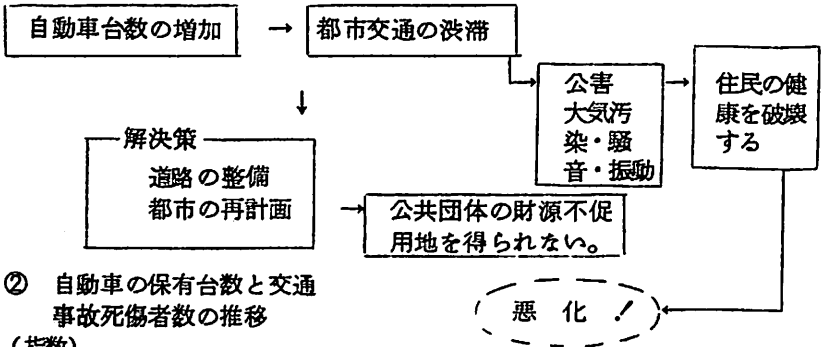
さてそんなある日の放課後、班員たちが、事前指導を受けにやってきた。職員室に入ってくるなり、「先生、O・H・Pを使って、発表してもいいでしょうか」というのである。私は、実のところ一度も使用したことがないので、一瞬、驚いてしまった。そこですぐに視聴覚系の先生のところへとんでいった。視聴覚の先生は、丁寧に、OHPの使い方などを、生徒と私に教えてくれた。そのグループの生徒たちは、生き生きとしはじめ、やる気を起こしてきた。テーマは「現代社会の問題点」、サブタイトルは、「都市における交通問題」であった。彼らはまた近くの、綾瀬警察署を訪ねて、最近の資料を得るとともに、疑問点を解明するためにファイトをもやした。ここに彼らの作成した資料の一端を紹介することにしたい。

### ○展 開

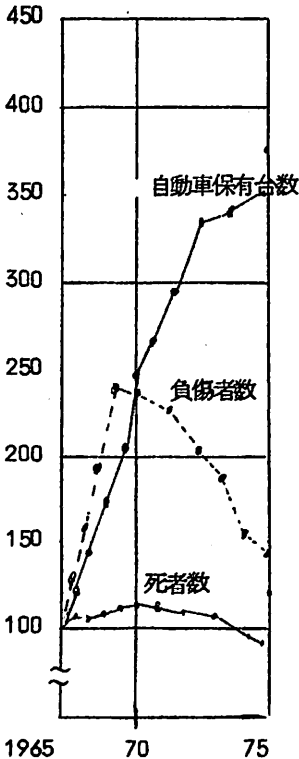
彼らは、O・H・P用シートを6～7枚カラーサインペンで作成すると同時に、プリントを約10枚ほどつくり、それに交通に関する「新聞の切り抜き」なども、ファックスしてとじ込んだ。それらの資料をもって、全

員が、視聴覚教室に移動した。班員と私は、早朝登校し機材の点検を済ませ倫・社の授業を待ちに待った。普通教室と違い気分的にゆったりとした空気が漂っていた。一寸した期待感と好奇心とが生徒をつゝみ、いつものおしゃべりは、まったくなかった。投影が始った。

① <現状・交通の悪循環>



② 自動車の保有台数と交通事故死傷者数の推移 (指数)



・自動車をもたらす移動の自由は、その範囲・速さ・快適さという点で徒歩・自転車などと比べられない面をもっている。さらにももの運搬・輸送についても、はかりしれない便益をもたらしている。自動車の保有台数は年々きわめて高い率で増えつづけ、自動車および関連産業が日本経済のなかで占めるウエイトは、圧倒的な大きさとなっている。しかしその反面、交通事故や排気ガス、騒音・振動などの公害現象をもたらしている。また都市環境は破壊され、自然は汚染され市民生活の安全を脅かし、社会的な安定性を失われつつある。

③ 交通事故死傷者数

年次	総数	死亡	重傷	軽傷
48	54,775	538	4,777	49,460
49	45,840	434	3,849	41,557
50	44,444	382	3,066	40,996
51	42,637	350	2,936	39,351

② 車両がわの事故原因では、一時

停止違反・横断歩道通行中を妨害

・信号無視などが多く、歩行者が

わの事故原因では、圧倒的に飛び

出しが多く、ついで駐車車両の直

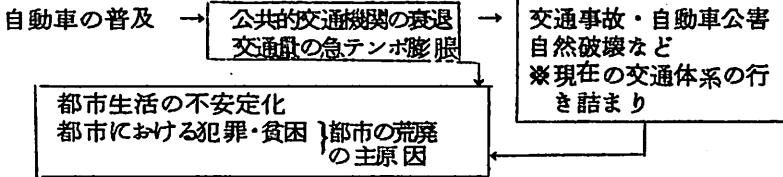
前、直後の横断・横断禁止場所の

横断・信号無視となっている。またこどもの事故原因でも、飛び出しが圧倒的で、車の直前、直後の横断・自転車乗車の場合などがあげられている。

④ 曜日別事故発生件数

年次	総数	日	月	火	水	木	金	土
49	35,868	3,937	5,318	5,150	5,212	5,253	5,252	5,746
50	35,337	3,802	5,218	5,178	5,278	5,026	5,251	5,584
51	34,131	3,659	4,993	5,043	4,966	4,888	5,273	5,309

⑤ <交通問題の深刻化> (自動車を一例として)



⑥ 日本の都市における歩行者が直面する自動車による危険性は大きい。それはたんに、自動車にひかれて死傷するという直接に被害を受けるものだけでなく、排気ガス・騒音などによる公害の悪影響のもとで都市生活をしなければならなくなっているということを考えに入れると、その危険性はさらにいっそう大きなものになる。ここに都市の荒廃の要因のひとつがある。

④ 機関別国内貨物輸送割合

民鉄 1%	鉄道 4%	自動車 86%		内航海運 10%	航空 0.185%
	国鉄 3%	営業用 24%	自家用 62%		



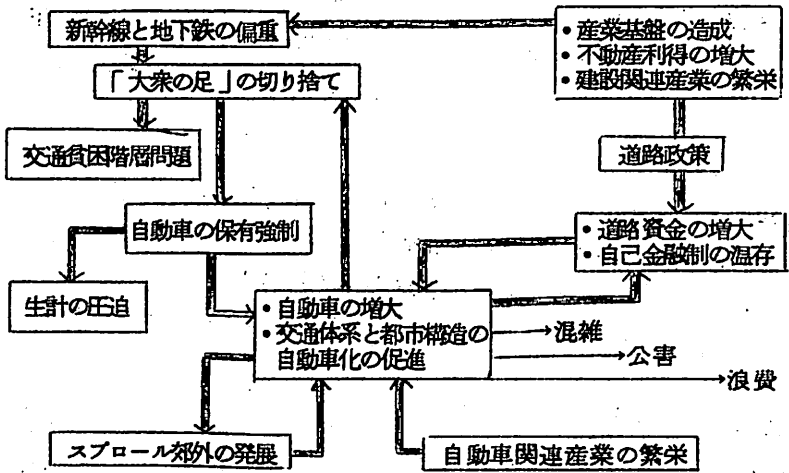
⑦ 自動車公害(1976年)

	二酸化窒素	騒音
基準値	0.02PPM	55ホン
東名高速	7~8倍	約72ホン(1日平均中央値)
環七	4~5倍	70~80ホン

・基準値：環境基準値  
 ・NO<sub>2</sub>(二酸化窒素)の値は他の地域においては約0.041PPM

- 1) 東名高速……深夜は交通量が少ないが、大型車が多くなるため、騒音などの影響は変わらない。
- 2) 環状七号線……NO<sub>2</sub>の値は、足立区の測定結果が0.43PPM(基準値の20倍以上)で最高値を記録した。基準値以下の地域は、たった6%にすぎない。

⑧ わが国の自動車化政策



湯川利治「モータリゼーションの本質」『国土と人権』時事通信社1974年から転載

⑨ 問題の解決への糸口

- 1) 新全国総合開発計画……巨大都市を大企業の中核管理拠点に改造し、地方都市に生産現場である大規模工業基地を設け、交通ネットワークや通信網で結び合わせる。
- 2) 第三次全国総合開発計画……新全総が挫折したため、それにかわって

でてきたものだが、新全総破綻の根本的原因の追求や是正がほとんどなされていない。また交通ネットワークの建設は、三全総、概案によると最後におかれてしまっている。

- 3) 地下鉄・モノレール・コンピューター制御の「新交通システム」の導入などが計画されている。これは必ずしも需要の大きくないところに膨大な費用を投じ、解決どころか、悪化に手をかけてさえている。
- 4) 自動車の増大に対してはマイカー・マイトラックの規制と道路の整備が考えられる。また公共交通サービスの水準低下に対しては、マイカー、マイトラックの走行規制に連動させて、路面公共輸送機関のための専用走行レーンを確保し、それらのサービス水準を利用者の要求に適合したものに改善していく。

ww

#### ⑦ 理想道路

- 1) 歩道と車道を並木などによって完全分離。(排気ガス・騒音等を避ける。)
- 2) 住宅など街路側の建物と道路との間を十分に間隔をとる。(住宅環境を破壊しないようにする。)
- 3) 車道を歩道より低くする。(歩行者に過度の負担をかけさせない。)
- 4) センターゾーンをつくる。(事故発生率の低下を図る。)

#### ○ まとめ

視聴覚教室での、O・H・Pによるグループ研究は、整然たる雰囲気のうちを終った。ちょうど昨年10月から東京では、5トン以上の大型トラックを対象とした通行禁止規制(土曜日のPM10時から翌朝AM7時まで)がテスト的に実施され、また12月からは新道路交通規制が開始されている今日では、われわれ住民ひとりひとりの交通規制に対する自覚が必要であろう。暴走族は現在、大きな社会問題になっているが新聞では「おちこぼれ」受戦戦争の歪み、などと分析する。ハイブリット車といわれる第三の自動車が実用化されるのはいつのことであろうか。交通の将来は、低い公害でより少ないエネルギー消費で輸送できるものが開発されるであろう。

## 第3分科会 「授業展開の研究」

### 研究経過報告

都立三田高校 海野省治

第3分科会は三つの分科会の中では人数が一番少なかったが、メンバー構成はベテランから若手迄バラエティに富み、又熱意あふれる先生方がそろわれたので、分科会の会合は年間で6回となった。以下順を追ってみたいと思う。

第一回 6月16日(金) 攻玉社高校 第一回例会後の顔合せと世話人の選出、今後の大筋の方向についての検討をした。メンバーがこの回は少なかったため、雑談風に話が進み、世話人は志村高の木村先生と三田高の海野となり、又分科会の研究を進めるに当って例えば授業のテープを取って持ち寄ってみてはといった話が出た。

第二回 7月6日(木) 志村高校 この日はじっとしていても暑い日であったので、場所を志村高校近くの喫茶店に移し、アイスコーヒーを飲みながら今後の会の持ち方や授業展開の方法についての意見交換をした。木村先生は教育相談の研究をふまえての授業展開をなさっているということで、例えば、教室に入って1、2分生徒の様子を見てから授業を開始なさるとか、授業展開では、グループ研究、ディスカッション、テープの利用などを、そして、又これはユニークなことであったが、学校周辺の寺や神社等の見学も行っているとの事であった。又戸山高の沼田先生は、生徒に「クリトン」の感想文を書かせ、それを3人のクラスメートに回して、それぞれ感想文を入れてもらい、更にもう一度本人が改めて感想を入れるという「レポート感想文記入方式」とも言う展開例や教師と生徒との対話、グループ＝ディスカッションなどの方法と交えて授業を行っているとの事であり、いずれ詳細なレポートをお願いすることにこの場で決った。この日は、次回迄にメンバー各位に一年間、一学期又は一つのテーマについて

の授業展開例や授業計画、授業方法を持ち寄ってもらうことを決めて散会。

第3回 10月6日(金) 三田高 この日は各自持ち寄ったレポートに  
よっての研究会。皆豊富な資料であった。飯岡先生(京橋高)は、生徒の  
読書指導及びグループ研究、生徒のディスカッションの内容などのレポート。  
小平先生(両国高)は一時間毎の詳細な授業スケジュールを中心にして  
説明がなされた。一学期は「現代と人間」の講義、2学期は思想分野の  
グループ研究発表との事であった。又先生自身の作られた資料や図版(模  
造紙大)とにしての発表まとめは後ほど10月の例会で発表された。秋元  
先生(学芸大附高)は年間の予定と、これから始めるグループ研究発表に  
ついてであった。先生は、発表時間30分、残り時間は発表に関する討議  
聞き手にはメモをとらせて後日発表者へ渡させるなどの工夫をなしてい  
た。その他課題図書を強制して読ませることの必要性が力説された。木村  
先生は「仏陀の倫理思想」の展開についての報告。3年生で倫社を行って  
いることをふまえてのお話であった。この日は、最近の生徒の現状につ  
いても話題が広がり、最近の生徒は子供っぽくなっている。素直、右傾化  
しているなどのことが各先生から語られた。又共通一次の話も出て、次回  
にテスト問題や模試の問題を持ちよるということになった。

第4回 11月13日(月) 戸山高校 雪になるのではないかと思う程  
の冷雨の中を皆さんにお集り願った。この日は戸山高教頭の鮎沢先生や竹  
台高の高原先生もまじえての会合であった。沼田先生の授業展開レポート  
が中心であった先生の授業は、生徒を動かし、生徒同志で共に学ぶ授業と  
言える。生徒からの問題提起も利用して身近な問題から思想の内容に入っ  
ていく。そして前に述べた感想文記入方式やグループディスカッションな  
どについての生き生きした授業展開のレポートであった。この日は更に課  
題図書の内容としてふさわしいものは何かとか、推薦図書としてはどのよ  
うなものを示しているかとかの話や、前回に引きつづき、テストについて  
の話題へも話が及んだ。沼田先生の場合には全くもう共通一次は意識せず

との事であったが、各校とも倫社や政経で受験する生徒が急激にふえて、その対策つまり授業展開をどうするか—に頭を悩ましていらっしやるようであった。

第5回 12月12日(火) 学芸大附高、伝統の重みを感じさせる校舎の中でほとんどのメンバーがそろってこの日は開かれた。この日はまず帝京高の近藤先生から授業展開及びテストの答案についてのレポートがなされた。先生の授業は、豊かな資料を生徒に渡して、又テープや図式を使ってなされているということであり、又、テストの答案では先生の優秀な授業展開の成果があらわれているものがいくつか示された。この日は又、先生がマンガに興味のあることもわかり、マンガ論に一時話が集中した。映像やマンガの時代といわれる中での倫社のあり方を考える一つの材料ともなった。後半は井川先生のレポートであったが私は私用で中座をしてしまったために報告することが出来なく残念に思う。

第6回 2月2日(金) 東高校、年が明けての分科会は今迄にあまり例のない事であるが、回を重ねる毎にメンバーの先生方に熱が入ってきて第6回の会合となった。この日は、飯岡先生の「ソクラテスの弁明」を用いた学習活動についての発表をまず行った。「弁明」を8時間位かけて、読み進めた授業であったが、一つの作品をじっくり読んだ効果が学年末のレポートにもあらわれている(先生の所でも3年で倫社を行っている)との事であった。その他の話題としては、秋元先生、井川先生の持ち寄られたテープ(生徒のグループ研究のもの)を聞いて、それぞれの学校の特色を生形の形で知ることが出来た。会終了後は有志で納会を行い、又さまざまな話題が出たが、ここでは残念ではあるが省略をする。

以上、第3分科会は今年度はずみのついたボールの如く、活発な活動を展開した。このムードが来年度以降も各分科会において継続されていくことを期待したい。

# 倫社学習指導のポイント

## - ねらいをふまえた主体的な授業展開 -

東京学芸大学附属高等学校 秋元正明

### ① まえがき

戦后34年も経過すると、日本教育全般への反省につれて、社会科における倫社の学習指導も見直される時機を迎えたようである。高校における道徳教育の核として重要な意味付けをしてきた倫社も、(1) 国公立共通一次試験の導入という大学入試の要請と、(2) 57年度よりの「現代社会」への発展的移行によって、大きく変貌しようとしている。ようやく定着しつつあり、かつまた、数々の実践をふまえたすぐれた研究業績の蓄積された今日、一抹の感慨を禁じ得ない。

しかし、ふりかえって見るときに、本来の真味での学習の主体である高校生にとっての倫社学習は、どれほどの意義をもっていたのであろうかと自問自答するのが偽らざる心境である。すなわち、価値観の多様な変動する現代社会に生き抜く高校生にとって、本来の生き生きとした主体的学習が展開できたであろうからという反省である。ささやかな実践を通して、倫社学習指導のポイントを列記してみたい。

### ② 学習目標の再確認

目標のないところに効果的な学習は成立しない。教師の指導方針の確立なくしては学習指導も無意味であることは自明の理である。その拠りどころとなるものは、「学習指導要領」であり、その解説も含めて十分に熟読玩味してスタートすべきであろう。倫社の学習目標を再確認することが、学習の前提条件である。とくに、教職経験も浅く未熟な教師は、学習指導要領の法的拘束性を論議したり、先哲の思想の一方的なイデオロギー批判に墮落する前に、まずもって謙虚に学習指導要領を吟味・検討して、教師としての学習指導目標を再確認することなくしては、被教育者である生徒

の学習目標も曖昧となり、学習そのものが混乱、動揺するであろう。ことに「現代社会について客観的に認識させるとともに、そこにおける人間の生き方について考えさせ、青年期における自己形成の課題を自覚させる」ことをねらい、「現代の社会に生きる人間として、常に自己の考え方や行為を反省し批判していく自主的態度や、倫理的実践を高めようとする自覚的な態度と、それらに必要な能力を養う」ことを眼目としている倫社学習の目標を達成するためには、謙虚にして誠実な態度が教師に要請されるであろう。私が、年度初めの第一時限に、学習にスタートしようとする生徒全員に「学習指導要領」の抜き刷りを資料として配布するのも、生徒とともに学ぼうとする教師の姿勢を吐露した結果である。

### ③ 学習内容の精選

年間に2単位時間と限定されている中で、自ずから学習内容は精選せざるを得ないのは当然である。況んや、教師の趣味・趣向によって内容選択したり、一面的な強制は邪道であり、画一的にして総花式に堕しないための配慮は常に心がけねばなるまい。目標に照して考えるときに、「現代と人間」単元は「人生観・世界観」単元の導入内容として重要な意味をもつものであるので、普通課程の高校では1学期間をそれに充当するのが無難かも知れない。2・3学期間を「人生観・世界観」学習におくことになろう。

私の立場では、夏期休暇の効果的な活用を考えて、「現代と人間」を4、5月、「人生観・世界観」を6月より取り扱うことにした。具体的に云えば、「現代と人間」の課題図書として、時実利彦『人間であること』（岩波新書）を生徒全員に時間をかけて読ませることから、人間とは何か、いかに生きるべきかを多面的に考えさせる契機たらしめた。文科系の者は勿論のこと、理科系の者まで興味と関心を示してくれたのは、この著作がすぐれた生理学者のものである外に、多数の参考文献を紹介してくれている良書であることによるといえるまいか。これに引き続いて「人生観・世界観」

111

の学習に入るのである。ここでは、とくに「源流思想」に十分時間をかけて、原典購読を中心とする学習を展開することになっている。(よく見受けられる研究発表の成否は、この源流思想の理解によって決まるといっても過言ではないので、重視こそすれ軽視すべきではあるまい。)

6月より源流思想の代表的な著作の中から、とくに『ソクラテスの弁明・クリトン』、『旧約聖書・新約聖書』『スタニパータ』『論語』を課題図書として生徒全員に読ませることにしてきた。原典中心の講義式の学習の過程において、生徒にとっての夏期休暇中の読書は、青年期における最も充実した一時期となることであろう。そして、10月末までには遅くとも源流思想の予習は終了する。近・現代思想はその展開であるので、比較的容易に進行するように考えられる。さらに、日本人として日本思想の学習は回避してはならないことは云うまでもない。

繰り返すようであるが、「現代と人間」において、現代社会や青年期の課題を重点的に取り上げて考えさせることによって、十分に学習内容の精選は可能であろう。また、「人生観・世界観」において、源流思想を基本として徹底的に理解すれば、「古典などに親しむ態度や習慣を養い、読書によって思索を深める意義を認識させる」ことも可能である。結論としては、年度初めに周到な年間指導計画を作成することに尽きるようである。(私は授業参観するときに、必ず年間指導計画を拝見させて頂くことになっているが、時々このような年間指導計画もなしに学習指導している教師に出会うのであるが、学習内容の精選をどう考えておられるのか改めて聞きたいのである。)

#### ④ 学習方法の検討

誰れが、何を指導するかにおいて、被教育者(生徒)を対象として、教育者(教師)が指導する学習内容の図式に、血液を通わせるものは学習方法であろう。いかにすぐれた学習目標を設定し、豊かな学習内容を用意しようとも、生徒に理解させて興味・関心を惹き起させ、さらに生き生きと



した主体的な学習を展開することなくしては、倫社の存在意義はありえないであろうし、たとえあったとしても、学習効果は半減してしまうと思う。

私は、極めて単純に(1) 講義式と、(2) 発表式に二分することにしてゐる。これはあくまでも便宜上の区分であつて、現実には多様な学習方法の複合(コンプレックス)が成り立つてであろうことは否めない。まず、講義式は、強いていえば教師主導型の方法で系統的計画的で能率のよい方法である反面、生徒の消極的受動的態度が懸念される。また、発表式は、生徒中心型の方法で非系統的自由的で能率の悪い方法である反面、生徒の積極的能動的態度が顕著である。ここに、両者の方法を止揚した高次の方法が定立してくるように思えてならない。それぞれの方法の長短を配慮して学習方法は創造されるであろう。以上からも察知がつくように、私の場合には、基本的基礎的内容の学習において、つとめて講義式をとることにし、その発展的応用的内容の学習において、発表式をとることにしてきたのである。しかも、学習の主体が被教育者である生徒である事実に注目し、生徒中心の発表式の学習方法にこそ、「倫社のねらいをふまえた主体的授業」が展開するものと体験から確信している。勿論、発表式の欠点・短所を十分補充する上での事前・事後指導の配慮は決して欠かしてはならないのは、教師たる者の最大の義務である。私が長い間、「先哲研究」と名付けて古今東西の先哲に学ぶ共同研究体制をとってきた所以もここにある。(詳細は『先哲に学ぶ—高校生の先哲研究』〈その1~4〉参照)

## 5) あとがき

戦后教育の反省から、倫社学習指導の転機に立って、も一度教育の原点への回帰が検討されてよい。「教える」のみに墮して「育てる」ことを忘れた戦后教育は、謙虚に反省して再出発するのが妥当であろう。カントの「哲学を教えるのではなくて、哲学することを教える」との言葉は名言である。倫社の知識を教えるのではなくて、倫社学習を通して「主体的に考える」ことを教えるところに、倫社学習指導のポイントがあると思われる。

# 「死をみつめる心」を読んで考えたことを まとめるあなたの意見集

都立京橋高校 飯岡祐保

死をみつめる心—死に直面してからの心の転回……………岸本英夫  
死後の生命の存続を信じない私が、癌という思いもかけない病気のため  
に生命飢餓状態におかれ、死の暗闇の前に立たされたのである。天国や浄  
土などの理想世界を信ずるものにとっては、死後の世界は暗闇ではない。  
一つの実体である。しかも輝かしい世界である。しかし 私にとっては、  
それは、真黒の暗闇であった。

私は、その絶望的な暗闇を必死な気持で凝視しつづけた。そうしている  
うちに、私は、一つのこと気がつきはじめた。それは死というものは、  
実体ではないということである。死を実体と考えるのは人間の錯覚である。  
死というものは、そのものが実体ではなくて、実体である生命がない場所  
であるというだけのことである。そういうことが、理解された。

生と死とは、ちょうど、光と闇との関係にある。物理的な自然現象とし  
ての暗闇というのは、それ自体が存在するのではない。光がないというだ  
けのことである。光のない場所を暗闇という。人間にとって光にもひとし  
いのは生命である。その生命のないところを、人間は暗闇として感じるの  
である。

死の暗闇が実体でないということは、理解はなんでもないようであるが  
実は私には大発見であった。これを裏返していえば、人間に実際与えられ  
ているものは、現実の生命だけだということである。人間は日々の生活を  
くりかえして生きている。これは、疑いのないことである。人間にとって  
生命は実体である。しかし人間にとってあることは、今生きているとい  
うことだけである。人間には生命がある。五十年か六十年か生きているが、  
その寿命の中の一日々々ほどの一日も、すべて人間にとっては同じように  
実体としての生命である。どの一日も同じように尊い。寿命がつきて、死

が近づいたとしても、その死に近い一日も健康の時の一日と同じように尊い。そのいのちのなくなる日まで、人間は生命を大切に生きなければならぬ。死というのは別の実体であって、これが生命におきかわるのではない。

このような考え方がひらけてきた後の私は、人間にとってなによりも大切なことは、この与えられた人生を、どうよく生きるかということにあると考えるようになった。……このようにして、死の暗闇の前に素手で立っていた私は、このギリギリの限界状況まで来て、遂に大きな転回をして生命の絶対的な肯定論者になった。死を前にして生きるということが、私の新しい出発点になった。「人生の本質＝死をみつめて」文芸春秋社より

以上をよんで、もしも、自分がこのような立場に立たされたらどうするかについての意見をかく、それをみた別の生徒が、そのことについての自分の意見をかくようにしたもの。A-A' というようにした。

A 最後は土になるのだから、どう変えよという気もない。—中略—自分の死なんて考える必要がない。もし考えたとしたら、後世の歴史に残る勇士として死ぬるように努力する。(E 久住)

A' 土になるということは、自分も前に考えたが、そんなことを考えると人生がむなしくなるのではないだろうか。考える必要がないといっておきながら、とてつもなく大きなことを考えている。どうせいつかは死ぬのだから、今からこうするため努力した。(E 田村)

B 死ぬ前には、ほくの好きな絵を描けるだけ描き、それと共に人生のすばらしい愛というものでうめつくして死にたいと思う。でも現実になってみないと—人生は、あらすじのないドラマだから。(E 田村)

B' このような考えもあったのか。人の考えは十人十色だ。ただ一つ意見をかくなら、あらすじのないドラマではなく、あらすじのあるドラマであると思う。(E 星野)

C 私は以前 死んでもおかしくないめに会っている。—中略—自分が死

ぬことは、何とも思わないが、あとに残された者のことを思うとつらい。  
—中略—はっきりいって死よりもおそろしいものがたくさんある。その中  
の一つに生きることがある。自分の死より、他人の死、肉親の死の方がは  
るかにつらい。(E 丸田)

C' これは同感で、ボクも兄の死にはつらかった。死ぬとわかったら心が  
平静になるかも知れない。(E 須之内)

D 悔いを残さない。漠然と日を送るのと、死を前にした日々を考えると  
直前の日々の方が尊く感じる。変化は実生活ではなく、姿なき自分の一日  
に対する考え方だけだと思う。(E 須之内)

D' 悔いを残さないといっても、それを実行していったらまわりのものが  
どうなるだろう、まわりのことも考えて (E 武井)

E 現代では 宗教などは何のたしにもならない。「金」が人生の主役で  
ある。「金」が何事をも解決する。他略 (E 小野)

E' 金だけで何ごとにも解決できるのか。(E 柏木)

F 少なくとも生きるという事に対してもっと真剣になるのではないかと  
思うし、そうしたいと思っている。人間いつ死ぬのかわからないから理想  
としてはいつ死んでもいいように生きるのが本当だけれども—略—

(E 伊藤)

F' もしガンでなおらないとわかっていたら一分一秒でも生きようと—  
せいっぱい生きようとするだろう (E 星野)

G もし私がそうになったら今まで食べたことのないものをおなかいっぱい  
たべたり、ドンチャンさわぎをしてあそんだり、それに疲れたら一人旅を  
して、だれもみな知らない人とお話をする。そして、野原でいねむりをし  
て起きたら、子犬と遊ぶの。自由気ままにあきたら家に帰って、親を安心  
させたい。(C 鈴木)

G' 私もそうしたい。しかし 死ぬのがわかっていて そうできるかしら。  
私はもっとひねくれてメチャメチャな生活になるかも。それに、親のこと

まで考えていませんでした。(C 村上)

H いざそうなったら もう死んでしまいたいって思ってしまうだろう。

(C 中山)

H' そう思っても死ぬる人と死ねない人がいる。私はきっと死ねない方に入ると思う。人間だったらやっぱりどんなに苦しくとも与えられた人生を生きなきゃいけないと思う。人間に「死ぬ権利」があるというけれど、最も基本となるのは「生きる権利」だと思う。(C 田中)

I 私は精神的に強くないのでまずめちゃくちゃにわがままになると思う  
—中略—私には、どれだけ精神力があるのかな。(C 田中)

I' わからないけど、一日を大切にしたいと思えたら、すばらしいことなんだけど

(C 本庄)

J 自分だけがどうしてそうなるのかと考えて残りの時間をムダにすごすことだけはしたくない。—中略—

(A 花本)

J' 死のこわさに打ち勝って悔いのない生活が残れるかどうかは不安です。

(A 岩渕)

K 私たちは今でも、いつやってくるかわからない死にどんどんむかっている。死がやってきたとき、「今まで生きてて良かった」と思うようにしたい。—他略—

(A 小松)

K' 私もこう考えられたらいいと思う。でもショックで気が変になると思う。

(A 近藤)

L 自分の生きてきたというしるしを、うまれてきたというしるしを残したいと思う。—中略—世の中のどんなものにも愛を注げるような美しい心をもって死にたい。

(A 高橋)

L' 多くの人が充実した毎を送りたいと考えているだろう。でも私たちは、つい何となく毎日をすごしてしまう。一日を大切に生きれば生きるほど時間は足りない。

(A 桜井)

M まず、親の手からはなれひとり立ちをしたい。(B 道木)

M' あすのことにしばられて、今日を犠牲にするなんてなくなるでしょうね。—他略— (B 中山)

N やりたいことをする。アルハンブラ宮を見る。リュートを習う。本を読む。どうせ死ぬからといってめちゃくちゃな生活はしないだろう。私も死ぬのはこわい。 (B 田口)

N' 共感はしますが、お金がかかりすぎて親の方が苦しくなったりして…「やりたいことをする」というのが、他人からみるとめちゃくちゃな生活に見えたりして…… (B 鈴木)

O 頭の中に浮ぶいろいろなことを見つめていたい。最終的には何もしない—他略— (B' 進士)

O' でも、何かその中で行動に移せたらいいと思う。たとえ実現しなくても、一日一日を生きている実感というものを持って生きていたら悔いはないのではないのでしょうか。 (B 貞政)

P 毎日人の倍も生きている実感を得る為に今よりもっと積極的になり、優しくなり、わがままがなくなるかも知れない—他略— (D 大坂)

P' その通りだと思う。 (D 名畑)

Q わがままになりしたい放題をするだろう。でも、最後には後悔すると思う。自分のことしか考えていないから。—中略— 死んでも、もったいない子が死んだといわれるような態度を死ぬ返したい。—略— (D 白井)

Q' それは理想だ。実際に死ぬとわかったら不安からわがままになるかも知れない。 (D 笠原)

R —前略— 何のために苦勞して長生きしたいのか。無意味に死にさからったり、死に急いでも同じだ—他略— (D 木内)

R'死ぬことが楽だったら、誰もが死ぬのではないか。人間はうまれようとしてうまれたのではない。この世の中で生まれていやだと思っている人はあまりいないと思う。 (D 本多)

S —前略— いろんなことを考えるがやっぱり今まで通り無気力な生活を

送る。(人生のむだづかい)

(D 榎本)

S' それでは自分のためにならないと思う。やはり、自分をささえてくれた人をも思いやり、生きねばならない。

(D 飯田)

T あすも生きていと思えばこそ、今みたいなのん気な生活がおくれている。明日はないと思うなら、自分の好き勝手なことをしてしまうと思う。『今』を楽しめることならなんでもするかも知れない。—中略—もう死ぬとわかるとなんでもバカバカしくなるような気がする。(H 富田)

T' 最後はむなしさが残るだけだと思う。自分だけが苦しんでいるのではないことも忘れてはいけないと思う。いっしょうけんめい一日をすごして大切にしましょう

(H 沼)

U 今の私はいつの日か死ぬのに、その点を少し甘くみている気がする。つまり明日は100%くると思っているのだ。—中略—しかし死が目の前にあることがわかったなら、積極的になるよう努力をし、不可能に近いことでもできるだけ努力して可能にしようとするだろうと思う。(H 佐藤)

U' 心では思っているも、身体がいうことをきかず、やけになったり死への恐怖のために気が動転するのではないか。

(H 吉野)

V 将来の目的に向って努力せず長生きしている人よりも、むしろ、将来の目的にむかって限られた日々を一步一步努力している人の方が、ずっと人生において価値があると思う。私は後者でありたいと思う。私のまわりに家族やよい友がいるからこそこのように考えることができるのだと思う。

(H 斉藤)

W —前略—その後会えるだけの友だちに会い、好きなことを思いきりやり終えたら今まで通りの生活をする。

(G 守田)

W' あなたと違い喜怒哀楽の人一倍激しい私はショックを受けてわめきちらすだろう。すぐに何をするか結論を出し行動に移るだろう。—中略—私は、あの人のように生きなさいとかいわれなくてもいい、ただ自分に忠実に生きたいと思う。

(G 外村)

X 一前略一人のためになることとか、一発でかいことを行なって悔いを残さないようにして死んでゆくと思う。(G 市川)

X' これは夢だと思う。私もそうは思うが、実際にそんなことはできないと思う。一後略一 (G 中川)

Y 自分のやりたいことをいろいろやって、人に死んでから「あの人はいい人だった」といわれるよう日々努力するのみです。(G 蝦名)

Y' 私も同じ考えですが、自分のやりたいことばかりやっていて「あの人はいい人だった」と思われるでしょうか。「死の迫った人」を見守る人たちは、その人がやりたいことをやっても何も文句はいわないでしょう。そうなれば「死の迫った人」はまわりに甘えているだけで何一つ「ああ、あの人はいい人だった」と思われる事はしていないと思います。一後略一 (G 柴田)

Z 一前略一 いろいろなやみながらいつもとかわりなく生きてゆく。

(G 三橋)

Z' 本当は毎日だって人のやさしさやぬくもりにふれていたいと思う。多くの人に私を知ってほしい。やさしくされたい。



# ヘレニズム・ローマ時代の思想

## エピクロス学派・ストア学派

都立東高等学校 井川哲夫

### 1. 学習のねらい

ソクラテス・プラトン・アリストテレスに代表されるポリスを中心とするギリシア思想の基本理念は、ヒューマニズム、ポリスの優先、野性の尊重であった。ギリシア人の理想的な生き方は人間が本来もっている自然的本性や能力を調和的に発展させることであり、善美な人を理想的人間像とした。このようなギリシア人の生き方はポリス社会の没落によって転換せざるをえなかった。アレクサンダー大王がBC330年ペルシアを敗り、地中海を中心にエジプト、インド西部にわたる帝国を建設したことである。ヘレニズム時代の倫理思想はポリス中心の思想はすたれ、ポリスの制約を離れた個人主義の倫理観、同時に世界に至る所の故郷を感じる世界市民主義 (cosmopolitanism) が発達した。それとともに自由なポリス市民において初めて可能な合理主義的精神は衰え思想的にも大きく変質することになる。このような歴史的社会的背景を世界史学習との関連性においてとらえ、ヘレニズム・ローマ時代の思想的意義について理解させる。

### 2. ヘレニズム三派の系譜、小ソクラテス派

(1) キュニク派—アンチステネス—ストア派 (初期ストア派) セノン、クレアンテス、クリシッポス (中期ストア派) パナイチオス、ポセイドニオス、(ローマ帝政期ストア派) エピクテトス、マルクス=アウレリウス、セネカ、

(2) キュレネ派—アリスチッポス—エピクロス派 エピクロス、ルクレチウス

(3) メガラ派—エウクレイデス—懐疑派、ピロン、チモン、アルケシラオス、カルネアデス、アンチオコス、キケロ、プルタルコス

### 3. エピクロス学派の倫理思想

エピクロスはサモス島に、アテナイ人の入植者を父として生まれた。18才の時アテナイに出て2年間兵役に服し、その後10年間亡命を余儀なくされ一家は貧しい生活条件の中で、彼はデモクリトス派をはじめ他の哲学諸派の思想を学び独自の思索を深めていった。30才で自立すると、ミューティレネで、ついでランプサコスで教えたが35才の時にアテナイへ移住しそこに学園を開いた。学園には奴隷も遊女もあたたかく迎え入れられ師のエピクロスは慈父のようにまた神のようにさえ崇められながら、そして弟子達は互に友情のかたい絆で結び合っ て魂の平安を求め る共同生活が続けられた。彼は快楽主義者として非難されてきたけれど、しかしこの快は本質的には「苦痛のないこと」を意味するにすぎなかった。「パンと水だけで暮らしていても、私は肉体上の快に満ちていられる」という言葉によってあらわされている。また「快楽が目的であると私達が語る場合、私達は例えば私達の説を知らない人々とか、同意しない人々などが考えているような意味での、放蕩者の快楽、つまり享乐的快楽を意味しているわけではない。むしろ私達は肉体にあっては苦痛なく魂において煩いのないことを意味しているからだ」(メノイケウスへの書簡)「正義最大の果実は心の平静である」(断片)「心の平静な人は、自他いづれに対しても煩わしいことを起こさぬ」(同上)といっている。エピクロスはまた神々から宇宙の支配とか人事への関与とかいような仕事を免除して神々をこの世界からひきはなし宇宙の中間地域に住まわせそこで静かに浄福の生を楽しませることにした。そして世界を摂理や目的によってではなく機械論的な因果必然によって説明しようとした。エピクロスの求めたものは精神的快楽であり、心の安静な状態をアタラクシア(ataraxia)とよんだのである。

#### 4. ストア学派の倫理思想

キプロスのゼノンにより、キニク派を受けついで発展する。ストア学派の思想家は自然にかなった生活を送ることが幸福であり善であると考えた。ゼノンは自然を人間の本性(理性)と考え、自然にかなった生活とは

人間のうちにある非理性的部分を理性に従わせ、両者の調和がとれた生活を理想とした。そのためには人間感情や衝動に動かされることのないアパテイア(apatheia)が目標であった。クレアンテス以降自然の意味は世界にまで拡大され、人間の本性(理性)と世界の本性(世界理性)との調和が求められた。ローマ帝政期は、エピクテトス、マルクス＝アウレリウス、セネカなどこの時期に入ると哲学は総合的な学問体系であることをやめて実践倫理、人間の生き方の問題だけに関心を集中した面があった。ストア派も哲学の目標を心の平静不動におき、そこに人間の幸福を見いだそうとした点でエピクロス派と共通していたが、しかしその目標を達成する方法手段、またそれを支えた世界観や自然観はエピクロス派とは全く対照的であった。人生にあって徳のみが唯一の善であり、徳だけで幸福には充分だという考えかたで、死も病気も貧困もその他のすべての災厄も善悪には本来無関係なものともみた。

「人生の目的は自然に従って、つまり徳に従って生活することである。なぜならば自然がわれわれをそこに導いてくれるからである」(ゼノン・断片)「彼らは奴隷か人間である。彼らは奴隷か友人である。もし君が門地を偶然に支配するにすぎないと知るならば、彼らは世界市民として平等である」(セネカ、書簡)、セネカは魂と肉体の区別を強調し、人間の人間たるゆえんは正しい理性にあり、それによって人間は自然にかなった正しい生活ができるとした。マルクス＝アウレリウスは「もし理性的部分がわれわれの間に普遍的なものであるなら、われわれが理性的な存在であるゆえんの理法も普遍的なものである。このことが事実なら、すべきか否かを指示する理法もまた普遍的である。もしそうならば法もまた普遍的なものである。とすればわれわれは市民というわけである。市民ならば公共体に参与する。その場合には宇宙はまさに国家という組織体である。それ以外のいかなる公共体に全人類が参与すると人は言うのであろうか。むしろ普遍的な国家からわれわれの理性的な理法に法的な部分は由来している」

(自省録)といい、厳しい自己反省をくりかえし、人間は理性をもつものとして世界市民であり平等であると主張した。

#### 5. エピクロス学派・ストア学派の共通点と相違点

共通点……理性により欲望や感情を統御、個人の心の中に平静不動を求める個人主義的思想、幸福主義の倫理観

#### 相違点

エピクロス学派……人間の感情を重視 最高善は幸福である。

精神的快樂主義、アタラクシアを思想の境地とする。隠れて生きよ 個人主義倫理、国家や社会に関心を示さず、「エピクロスの園」友愛にみちた生活を求めた。

ストア学派……最高善を幸福 人間の理性に従った有徳な生活の中のみ幸福が存在、自然に従え。理性にしたがった禁欲生活を理想とする禁欲主義を説く。アパティアの状態を理想とした。学説は多数の学者で大成、義務、道徳を尊重、全ての人間に理性の存在を認める、人間の平等を説く世界市民の思想を主張、人間の本性と世界の本性の調和、世界理性が支配する世界国家、キリスト教、ローマ法、近代ヨーロッパ自然法思想に影響。

#### 6. まとめ

以上ヘレニズム、ローマ時代の思想史学習の授業展開の概要をあげてみた。ポリスの崩壊により、ポリスの一員としての自覚がうすれ、個人主義的傾向と、世界市民主義があらわれてきた歴史的社会的背景を生徒は理解しえたであろうか、授業では二枚のプリントを資料として活用したが、作品の解説などにやゝ時間がかかってしまった。一時間という時間配当で効果的な授業をするために指導計画、指導方法、指導内容を検討し、更に研究を続けたいものである。

# 「仏陀の倫理思想」 - 「ふれあい」 の授業を求めて

東京都立志村高等学校 木村正雄

〔とりあげた理由および学習のねらい〕

授業の展開は、教師と生徒と教材の三つがそれぞれ最も効果的に発揮されることが望ましいと考える。その効果的とは、その三つがリズムカルに発展的、系統的、主体的に発揮されることだと考える。時には生徒サイドに、時には教師サイドにというように重点が変化する力動的関係であるともいえる。そこで、私は「仏陀」の授業の展開を次のように行ない。「倫社」のねらいを生かすことに努めている。「仏陀」は源流思想のひとつとして、現在の私たちの生活の中に顕著にしみこんでおり、特に、倫理思想の根本を理解させるのに適切な教材である。また、教師と生徒の関係が単に知識や理解のやりとりという気持の疎遠なものでなく、両者の心がふれあう授業を求めて展開している。

〔授業展開〕 5時間

## (1) 指導目標

ア. ゴータマが出家し、修業を重ねた後、悟りを開いた過程を理解させ人生の苦悩についてどう解決しようとしたかを考えさせる。

イ. 仏陀の根本思想である四諦、八正道などを理解させ、人生の苦悩について問題解決の方向を示してくれることを考えさせる。

ウ. 仏陀の考えと現代に生きる生徒の考えに示唆しているものをは握させて、各自の人生について思索を深める手がかりとする。

エ. 郷土にある寺院、不動尊、仏像、墓地などを見学し、それらに直接ふれることによって、仏陀の思想を身近かに、しかも多角的に考えさせるとともに、文化遺産を愛護する態度を養い、また、郷土愛を高めさせる。

## (2) 導入

ア. 感情の重視

高校生といえども学習の動機は大切である。一人一人の生徒のその時間における感情（表情）をとらえてから授業に入る。クラス全体の雰囲気も同様である。次に、経験的内容からくる雰囲気もありのまま受けとめる。例えば、登校でかけに家族とのいざこざ、友人との緊張関係、前時授業での緊張や動揺とかに気づくこと、仏教と言っただけで線香の匂いがする、葬式を思い出す。寺や墓への感情などを軽視しない。

### イ. 前時の想起

前時での学習を思いださせる。たとえ2、3分でもよい。前時のアウトラインが明確になるようにする。「気づく」ことは学習意欲へつながる。

### ウ. 発問の工夫

仏陀はなぜ出家したのか、人生は苦というが本当にそうだろうかなど考えさせる発問をする。次に、指名された生徒が発信するまでじっと待つこと、他の生徒にも待つことの大切さを理解させ、一人の気持をみんなが理解しよう努める。生徒の応答がたとえピントはずれでも間違っていないものを素直に受けとめる。「人生は苦ばかりではないと思う、楽しいこともあると思う」「仏陀はあまりにも悲観論的である」という発言も素直に受けとめていく。

## (2) 展 開

### ア. グループによる研究発表

仏陀の思想研究グループ6名位。質問なども入れて50分以内で行なう。必ずプリントするか模造紙に図示させる。四法印、縁起、四諦、八正道、重要な用語など。自作の録音テープや写真、スライドなども利用、生徒が取材してきた僧の話や寺の鐘の音を流したり、写真を見せたり立体的発表を行なう。発表生徒に対して一般生徒は積極的に質問するよう指名したりして活発化をはかる。「正しい言葉というけれども具体的にはどういう言葉ですか」「中道とは苦行主義でも快樂主義でもないというのがそんなことあたりまえではないか」などの疑問がでる。発表者は誠実に答える。答え

られなければ次の授業までに調べてくる。次に発表者は研究内容や方法について感想を述べる。「研究する前は仏陀なんて線香くさい感じてあったが、今は人生の根本をついているようでびっくりした。本当にそうだなあという箇所がたくさんみられた」「本当に調べてよかったと思う。これからもさらにくわしく研究してみたいと思う」「寺の落ちついた雰囲気の中でお坊さんの話を聞き、何か奥深いものを感じた」など。利用した資料は渡辺照宏の「仏教」中村元の「ブッタのことば」など。教師は自分の倫社ノートに発表内容、方法、態度などを記入する。評価は、発表を聞いていた生徒全員が研究発表者の内容、方法、態度を10段階にして評価し、さらに励ましのひと言をつけ加える。集めた評価表を発表者に渡し、発表者はそれを見て反省し、教師に提出する。教師はその評価表を記録する。

#### イ. 講義

講義は研究発表の内容を補足する。生徒のプリントや模造紙による掲示物、板書事項を生かして講義する。縁起説、四法印、四諦、八正道、中道、空、仏陀の生涯をミニマムなものとする。教科書は1ページ、数項目でも必ずふれる。資料としての教科書を生かすことである。

#### ウ. 録音教材の利用

録音テープ「ひとりっ子をなくした母の物語」(学事出版)20分間流し感想を10分以内で書かせる。そのノートと級友を交換し相互に批評を書かせる、級友の意見の交換に大いに役立つ。

#### エ. 臨地見学

学校周辺の寺、仏像、道祖神など(曹洞円福寺、京徳観音堂、不動堂、縄文史跡、子育地藏)を50分間で見学する。各クラス毎、9クラスで4回見学の目的や解説の資料などプリントし配布する。生徒は禅寺の静粛な雰囲気にしたったり、不動尊や阿弥陀像にほれこんだり、線香を買ってみんなでわけてともしたり、さい銭をあげて合掌する生徒もいる。水子地藏の前でたたずむ女子、道祖神にふれてそのぬくもりにひたっている男子を

ど教室ではみられない動きがみられた。カメラを持った生徒はスナップをとったり、記念撮影したりしてそれを教室に展示した。見学地近くに住む人々は「今どきの高校生が線香をあげたり、不動様をおがむなんて感心だね」という声も聞いた。見学後、生徒は「学校の周りにこんなに古寺や仏像などの文化財があることをはじめて知った。郷土を知る意味で本当に良かった。」「お地藏様や観音様のやさしい姿、とても静かなふん囲気、一度泊ってみたいという気持もでたし、竹林などあって何となく京都を想わせる。ここにいたら仏の心にふれ、何か悟れるような気がした」と感想をもらしている。

#### オ. 質問、疑問、グループでの話し合い

6名位のグループ毎にして、司会と書記を決め「仏陀の思想を学んで感じたこと」を話し合う。級友の意見によって共感したり反発を感じたり、疑問点を解明したりする。

#### カ. 倫社ノートの利用

各クラス1冊宛ノートを配布し、4月から1時限1名ずつ、その授業の感想や内容についての意見を書く、「仏陀の八正道はすばらしいが、とても私には実行できない」とか「今日の研究発表はすばらしかった、寺に行ってみたり、模造紙の字もわかりやすかった。みんなにわかりやすく説明したのが何よりだった」など倫社のコミュニケーションの場になっている。

#### キ. 年間レポートの作成

1人20枚以上、仏陀をテーマに選んだ者は仏陀を書く。提出は11月末。

ク. 定期テスト 5回 小論文も含む。仏陀の考えを日常生活と関連して。

ケ. 授業を録音テープにとる。逐語録をとり、反省を次の授業に生かす。

〔まとめ〕 仏陀の思想の学習に「ふれあい」の授業を目的としてやってみたが、生徒の感情の流れにそっていくには長い修練が必要だと感じた。



## わたくしの一学期の授業について

都立両国高等学校 小平 克

今年の一月から、「共通一次テスト」が実施されることになった。これまで、「倫理・社会」は大学受験にあまり関係がなかったので、授業を担当されている先生方は、かなり自由に、また、のんびり授業をされてきたようである。わたくしの場合は、二年生全員必修の教科であるということを考えて、授業そのものに興味をもたせるということをとくに留意して、指導要領の主旨と教科書の内容をふまえながら、独自に編成した授業をしてきた。そして、このことでかなり成功してきたと受け取っている。

ところが、「共通一次テスト」のあおりで、「倫理・社会」を受験科目に選ぶ生徒がふえ、また、授業をしている生徒のなかからも、どうして教科書にそった授業をしないのかという質問を受け、返答に窮するようになってきた。このような事態にたちいたって困惑しているのは、程度の差はあれ、他校とて同じであると思うが、わたくしの場合は、年間を通して、ほぼ完全に、授業を独自のプランで組み立てているので、とりわけ頭が痛いのである。

わたくしが、「共通一次テスト」のインパクトにどのように対処したらいいのか苦慮している事情を、一学期の授業に限って説明しよう。

わたくしは、一学期の授業を、「倫理・社会」の導入段階と考え、そこで、心理学を下地にした授業をしながら、なぜ「倫理・社会」を学ぶのかなぜ二学期以後先哲の思想を学ばなければならないのか、ということを生徒に納得させるようにしているので、一学期の授業の全体を、そうした意図にそって全く独自に編成している。そのため年間授業時数がかなり窮屈になっているので、年間授業計画を組み立て直すために、一学期の授業をかなり圧縮しなければならないと考えているのである。ところが、次

に述べる事情によって、それがうまくいかないのである。

わたくしは、「倫理・社会」の授業を組み立てる場合に最も重要なことは、あれやこれやをゴチャマゼに教えるのではなく、一つ一つの授業を、そこで何を学んだのかははっきりわかるように独立性をもたせ、それが前の前の授業内容を受け継ぎ、後の授業内容に引き継いでいけるように関連性をもち、しかも、内容的には、前の授業で学習したことをより広い視野とより高次の視点でとらえ直していけるような発展性をもたせて構成することであると考えている。このような観点に立って、わたくしは、これまで一学期の授業を、前半と後半にそれぞれまとまりをもたせながらあい関連させ、一つの完結した授業内容に組み立てていたのである。そのために、部分を適当にカットしてつぎはぎするということができないのである。だから、一学期の授業を圧縮するには、あらかじめ一学期の授業時数を決定し、その時間数に見合った内容を新しいプランにもとづいて構成し直さなければならないのであるが、新しい着想が仲々思い浮かばないのである。

前置はこのくらいにして、わたくしの一学期の授業のあらましを下記に紹介したい。どのような教材をどのように使っているのか詳しい説明はできないが、どのような観点に立って、どのような系統性を持たせているのかはご理解頂けると思う。

下に記したものは、今年度一学期の最初の授業に生徒に配布した「授業進度予定表」をそのまま示したものである。独自の授業を進めるため、生徒にあらかじめ授業内容を了解させておく必要があるのである。授業は、ほぼ予定通りに終了した。

1	<p>「倫理・社会」「倫理・社会」は、言葉の成り立ちからいって「人間とは何か、なぜ」とは何かを直接学習の対象にしている教科である。</p> <p>「倫理・社会」この間は、「いかなるものであるのか」と「いかなるものを学ぶのか。のであるべきか」の二つの間を含んでいる。</p>
---	--

2	「人間とは何か」を知ることが急務であるわけを考える。	アレキシス・カレル著「人間・この未知なるもの」の文章を読んで、彼の現代文明についての悲観的見通しの是非と、人間を知ることが今日極めて大切になっているという主張の是非を考える。
3	カレルの「生命の科学」の発達におよぼした功績を考える。	アレキシス・カレルの医学・生理学の発展におよぼした功績を確かめ、近年の「生命の科学」の驚異的な発達からみて、現代文明の危機の克服を「生命の科学」の発達に期待することができるかを考える。
4	人間を知ることの大切さと、難しさを考える	前の時間読んだ「アレキシス・カレルの言葉(その2)」の文章をもとに、彼の「科学的人間観」の視点と、それにもとづく人間改造・社会改造の見通しについてグループで検討し、討論の内容を発表する。
5	ナチズムとは何か、なぜナチズムが生まれたのかを考える。	ナチスという党名の由来とその政策綱領を確かめ、1930年代のドイツでなぜナチズムが急速に拡大したのかその経過を歴史的に追いながら、「第三帝国」成立の経済的背景と政治的背景を考える。
6	「ヒトラーの言葉」を読んで、ナチズムの特色を考える。	アドルフ・ヒトラー著「わが斗争」の文章を読んで、それぞれの文章の要旨をまとめながら、ナチズムとはどのような思想なのかを考えてみる。この後、ナチズムは私たちが生きている社会と無縁なのかを考える。
7	ナチズムを成立させた大衆の心	ナチズムの成立は、経済的・政治的な背景だけでなくそれを支えた大衆の心理を考慮に入れなければ説明が

	について考える	つかないことを確かめ、この問題を考察したエーリッヒ・フロムの分析の視点を紹介する。
8	「自由からの逃走」の文章をもとに現代人の生き方を考える。	エーリッヒ・フロム著「自由からの逃走」の文章を読んで、「自由からの逃走」がなぜ生れるのか、彼はその心理構造をどのように分析しているのかを確かめ、現代人が無感動・無気力になっている背景を考える。
9	現代人の「社会的性格」についての分析を紹介する。	「社会的性格」とは何かを確かめた後、エーリッヒ・フロム著「人間における自由」の分析と、デヴィッド・リースマン著「孤独なる群衆」とそれに関連してルース・ベネディクト著「菊と刀」の視点を紹介する。
10	無意識の心を分析する方法はいかにして成立したのかを考える	精神分析学の確立者ジグムント・フロイトの業績を確かめた後、NHKの放送の録音で藤田克躬教授の話を聞き、「ヒステリー研究」でとり上げているミス・ルーシーの事例をもとに無意識の心理構造を考える。
11	人間を内から突き動かす無意識の心の不思議さを考える。	池見酉次郎著「愛なくば」の文章を読み、そこに記されているサヨミちゃんが、なぜそのような重症の身体障害児になったのか、その要因を分析する。その後でロバート・ウェルダ著「フロイド入門」を読む。
12	欲求不満とは何か、どのような条件だと生れるのかを考える。	欲求不満とは何かを確かめた後、各自が欲求不満が生れる原因をカードに書き、それをグループで集約して発表する。その後で、現代社会に生きる高校生の立場で欲求不満を強めている背景を分類整理して説明する

13	<p>欲求不満を合理的に解決していくための条件は何かを考える。</p>	<p>ミラーとダラードの「欲求不満＝攻撃説」を紹介する。欲求不満を合理的に解決するには、知性と耐性が必要であることを確かめ、その知性と耐性がどうして形成されるのかを「学習」の発達などを通して考える。</p>
14	<p>防衛反応とは何か、どのような類型があるのかを考える。</p>	<p>宮城音弥著「精神分析入門」の文章を読んで、防衛反応とは何か、どのような分類があるのかを確かめたあと、それらの理解を深めるために、受験に失敗した場合の具体例をグループで考え、比較検討する。</p>
15	<p>「異邦人」についてどのような解釈が成り立つのかを考える。</p>	<p>アルペール・カミュ著「異邦人」のあらすじを読み、主人公ムルソーの生き方についてどう思うかを質問する。この後、作者の見解を紹介し、ナタン・ライトの精神分析的解釈を城戸浩太郎の論文を通して確かめる</p>
16	<p>ムルソーの人生観とその行動の現代的意味を考える。</p>	<p>「異邦人」の主人公ムルソーは、なぜ死んだアラビア人の体に四発の弾丸を打ち込んだのかを考える。討論の後、ロロ・メイ著「失なわれし自我を求めて」の文章を読んで、ムルソーの行動の特異性を解釈してみる</p>
17	<p>「車輪の下」の主人公ハンスはなぜ挫折したのかを考える。</p>	<p>ヘルマン・ヘッセ著「車輪の下」のあらすじと、「車輪の下」の抜粋のプリントを読んだあと、「ハンスはなぜ勉強をつづけることができなくなったのか」ということについて、グループで話し合いをする。</p>
18	<p>自我の独立と、その独立を妨げ</p>	<p>前時のグループの話し合いをもとにして作った仮説をグループの代表者が発表する。その後で、解釈の視点</p>

	るものはなにかを分類し、「車輪の下」の書名は何を意味しているのか、何をこの書で訴えようとしているのかを考える。
19	ハンスの挫折と西平直喜の論文「自我同一性」の文章を読み、青年期 青年期の自我の自我はどのようにして発達するのかを知り、その発 成長過程との関達をもたらす危機が、ハンスの挫折にも関係していた わりを考える。のではないかを考えながら、青年期の心理を確かめる
20	現代人の非人間人間らしさを回復していく方向を、エーリッヒ・フロム著「自由からの逃走」の文章を通して考える。自我 化の方向を克服ム著「自由からの逃走」の文章を通して考える。自我 する見通しを考の現現は知的洞察だけでは不可能であるというフロム える。の指摘を通して、グループ研究の意味を考えてみる。

授業についての生徒の感想は、一学期の終了直前、9クラス全員に、○×式、記述式の二種提出させているのであるが(したがって、最後の授業の感想は確かめることができなかった)、集計はとりあえず、2クラスだけを確かめてみた。2クラス合せて91人である。下記に、その○×式の感想の結果を、参考までにお知らせする。

○印一個は10人を、○印一個は5人を表示している。尚、端数は、3人までは切り捨て、4~6人は○印、7~9人は○印で表示した。

また、質問に対して肯定するものは上段に○印またはD印で示し、否定するものは下段に●印またはB印で示した。どちらでもないものは省略した。数字は、肯定者・否定者のパーセントである。

	よくわかった。	興味をひいた。	得るところ多い。	進め方これでよい。	今後もとりあげてよい
1	○○○D ● B 37 : 15	○○○D ● B 37 : 14	○○○ ● 36 : 12	○○○○D ● 49 : 12	○○○○D ● 50 : 13

	よくわか った。	興味をひい た	得るとこ ろ多い。	進め方こ れでよい	今後もと りあげてよ
2	○○D ●●30:19	○○○○○ ●D 54:15	○○○○ D 45:8	○○○○ ● 47:12	○○○○○ ● 57:10
3	○○○ ● 34:14	○○○D ●● 38:20	○○○) ●D 40:18	○○○○ D 47:8	○○○○ ●●42:21
4	○○○ ●D 33:19	○○○○ ●D 44:16	○○CD ●D 37:16	○○○○D ●D 51:16	○○○○ ● 57:12
5	○○○○○D D 59:4	○○○○○○D D 70:6	○○○○D ● 48:14	○○○○○○ D●70:7	○○○○○○ D 65:7
6	○○○○○ D 53:7	○○○○○○ D 63:7	○○○○D ● 51:12	○○○○○ ● 55:11	○○○○○D D 60:8
7	○○○○D ● 49:11	○○○○○○ ● 65:9	○○○○ ● 46:11	○○○○○ D 53:8	○○○○D ● 52:12
8	○○○ ● 32:12	○○○○D ● 49:12	○○CD ●D 41:18	○○○○ ● 46:12	○○○○ ●D 46:12
9	○○○ ●D 33:18	○○○○ ●● 42:22	○○○ ● 32:10	○○○ ● 35:10	○○○D ●D 38:15
10	○○○○ ●D 46:15	○○○○○○ ● 57:13	○○○ ● 34:11	○○○○ ● 42:13	○○○○○ ● 56:13
11	○○CD ● 37:13	○○○○○D ● 59:12	○○○D ● 48:14	○○○○ ● 45:12	○○○○ ● 56:12
12	○○○○○○ D 67:7	○○○○○○○D D 70:5	○○○○ ● 55:9	○○○○○ D 59:5	○○○○○○ D 65:5
13	○○○D ● 38:10	○○○○○D ●D 59:18	○○○○D ● 48:9	○○○○○ ● 55:10	○○○○○ ● 58:9

	よくわか った。	興味をひい た。	得るとこ ろ多い。	進め方こ れでよい	今後もとり あげてよい
14	○○○ ● 34 : 12	○○○○D ● 52 : 15	○○○D ● 38 : 14	○○○○○ ● 58 : 8	○○○○D ● 49 : 13
15	○○○D ● 40 : 12	○○○○○○○ ● 67 : 7	○○○D ● 38 : 13	○○○○○ ● 57 : 9	○○○○○ ● 57 : 7
16	○○○ ● 35 : 15	○○○○○○○ ● 69 : 7	○○○D ● 42 : 12	○○○○○ ● 56 : 13	○○○○○ ● 54 : 7
17	○○○○○ ● 54 : 5	○○○○○○○ 75 : 1	○○○○○ 55 : 1	○○○○○D ● 63 : 7	○○○○○ ● 65 : 5
18	○○○○○ ● 54 : 5	○○○○○○○D 70 : 3	○○○○○D 51 : 3	○○○○○ ● 65 : 4	○○○○○ ● 66 : 4
19	○○○ ) ● 40 : 14	○○○○○ ● 44 : 9	○○○○D ● 48 : 11	○○○○○ ● 45 : 8	○○○○D ● 50 : 9

この生徒の感想の集計を見て、近年とみに多様化し、全体的に学力が低下している本校の実情にかんがみて、わたくしの授業は、おおむね生徒に受け入れられていると、わたくしは判断している。

細部にわたって補足すれば、アレクシス・カレル著「人間・この未知なるもの」、エーリッヒ・フロム著「自由からの逃走」などの文章の読解を中心にした、抽象的な説明の多い授業は、あまり好意的でないことがわかるが、授業そのものに否定的であるというまでにははいたっていないということ。逆に、ヒトラーの思想、欲求不満、ヘルマン・ヘッセの「車輪の下」などを扱った授業には興味を多く示しており、とくにグループ討論をとり入れた授業には関心をもってきているようである。以上のことは、わざわざ集計しなくても予想できたことであるが、どのくらいの生徒が、同調的であり拒否的であるのかを数値的に確かめてみたかったのである。



最後に、上記の授業内容を今後どのように改善していくべきかを述べた  
いところであるが、その見通しは、前述の通り全くたっていない。

蛇足をつけ足すなら、昨年秋、わたくしが教えている二年生の男子生  
徒が、精神障害を苦しめていたことが自殺している。また、昨年の暮  
新聞でも大きくとり上げられたが、わたくしが教えた三年生の女子生徒が  
自殺してしまった。今年度になって、これまで余所事と思っていた生徒の  
自殺に相継いで遭遇し、わたくしの授業が、生徒の悩みや苦しみとどこか  
ですれ違っているのではないかと考え込まざるを得なかった。ますますど  
うしていいかわからないという心境である。

# 授業展開の方法のための試案（その1）

帝京高校 近藤 卓

はじめに

講義を中心とした授業は、当然のことながら教師が主導権を握って進められるから、一定の予定された進度が消化できるという点で、他の方法の形式の授業に数段勝っているといえよう。しかし反面、教師が進度を急ぐあまり、生徒の理解の不十分なりちに先へ進んでしまいか、生徒が受け手一方にまわってしまう場合も、応々にして起こりがちであるから、そうした場合の弊害を事前に防ぐための十分な配慮が必要であろう。授業内容と生徒の意識をできる限り近くへ引き寄せ、或は重ね合わせることを目ざして授業が展開されるのは当然のことである。そこで、より抵抗を少なく生徒を教師のペースに乗せることが、まず第一段階である。生徒の意識を始動させ、加速させ、走り続けている教師のペースにまで高めねばならないのだから、容易なことではない。

ww

## (1) 教師のペースづくり

教師自身が日夜休むことなく研鑽にはげみ、先哲の思想の歩みのあとを自ら追体験し、様々な社会現象に対する問題意識をもち続ける努力が、まず必須のこととなる。しかしながら、こうして培ったことが、授業の場面で表現できなければ、教師の立場は無意味なものとなってしまふ。従って、そうした教師の態度を生徒の意識に反映させるための工夫が要求される。

その際、講義中心の授業で陥りやすい欠点を未然に防ぐために、事前の綿密な準備が大切である。例えば、授業の流れを、時間配分をも考慮に入れて図式化してみる方法が考えられる。50分間の授業のプログラムをつくる訳である。このプログラムを、フローチャート式に表現し、カードに記

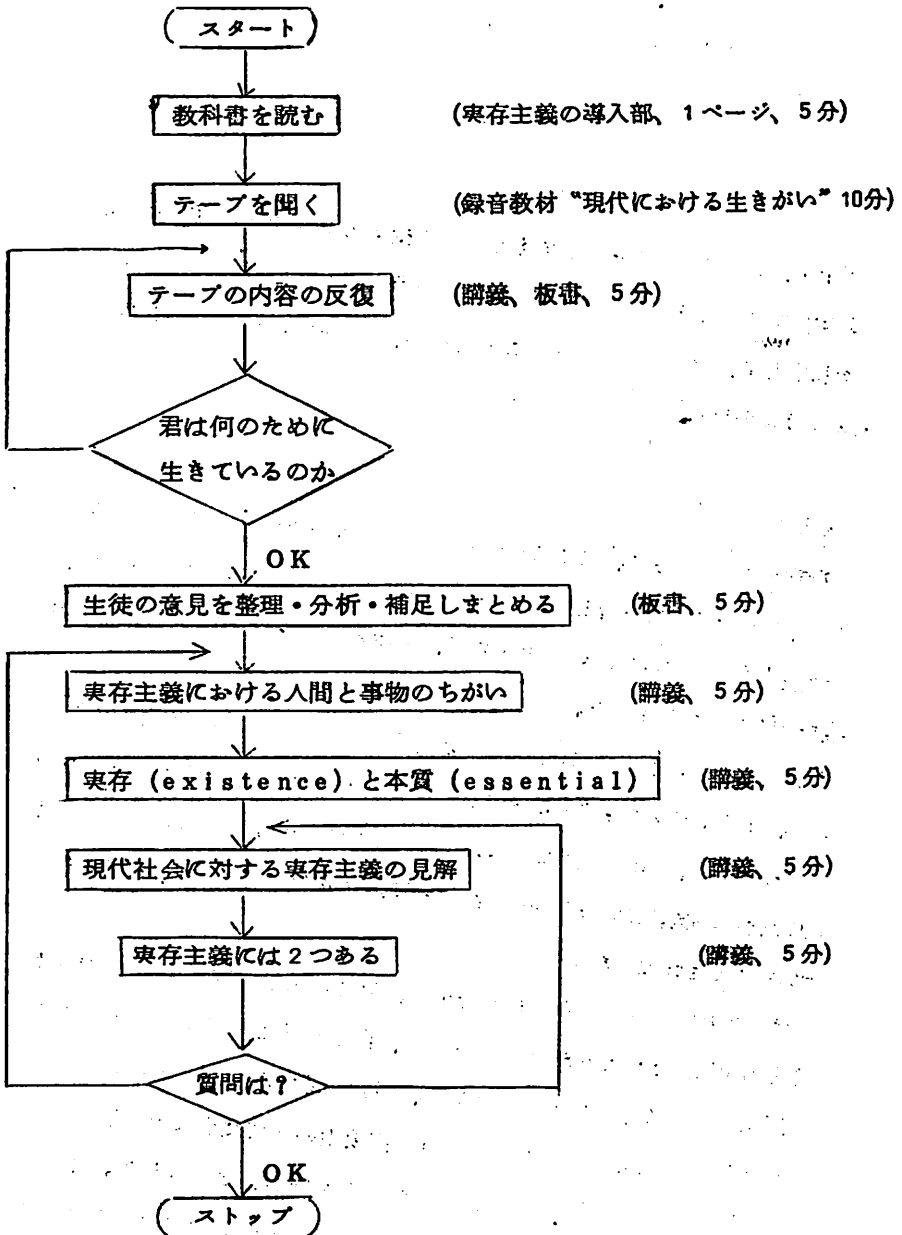
録しておく。授業の際は、このプログラムから大きく逸脱することのないように注意する。こうして一度授業を行えば、そのプログラムのある部分を手直しし、書き加え、或は全面的に書き改めることによって、更に完成度の高いものがつくられる。このカードは、単なる板書事項の覚え書きや、いわゆる教授資料とは異なるものとなるであろう。これはあくまでもカードであって、一枚一枚が独立したものであること、またその独立した一枚が50分の授業一回分となること、従ってカード順番を変更したり、新たなカードを付け加えたり、必要なものだけを抜き出したりする操作を行えば、学期間あるいは年間の授業展開を検討する際の助けとなる等の利点が考えられる。

## (2) ある授業の例

ここに示したフローチャートは、4回の授業で取り扱った実存主義思想のうち、第1回目の授業のためのものである。

まず時間のはじめに、今日のテーマは実存主義であることを宣言し、教科書の該当ページ（実存主義の導入部、約1ページ）を指名して音読させる。次に、市販されている録音教材のテープ（本の朗読）を聞かせ、その内容を反復し解説することによって、生徒の関心を向けさせる。次に、「さて君は何のために生きているのか」と発問し、数人の生徒から答を引き出す。生徒から出た意見を整理し分析する。（例、①目的に向かって、目的を達成するために生きる、②生まれてきてしまったから、しかたなく生きる）。そこで、実存主義は人間と事物に対する考え方が全く異なり、実存と本質という概念が、その根底にあることを解説する。さらに、現代社会の疎外状況に対する実存主義の見解を述べ、実存主義には2つあるが、そのどちらにも共通して「目的自体としての人間」という考え方があることを再度述べ、講義を終る。授業のしめくくりとして質問を受けつけ、それに応じて再度説明をくり返したり補足したりする。

実存主義(1)



以上が、このフローチャートでもくろんだ授業のプロセスの例であり、実際の授業でもほぼこのようなパターンで実行している。もちろん授業の内容に応じて、できる限り多様な教材を用い、その際は極力原典に触れさせるように努める。

#### まとめ

本稿執筆にあたって、ここで述べたプログラムを実際に行なった授業をテープレコーダーで録音し聞いてみた。予期していたことではあったが、その現実を自らの耳で聞いて確かめて、生徒とのギャップのあまりの大きさに愕然としてしまった。

特に、「君は何のために生きるのか」という問と、生徒の答とのかけあいが、まるでギクシャクしていて、それでも何とか予定の結論へ導びこうとするために、かなり強引な引っぱり方をしてしまっている。テープの朗読には相当真剣に耳を傾け聞いていたのに、その雰囲気とその後の授業展開に生かしきれていない。

テープレコーダーから流れる音声や、教師の話しかける声を聞く態度はむしろ上出来といえる程度であるのに、自分の考えを要領よくまとめて発表する習慣になじんでいないために、対話の部分がスムーズに流れなかったのだと思われる。こうしたことは、高校生の間ではかなり一般的な現象だと思うので、教師の側での、より緻密な準備が必要とされる。従って、今回のフローチャートでも、この部分はもう少し細かなプログラミングを行なった方が、より良い結果を期待することができたのではないかと、思われる。

# 東京都高等学校「倫理・社会」研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校「倫理・社会」研究会といたします。
2. (目的) この会は会員相互によって、高等学校社会科「倫理・社会」教育を振興することを目的とします。
3. (事業) この会は、次の事業を行ないます。
  - (1) 「倫理・社会」教育の内容および方法などの研究
  - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
  - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. (事務局) この会の事務局は原則として会長在任校におきます。
5. (会員) この会の会員は次の通りです。
  - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
  - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人
6. (顧問) この会に顧問をおくことができます。
7. (役員) この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
  - (1) 会長 (1名)
  - (2) 副会長 (若干名)
  - (3) 常任幹事 (若干名)
  - (4) 幹事 (若干名)
  - (5) 会計幹事 (若干名)
8. (総会) 総会は毎年6月に会長が召集し、次のことを行ないます。
  - (1) 役員を選任
  - (2) 決算の承認、予算の議決

(3) その他重要事項の審議

9. (年 度) この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わります。
10. (経 費) この会の活動に必要な経費は、会費その他の収入でまかないます。  
会費は次の通りです。  
(1) 正 会 員 学校または研究団体を単位として年額  
1,500円  
(2) 賛助会費 年額 1口 2,000円
11. (細 則) この会の規約を施行するについて、幹事会は必要な細則を作ることができます。
12. (規約の変更) この会の規約の変更は、総会の議決によります。

附 記

1. この規約は昭和37年11月20日から施行します。
2. 昭和42年度総会で、会計年度と会費の変更がまとめられた。

# 事務局組織内規

昭45.127

全倫研 共通  
都倫研

1. 事務局は原則として会長校におく（都・全倫研とも規約改正の要あり）
2. 事務局組織は下記の通りである。

事務局長 原則として会長校に所属する

事務局顧問 歴代の事務局長があたる

事務局員

- ア 事務局次長（1名）
- イ 研究部長・副部長（各1名）
- ウ 研究調査部（全倫研のみ6名）
- エ 広報係（全・都各1名）
- オ 会計（1名）
- カ 分科会世話人（都倫研のみ、分科会互選・分科会で2名）
- キ 大会役員（大会ごとに委嘱する）

### 3. 事務局分掌

事務局長 企画・運営・渉外などの会の実質的な事務にあたり会長を補佐する。

事務局顧問 同上の目的で事務局長を補佐し助言する。

事務局員 事務局員は各分掌にあって、会の運営を円滑にするため局長を補佐する。

- ア 事務局次長 事務局長を補佐する。
- イ 研究部 会の年間の研究方針をたて、研究活動全体を運営し紀要の刊行にあたる。分科会世話人は研究部に属し部長を補佐する。



ウ	調査研究部	調査活動の企画・実施・集計・分析等にあたる。
エ	広報係	会の記録、広報活動、会報、名簿の作成にあたる。
オ	会計	会の会計にあたる。ただし局長が代行することもできる。
カ	大会役員	事務局長 企画・運営の最高責任をもつ。 庶務・連絡 局長を補佐する。 受付・会計 文書配布物、名簿の作成、会計にあたる
	司 会	総合司会、研究発表、研究討論、懇談会の司会
	議 長	総会議長
	記 録	会の広報部を中心にして組織、文書記録、テープ、写真
	接 待	来賓その他の接待

#### 4. 事務局任期

ア 事務局長は原則として2年とする。

イ その他の局員は1年であるが、再任、兼任をさまたげない。

#### 5. 人 選

事務局長の人選は幹事会でみとめられた人事委員会があたる。

人事委員会の人選は、会長と事務局長が、原案をつくり幹事会にはかる。

また会長・局長・顧問は原則として委員会のメンバーに入ることとする。

ただし、事務局員の人選は会員の互選による。

(この内規は昭和45年度以降実施する)

## 事務局より

都立清瀬高等学校

小川輝之

53年度の活動は5月30日の総会から始まりました。総会で承認されました研究テーマ「倫理・社会のねらいをどう生かしていくか」を3つの分科会に別れて取り組んでまいりました。その成果が、紀要第17集としてまとめられることになりました。紀要刊行までには多くの先生方の熱心な活動と無理なお願いでも心よくお引き受けいただきましたご厚意がありました。特に、全倫研秋季大会を含めて4回の例会を支えていただきました先生方や毎月の分科会活動に遠くから馳せ参じていただいた諸先生のご熱意こそ都倫研の活動を支え、紀要刊行を可能にしたものとかたく信じています。

小規模な研究団体である都倫研が他の研究団体にも匹敵できるほどの活動を行なうことができるのも、先生方の「倫理・社会」に対する愛着の強さと、これまでの倫社教育に対する誇りばかりでなく、現在各学校現場で抱えている諸問題を倫社の立場から解決していこうとする熱意と、そのため都倫研に対する献身があるからだと思います。岡本会長先生が人間のあり方や生き方を問題とする「倫理」を選択にすべきではないという高い理念を肝に銘じながらも、当面の課題である「現代社会」にも取り組んでいかなければならないと思います。

最後になりましたが事務局次長の細谷斉先生、この紀要をまとめられました佐藤勲先生、海野省治先生、渋谷紀夫先生、各分科会の世話人の先生方、会報を担当されました内田君夫先生、章名次夫先生、その他事務局の先生方に心からお礼申し上げます。

54年度の活動も事務局一同でがんばりたいと思いますので、東京都の公・私立の先生方どうぞご支援とご協力をよろしくお願い致します。

## あ と が き

昭和53年度の研究部は海野・渋谷・佐藤が各々3分科会の世話人の1人として、また沼田、海野両氏には特別分科会の世話人として、研究会を進めてまいりました。

昨年度の若い先生方の日曜も厭わない活躍に比べて、第1、第2分科会の集まりが質量とも貧弱に終わってしまった。第3分科会と特別分科会の活動が積極的に進んだと思われます。

折角芽生えつつある若々しい「新しい波」が、このまま萎んでしまわないように、昭和54年度の研究部の役割はいよいよ重要になってきている。

無気力化、低俗化しつつある生徒にとって生々とした「倫理・社会」の授業をどのようにやったらうまくいくか、どんな教材がより適切であるかと日頃悩みながら努力している私達教師にとって、ますますこの都倫研の研究会は必要なものであると思われます。

しかし毎日毎日の授業、ホーム・ルーム、文化祭等々とますます多忙化しつつ教師が、疲れ切った放課後に分科会に顔を出すことは非常に困難になってきている現状下に、分科会活動を息長く続けていく意義を新たに考えていかなくてはならないのではないのでしょうか。

どうか、若い先生方の積極的な参加を期待しています。「倫理・社会」を生かすも殺すも私達の肩にかかっています。

なお最後に、分科会活動に積極的に参加された先生方、そしてこの紀要に執筆された各先生方に深く感謝します。

(佐藤勲記)

昭和53年度 都倫研紀要 17

発行 昭和54年3月25日 [非売品]

著作者 東京都高等学校「倫理・社会」研究会  
代表 岡本武男

印刷 尚 稲谷印刷所  
東京都千代田区有楽町1-9-4  
電話 (03) 212-8608~9

事務局 東京都清瀬市松山3-1-56  
東京都立清瀬高等学校内  
電話 (0424) 92-3500

発行者 東京都高等学校「倫理・社会」研究会